奥才古墳群第８支群

県道御津東生馬線改良工事に伴う調査

２００２年３月

島根県松江土木建築事務所
鹿島町教育委員会

奥才古墳群第８支群

県道御津東生馬線改良工事に伴う調査

例　　言

1．本書は、島根県松江土木建築事務所の委託を受けて、鹿島町教育委員会が実施した奥才古墳群第８支群の発掘調査の記録である。

2．調査地は、島根県八束郡鹿島町大字名分1436－４に所在する。

3．調査は、平成12年７月14日から平成13年８月13日まで、２か年度にわたって行った。調査の体制は以下のとおりである。

調査主体	鹿島町教育委員会　教育長　黒田章義
事務局	鹿島町教育委員会　教育次長　青山基一（平成13年３月まで）
	鹿島町教育委員会　教育次長　古瀬　勉（平成13年４月から）
調査指導	田中義昭（元島根大学法文学部教授）
	渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）
	和田晴吾（立命館大学文学部教授）
	木下　良（古代交通研究会会長）
	木本雅康（長崎外国語短期大学助教授）
	山内靖喜（島根大学総合理工学部教授）
	石井　悠（安来市立安来第二中学校教諭）
	足立克己（島根県教育庁文化財課主幹）
	椿　真治（島根県教育庁文化財課文化財保護主事）
調査員	赤澤秀則（鹿島町教育委員会文化振興係長　調査担当者）
	川西　学（鹿島町教育委員会文化振興係主事）
	中村丈二（鹿島町教育委員会嘱託　平成13年２月まで）
	徳永　隆（鹿島町教育委員会嘱託　平成13年10月から主事補）
	徳永桃代（鹿島町教育委員会嘱託）
	坂上祐一（鹿島町教育委員会嘱託　平成13年４月から）
	八木　修（鹿島町教育委員会嘱託　平成13年10月から14年３月まで）
作業員	安達普也、安達徳重、青山久仁美、青山佐千穂、石津仁吉、伊藤静香、井上忠志、柏木真理子、川谷恵六、木村　悟、草木京子、小澤千鶴、小下　也、佐藤一男、曽田真佐美、田角由香、田淵由紀子、松浦安子、松浦尚美、山本晴雄
調査協力	岡　庸道（町立財保護審議会委員）
遺物整理	中島美喜子（町立歴史民俗資料館）、瀬田明子、丹羽野輝子、井上忠志

4．調査にあたっては、松江土木建築事務所工務第１課、鹿島町役場建設課に協力いただいた。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

5．調査にあたっては、国土座標を基準として10×10mを１単位とする方眼を調査地に設定した。したがって挿図中の矢印は、国土調査法による第Ⅲ座標系Ｘ軸の方向を示している。

6．現地調査および報告書の刊行に当たっては、以下の方々に有益なご教示をいただいた。記して感謝の意を表させていただきます（敬称略）。

松本岩雄、池淵俊一、深田　浩、松山智弘（以上、島根県埋蔵文化財調査センター）、竹広文明（島根大学汽水域研究センター）、藤井　整、福島孝行（以上、京都府埋蔵文化財調査研究センター）、山内英樹（財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター）、岡　和彦（國學院大學文学部）、平野卓治（横浜市歴史博物館）

7．掲載図面の縮尺は、等高線図1/200、遺構図1/40、土層図1/100、出土土器1/3、鉄器1/2、玉1/1を原則としているが、これに従えないものもあり、それについては、その都度縮尺を明記するようにした。

8．出土遺構・遺物の整理、実測、写真撮影等は、調査員、遺物整理員が行い、Ｘ線写真については、島根県埋蔵文化財調査センターで撮影をしていただいたものである。

9．本書中の石材についての記述は、島根大学総合理工学部山内靖喜教授のご教示によっている。

10．本書の執筆分担は、目次に記すとおりである。

11．出土遺物は鹿島町立歴史民俗資料館において保管している。

目　次

例言
1…赤澤……Ⅰ．調査の経過
2…〃……Ⅱ．位置と歴史的環境
4…〃……Ⅲ．調査の概要
4…〃……1．調査の方法
4…〃……2．支群構成
8…川西……3．55号墳
9…德永隆……4．56号墳
13…德永桃……5．68号墳
15…〃……6．番外1号墓
16…〃……7．57号墳
18…川西……8．58号墳
21…德永桃……9．59号墳
22…德永隆……10．60号墳
23…川西・德永桃……11．61号墳
26…德永桃……12．65号墳
27…赤澤……13．67号墳
31…德永隆……14．62号墳
33…德永桃・坂上……15．63号墳
36…坂上……16．64号墳
42…坂上……17．66号墳
43…中村……18．K区
43…八木……19．1号道
46…赤澤……20．2号道
48…坂上……21．3号道
50…坂上……22．4号道
50…川西……23．K区出土遺物
50…川西……24．支群出土遺物
53…赤澤……Ⅳ．小結

挿図目次

図1　鹿島町位置図……1
図2　南講武草田遺跡出土土器……2
図3　奥才古墳群と周辺の遺跡……3
図4　奥才古墳群全体図……5
図5　調査前測量図……6
図6　調査後測量図……6
図7　55・56・57・68号墳測量図……7
図8　55号墳土層図……8
図9　55号墳主体部実測図……8
図10　55号墳出土遺物実測図……8
図11　56号墳土層図……9
図12　56号墳第1主体部実測図……11
図13　56号墳第1主体部出土遺物実測図……12
図14　56号墳第2主体部実測図……12
図15　68・57号墳土層図……13
図16　68号墳主体部実測図……14
図17　68号墳主体部石材拓影……14
図18　68号墳出土遺物実測図……14
図19　番外1号墓実測図……15
図20　57号墳第1主体部実測図……16
図21　57号墳第1主体部出土遺物実測図……17
図22　57号墳第2主体部実測図……17
図23　57号墳第2主体部出土遺物実測図……17
図24　58・59号墳土層図……18
図25　58・59・60・61・65・67号墳測量図……19
図26　58号墳第1・第2主体部実測図……20
図27　58号墳第1主体部出土遺物実測図……20
図28　59号墳主体部実測図……21
図29　59号墳出土遺物実測図……21
図30　60・61号墳土層図……22
図31　60号墳主体部実測図……23
図32　61号墳第1主体部実測図……24
図33　61号墳第1主体部出土遺物実測図……24
図34　61号墳第2主体部実測図……25
図35　61号墳第3主体部実測図……25
図36　61号墳第3主体部出土遺物実測図……26
図37　65号墳土層図……26
図38　65号墳主体部実測図……26
図39　65号墳出土遺物実測図……26
図40　67号墳実測図……27
図41　67号墳主体部実測図……28
図42　67号墳出土遺物実測図……29
図43　62・63・64・66号墳測量図……30
図44　62号墳土層図……31
図45　62号墳第1主体部実測図……32
図46　62号墳第1主体部出土遺物実測図……32
図47　63号墳土層図……33
図48　63号墳第1主体部実測図……34
図49　63号墳第1主体部出土遺物実測図……34
図50　63号墳第2～第6主体部実測図……35
図51　63号墳第2・第3主体部出土遺物実測図……36
図52　64号墳土層図……36
図53　64号墳遺物出土状況図（1）……37
図54　64号墳遺物出土状況図（2）……37
図55　64号墳出土遺物実測図（1）……39
図56　64号墳出土遺物実測図（2）……40
図57　64号墳出土遺物実測図（3）……41
図58　66号墳土層図……42
図59　66号墳周溝実測図……42
図60　1号道出土遺物実測図……43
図61　1～4号道測量図……44
図62　K区土層図……45
図63　2号道盛土上面石材出土状況図……46
図64　2号道盛土土層図……47
図65　3・4号道実測図……49
図66　3・4号道出土遺物実測図……51
図67　K区出土遺物実測図……51
図68　K区・支群出土遺物実測図……52
図69　奥才古墳群主体部の変遷……54
図70　奥才型木棺とそれに準ずる木棺の分布……55

表　目　次

表1　奥才型木棺とそれに準ずる木棺が伴う古墳一覧…57
表2　箱式石棺に礫床が伴う古墳一覧……58
表3　箱式木棺に礫床が伴う古墳一覧……59
表4　奥才古墳群第Ⅲ支群遺構一覧……59

Ⅰ. 調査の経緯

奥才古墳群では、1981～1983年に住宅団地造成に伴い26基の古墳の調査をおこなっている。この調査は、第Ⅲから第Ⅳ支群にかけてのもので、古墳時代前半の礫床をもつ箱式石棺や箱式木棺が主体部のかなりの割合を占め、14号墳では多数の箱式石棺から内行化文鏡、方格渦文鏡、紡錘車形石製品、素環頭大刀などが、34号墳では墳丘中央に埋められた壷から石釧、捩文鏡、竪玉製の勾玉などが出土している。その成果は、1985年に『奥才古墳群』として刊行している。

2000年春、松江土木建築事務所が計画していた県道御津東生馬線の改良工事に先立ち分布調査をおこなったところ、先年の奥才古墳群と尾根を違えながらも古墳12基の所在が新たに判明し、うち11基が工事区域内に所在することがわかった。

このため、奥才古墳群第Ⅶ支群として遺跡発見の手続きを行った。工事実施が目前の発見であったが、松江土木建築事務所に路線変更や擁壁ブロック工法などによる古墳群の現地での保存方策の検討を依頼した。県教育委員会文化財課を交え、県土木課、松江土木建築事務所との協議をおこなったが、最終的にルート変更は代替地が確保できる見通しがない、地盤が軟弱で擁壁ブロック工法はとりづらく、また、この工法によってもかなりの古墳の調査は生じることから、工事によって掘削される範囲の古墳について、2000、2001年度で調査をおこなうこととした。

調査は、松江土木建築事務所からの受託事業として、2000年7月14日から開始した。

調査の開始後、最高所にある56号墳などは、剝抜きの木棺を使用し、墓壙上に鼓形器台を伴うなど、前回調査の古墳群より古い様相がうかがえた。また、尾根上の鞍部、斜面部にも小規模な墳丘の所在が判明し、最終的にこの支群は16基以上からなり、その内の14基の調査を行ったこととなる。一方、古墳と考えていた63号墳は、明瞭な墳丘をもたず、出土土器から弥生時代後期の土壙墓群と判明し、古墳群には直接続かないものの、古墳群の築造前に墳墓群としての尾根の利用が判明した。本書では便宜上「63号墳」と表記しているが、弥生時代の墳墓である。

一方、64、66号墳は、須恵器を伴い、他の古墳と異なり古墳時代後半に位置付けられるものと判明した。いずれもやや斜面側に位置し、丘陵高所側に半円形の溝を廻り、墳丘を盛土で築造するものであった。いずれも主体部は流失していた。

一方、調査区北端の小尾根と考えていた部分は、近世の盛土によるもので、その下部に中世以前まで遡りうる古道が埋没することが判明した。当初予想をしていなかったが、工事が開始されれば削平される部分にあるため、急遽範囲に含めて調査を行った。盛土は厚いところで3mにもなり、この除去には重機を投入して排土を行った。検出した2号道は片側の斜面が高さ7mにもなる直線的な道路で、砂利で舗装し、両側に側溝をもつ規格的なものであることが判明した。さらに検出した3本の古道もあわせて調査した。地元で付近には「殿さん道」があったとの伝承があり、その名称から予想される規模には1号ないし2号道が該当するものと考えられる。

2号道盛土は赤色と黄色の土砂が互層状に積まれていたため、第1、第3トレンチでこの断面を剥ぎ取り、調査終了後も観察、公開できるようにした。

これら古道は当初の調査予定になく、さらに64号墳墳丘盛土の全てを除去する必要から、松江土木建築事務所と協議し、若干の期間延長と費用の増額を得て、最終的に2,200m²の調査を行った。

これら経緯を経て、2001年7月12日には報道関係者への公開を、7月14日には現地説明会を開催し、約50名の参加を得た。また、調査期間中にも、小、中学生の見学、調査体験学習を受け入れるなど、公開に努め、8月13日に現地作業を終え、撤収した。

古墳群の調査終了後の取扱いについては、県教育委員会とも協議の上、9月8日付で工事対象地外に残る古墳群について十分な保護を行うことなどを留意点に付し、工事実施はやむをえない旨を松江土木建築事務所あて回答した。

なお、調査中の2000年10月6日、鳥取県西部地震で現場も大きく揺れ、以後2次災害に留意した。

現地調査終了後は、整理作業を開始する一方、町立歴史民俗資料館で特別展「古墳出現－奥才古墳群からみる前期古墳の様相－」として、10月19日から翌年1月20日まで成果の連報展示を行い、同名の特別展図録の刊行も行った。

図1　鹿島町位置図

Ⅱ．位置と歴史的環境

島根半島のほぼ中ほどに位置する講武盆地は、半島部では持田・川津平野とならぶ広い耕地面積を持ち、その水田は180haに及ぶ。この盆地は谷奥から流れだす講武川によって運ばれた土砂による沖積地で、肥沃な耕作地となっており、古代から中世にかけてのものと考えられる条里が敷かれていたことも知られている。

縄文時代　この盆地内および鹿島町域内での縄文時代は佐太講武貝塚[1]から始まる。大字佐陀宮内側に所在する貝層は、前期の所産で、貝塚を構成する貝は、ほとんどが汽水性のヤマトシジミで占められ、鹹水産のものはわずかである。このことは、この貝塚が形成された縄文時代前期、この周辺部が潟湖として干こうした貝の成育に適した環境にあったことが知られる。貝塚は南北にそれぞれ潟湖をひかえる分水嶺に位置しており、地形的にも卓越した位置を占めていたことが明らかになった。しかし、貝塚を形成した人々の集落などはいまだ明らかでない。

また、貝層の東側には深い谷が所在し、この低湿地部分は前期から古墳時代にいたる遺物包含層となっている[2]。

これら以外の縄文時代遺跡は多くは知られていないが、講武盆地内の堀部第１遺跡では後期土器が大量に出土している。また、北講武氏元遺跡[3]では晩期系の突帯文土器群と弥生前期土器がともに出土し、至近の堀部第１遺跡でも晩期の遺物が出土しており、縄文時代の遺跡の動向についても徐々にではあるが明らかになりつつある。

弥生時代　弥生時代には、先述の北講武氏元遺跡で縄文晩期系の土器と弥生時代前期の土器がともに出土しており、この講武盆地で初期水田が開発されたことが予想される。一方、堀部第１遺跡では弥生時代前期の標G墓50余基が円丘を取り巻くように検出されており[4]、木棺も良好に残存しており、初期農耕民の集団墓地と考えられる。

また、大字古浦の古浦砂丘遺跡[5]では、前期から中期の集団墓地が調査されている。ここでも未検出だが、「恵曇陂」周辺での初期農耕が成立していた可能性がある。一方、盆地西南端に位置する大字佐陀宮内にも弥生前期からの佐太前遺跡[6]が存在する。部分的な調査しかないが、各時代にわたる大量な遺物、遺構が存在するようで、付近の拠点集落とも目される遺跡である。

この盆地からは離れるが、「恵曇陂」の南岸の山懐には、銅鐸２、銅剣６を埋納した志谷奥遺跡[7]がある。やはり「恵曇陂」の岸辺に位置すると考えられる稗原遺跡では、弥生時代に中心をもつ大量の木製品が出土しており、周辺にかなりの規模の集落の存在を予想させる。

再び講武盆地内では、中期の遺物を出土した名分塚田遺跡[8]、四隅突出型墳丘墓の可能性のある南講武小廻遺跡[9]が知られ、また弥生時代末から古墳時代前期の近畿系の土器が大量に搬入された木棺墓群、南講武草田遺跡[10]が知られている。ここでは近畿系をはじめとする搬入土器が大量に出土しており、かなりの人数の集団がこの地を訪れたことを予想している。こうした人的な交流を経て、地方が古墳時代を迎えるものと考えられ、今回の奥才古墳群との関係も注目されるところである。

古墳時代　古墳時代を迎えると、前方部がバチ形に開く前方後方墳の１号墳を含む名分丸山古墳群[11]、奥才古墳群[12]、鍋灘山古墳群[13]など前半期にさかのぼる古墳群が知られ、礫床を主体部とするものが多く、この地域の特色となっている。北講武地区にはこれらに引き続く後半期の古墳が知られてきている。これら以外にも、横穴墓が作られるようになると、さらに遺跡の密度を増し、横穴墓群の分布からは古墳時代後期の段階には、現在の集落の原形がすでに成立しているものと考えられる。

歴史時代　奈良時代の『出雲国風土記』をみると、具体的な記述はないが、講武盆地は島根郡の余戸里と生馬郷に、盆地西端の佐太前遺跡の立地した周辺は、秋鹿郡神戸里に含まれると考えられている。こののち10世紀に著わされた『和名類聚鈔』にあらわれる「多久郷」が、『風土記』の「余戸里」が一郷に昇格した姿とみられ、この間に開発が進み、人口が増加したのであろう。この頃に前後して講武盆地の中心部に条里制が敷かれたと考えられ、「三ノ坪」「八ケ坪」、「十一」といった小字名も残っている。

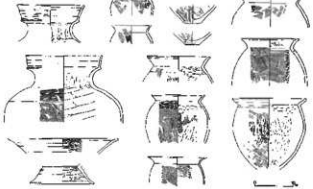


図２　南講武草田遺跡出土土器（１／10）

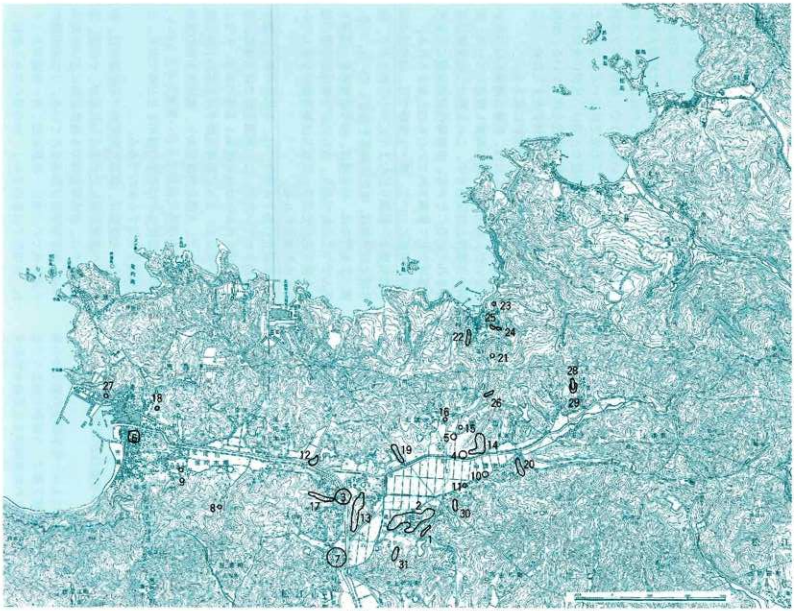


図３　奥才古墳群と周辺の遺跡（１／50000）

Ⅲ．調査の概要

1．調査の方法

今回の調査は、県道開設事業による県道法面の工事掘削が古墳群に及ぶ範囲での調査区設定を行った。そのため、場所によっては古墳墳丘の一部のみが調査区に含まれる地点が存在した。

調査基準杭を設定するにあたっては、対象区域全域に国土座標を基準とする10×10mを1単位とした方眼を設定した。方眼は、所在する古墳群の西辺にあわせて基準となる国土座標上の南北軸を設定し、これをAラインとし、東へ順次10m毎にB、C、D…Lラインを設け、さらに調査区南辺にも座標上の東西軸を設定し、これを1ラインとし、やはり北へ10m毎に順次2、3、4…13ラインを設けた。この座標上の交点杭を調査の基準点として測量・測点を行った。

伐採終了後、基準杭を設定し、100分の1の縮尺で調査前の地形測量を行い、その後、墳丘中央で十字に交差するように土層観察用の畦を設定し、遺構の検出を行った。主体部検出後は、やはり主体部の主軸方向とそれに直交する軸を設定して、主体部内の縦、横断土層図を作成した。

古墳主体部内の覆土は、調査に平行して現地で篩選別を実施し、小量だが遺物を回収した。

また、県道法面となって削られる尾根南東斜面では、古墳群への墓道の存在の可能性も考えられたため、2か所でトレンチを設定して下方までの状況を調査したが、こういった通路などの存在は明らかにできなかった。

2．支群構成

奥才古墳群は、前回の調査時点では、地形などから第Ⅰから第Ⅶ支群とし、馬蹄形の尾根上に並んだ古墳群であるとしていたが、変形「W」字の尾根の上につくられた古墳群であることがわかった。今回の調査地点での知見からは、第Ⅶ支群を含め本来はひと続きの尾根と考えられ、県道により鞍部を切断されて、別の尾根のように見えていたものである。

古墳群の尾根最高所を比較すると、今回調査の第Ⅶ支群の方が標高約64m、水田との比高約50mと、先年の調査中最高所の第Ⅴ支群13、14号墳の墳頂54mより約10m高い。こういった点でも第Ⅶ支群が先行する古墳群である可能性が考えられたのである。

また、今回の調査により、先年調査の第Ⅰから第Ⅶ支群と今回調査の第Ⅶ支群は、古墳群と両者をつないだ尾根鞍部が、現在の県道御津東生馬線を開設する際に切り通されている。後述するが、この尾根鞍部には中世以前にさかのぼる可能性もある2号道が所在し、土砂を盛った土橋が架けられていたようで、この盛土部分を県道で切り通したため、地すべりを繰り返し、現県道斜面の擁壁は2号道の延長部分に築かれている。

第Ⅶ支群はひと続きの尾根であるため、1支群に括しているが、さらに2小支群に分かれる可能性がある。尾根中途の鞍部を挟んで南側を第Ⅶ－1支群、北側を第Ⅶ－2支群として考えることも可能で、両小支群ともそれぞれ盟主墳と推測される古墳をもつ。

両小支群は、いずれも尾根の高まりに、削抜きの木棺を主体部とし、地山を削り出した比較的大形の56号墳、62号墳が所在し、それぞれに従属して小規模な古墳が築造されているようで、様相から2系列の古墳群がほぼ並行して形成されているものと考えられる。従属する小規模な古墳は、尾根に直交する一直線の溝を掘り、方形の墳丘を作っている。56号墳から続く尾根はかなりの傾斜を有するため、ここに作られた小規模墳は、階段状に見える。

さらに尾根東端近くには、直接古墳群にはつながらないが、弥生時代後期の墓群も確認している。前期の古墳群とは交錯せず、これを避けて62号墳は築造されていることから、古墳時代前期段階にも前代の墓域として意識されていたものと考えられる。

群の形成について、第Ⅶ－1支群では、68号墳が56号墳墳裾を一部掘り込むようにつくられており、68号墳と57号墳は、墳丘区画溝を共有している。一方、第Ⅶ－2支群では、65号墳は、62号墳墳裾を一部掘り込んでつくられており、さらに67号墳は65号墳の周溝を掘り込んでおり、これらは築造順序を示しているものと考えられる。

先年調査の奥才古墳群では、主体部の多くに礫床が採用されていたが、この第Ⅶ支群では主体部に礫床が採用されるのは61号墳第1主体のみで、大きく様相が異なる。さらに第Ⅶ支群では主体部上面に鼓形器台など、土器の供献があり、刳抜き木棺の採用とともに古墳時代前期でも古い要素と考えられる。67号墳上器棺などは古手の様相をとどめており、この推測を補強するものである。

また、古墳群は、第Ⅶ支群尾根での築造後は、第Ⅴ支群へ墓域を移したと考えられるが、その後、第Ⅶ支群では、古墳群全体でも最終段階に近い中期末の64、66号墳が再び築造されている。この両古墳の丘陵斜面での立地は、後期初頭と近い時期が考えられ、古墳群では最終末の1、28号墳の立地と酷似している。

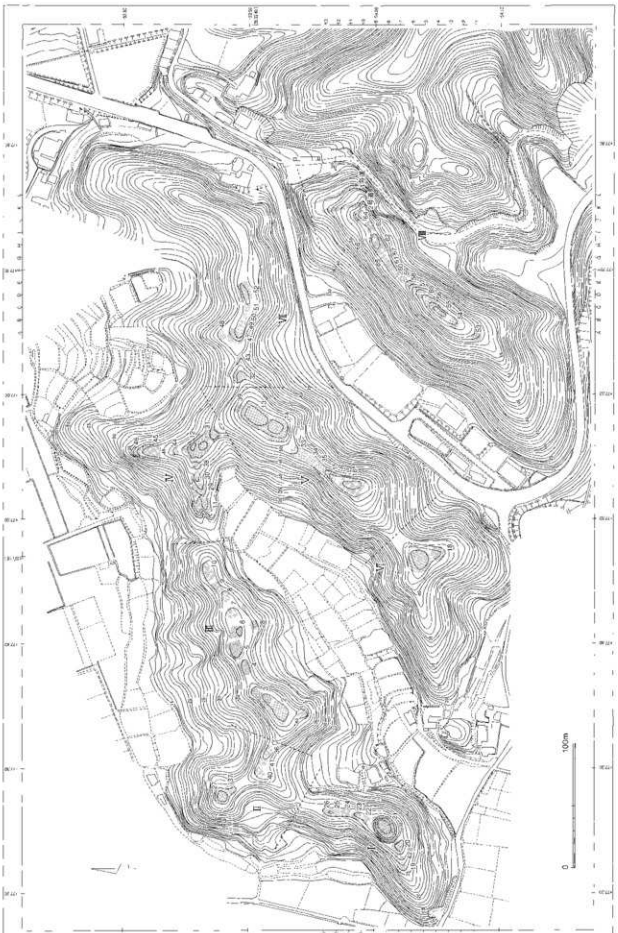


図4　奥才古墳群全体図（1／3000）

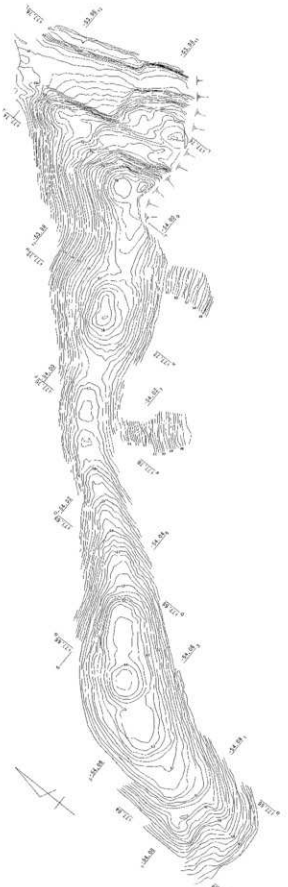


図5　調査前測量図（1／800）

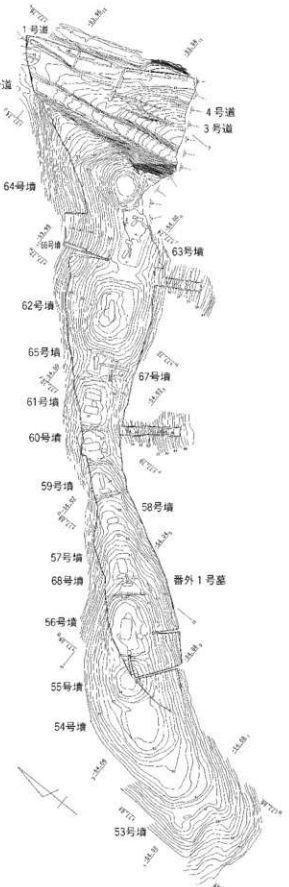


図6　調査後測量図（1／800）

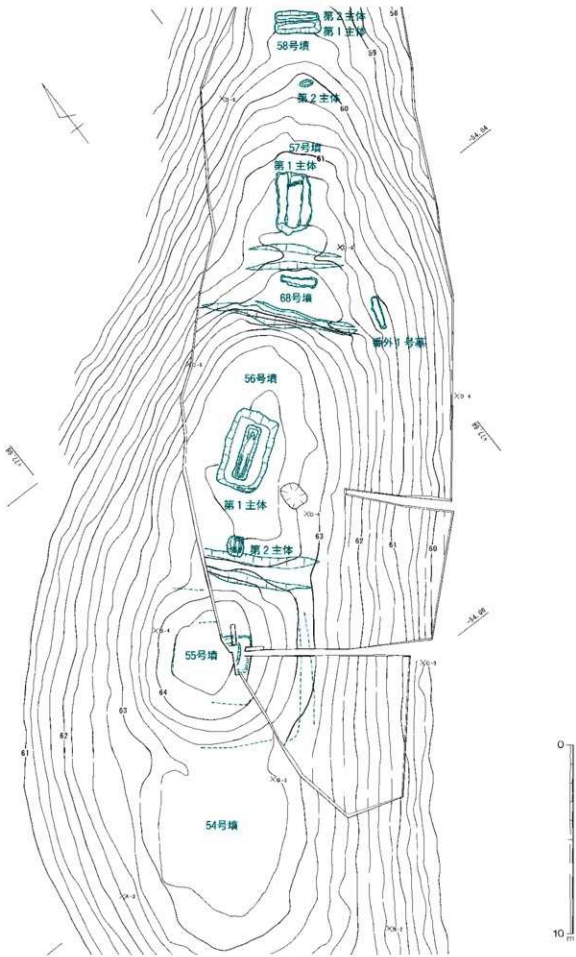


図7　55・56・57・68号墳測量図

3．55号墳

54号墳と56号墳の間にあり、墳頂標高は64.3mで第Ⅲ支群中最高所に位置する。墳丘は地山の削り出しによって築造され、墳端の南東側には削り出しによってできたと考えられる幅約0.6mのテラスが南西から北東約6mにわたって検出されており、西側では地山の傾斜変換点も認められた。墳丘は長辺約10m、短辺約8m、高さ約1mを測る方墳である。墳頂平坦面の広さは、墳丘の大半が調査区外になるため不明である。東に隣接する56号墳とは尾根に直交する溝によって区画している。

この55号墳の調査区内からは主体部が1基検出された。

主体部　墳丘中心部にあるものと考えられる主体部で、全掘していないが、主軸方位はE－34°－S前後と、尾根に直交するものと考えられる。前述のとおり、墳丘の大半が調査区外になるため、主体部の全容を明らかにすることはできなかった。また、表土除去の際、地山と墓壙覆土との区別がつきにくかったため、墓壙南側の隅の部分を掘りすぎてしまったが、短辺2.0m、深さは検出面から0.4mを測る2段掘りの墓壙であることがわかった。

土層断面の観察から棺の痕跡が一部確認でき、墓壙内には主体部として箱式木棺が組まれていた可能性が高い。木棺は、長さは不明だが、幅は0.6m、高さ0.3m以上のものと考えられる。

この主体部の1段目の南東部底面付近からは小形の勾玉1、ガラス製の管玉2の2点の玉が検出された。出土地点からは棺外で、層位からは、壙1段目ないし木棺上面レベルでの副葬ないし供献を想定しうる。

主体部出土遺物　小形勾玉1は、淡い緑色の碧玉製で、長さ0.93cm、厚さは0.22cm、孔径は0.14cmを測る。断面は楕円形で、片側穿孔である。ガラス製管玉2は、長さ0.82cm、直径0.57cm、孔径は0.20cmで、くすんだコバルトブルーを呈する。

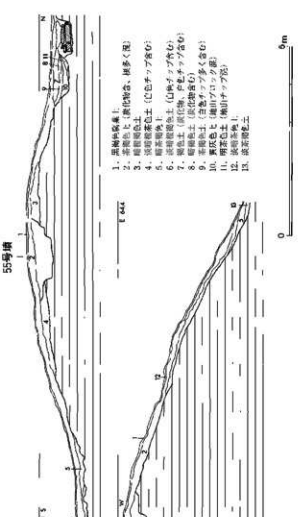


図8　55号墳土層図

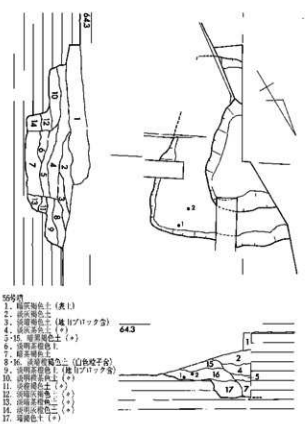


図9　55号墳主体部実測図

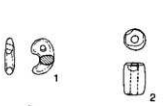


図10　55号墳出土遺物実測図

4．56号墳

55号墳の北東側に隣接し、調査前から墳丘北東壁が際だって切り立つため、他の古墳を圧巻する印象があった古墳である。墳頂面の標高は63.5mを測り、古墳群全体と諸武盆地一帯を見渡せる場所に立地する。墳形は方墳で、墳丘の規模は長辺約13m、短辺約12mを測り、調査した第Ⅶ支群の古墳中２番目の規模を誇るものである。これらの立地、規模から、56号墳は第Ⅶ支群中の盟主墳の１つに位置付けられる。

調査は南西角から北西斜面を除く墳丘の大半を対象とし、墳丘上層を観察するため十字の土手を残して、遺構が確認されるまで全体を平面的に掘り下げていった。墳丘は表土から15cm前後掘り下げた時点で地山面に到達し、また主体部の掘方もこの地山面より検出した。墳丘の上層観察からは盛土は確認できず、基本的に地山の削り出しにより造営されたと考えられる。しかし、墳頂平坦面は平面蒲鉾形を呈しており、また検出された主体部も地山面からの掘方しか確認できなかったため、多少の墳丘七砂の流出があったものと考えられる。

墳丘は尾根斜面側では墳端を明確には確認できなかったが、尾根筋に直交する溝によって両辺が区画されている。両側とも隣接する古墳と溝を共有しており、土層断面からは溝の明確な切り合いは確認されず、ここでは古墳の前後関係を明白にし得なかった。55号墳側の溝は、幅が約１mで、深さは現存の56号墳墳頂から約0.5mを測る。68号墳側の溝は68号墳の説明で詳しく述べるが、幅が0.5m程度、溝の深さは68号墳から測って0.2m程度と非常に狭く浅い溝であり、この溝底と56号墳墳頂との比高は２mを測る。この墳丘両側の溝底の高低差は1.3mを測り、56号墳は尾根下方から見てより大きくみえるように造られている。ただし、68号墳側の溝が異常に細いこと、また56号墳の墳丘法面が急激に立ち上がっているため、68号墳が56号墳の墳丘を削り込んで造営された可能性も考えられる。このことから、本来の56号墳墳端はもう少し57号墳側に延びていた可能性も考えられる。

主体部は墳頂平坦面中央から中心主体となる第１主体と南西溝にかかる墳頂端から第２主体が検出された。第１主体は２段掘りの墓壙で刳抜き木棺を埋葬主体とし、第２主体は小形の箱式石棺を埋葬主体とするものである。両主体部とも尾根筋に主軸を合わせ直列に並んでいるが、わずかに主軸方位にずれがみられる。古墳の主たる被葬者は墳頂平坦面中央に占地し、規模も大きい第１主体であり、第２主体は箱式石棺を使用するものの極めて規模が小さく、また墳頂端部に造られることから、副次的な埋葬者のものと推定される。また、56号墳墳裾には68号墳主体部と番外１号墓が存在する。56号墳第２主体を含めたこの３基のみが、第Ⅶ支群中で主体部に石材を使用するという共通点をもっており、立地と考え合わせるとこれら３基は56号墳第１主体に付随して造営された可能性が指摘される。これらの点から56号墳第１主体の被葬者が後述する内部構造と合わせて、第Ⅶ支群中にあって特筆すべき存在であったことが窺い知れる。

なお第３主体として墳頂部南辺で検出したものは、調査の結果、土坑底面が不整形を呈し、また土層断面からも攪乱された様子しか観察されなかったため、風倒木の跡であると判断した。

第１主体部　墳頂部中央で検出した２段掘りの墓壙で、56号墳の中心主体である。墓壙は地山面で掘方を検出したが、前述のごとく墳丘の流失が考えられるため、墓壙の掘方も幾分当時の掘り込み面より下

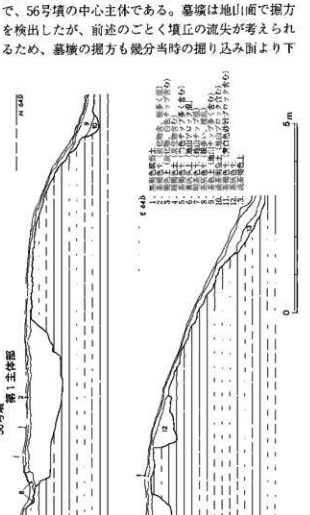


図11　56号墳土層図

がったレベルで検出されたものと考えられる。平面形は長方形を呈し、主軸方位はE－35°－N、規模は長辺4.3m、短辺2.4m、深さ0.8mを測り、墓壙の掘削面積では第Ⅲ支群中で最大の規模をもつ。

調査はまず墓壙に十字のセクションベルトを残し、周囲を半面的に掘り下げて行った。墓壙覆土内には大量に人頭大の地山岩盤ブロックが混入しており、地山を掘り抜いた墓壙の掘り土をそのまま埋め戻したものと考えられる。このことから棺の埋め戻しの時点まで、墓壙を掘り上げた土が墳頂付近に積み置かれていた可能性を指摘できる。墓壙2段目のテラスは広く平坦に整地され、小口側で最大0.3m、長側板側で最大0.6mと長側板側に面積が広くとられている。また墓壙南隅にステップがみられるが、掘込み面からテラスまでは現状で0.4m以上の高低差があり、前回調査の第Ⅳ支群12号墳等の規模の大きな墓壙で確認されたものと同様、足掛けのためのステップであると思われる。

2段目の掘込みは、長辺3.0m、短辺は北東小口で0.8m、南西小口で0.7m、深さは0.4mで、わずかに北東側が広い細長い長方形である。2段目の掘込みの上面を検出した時点で、当初墓壙上面で考えていた長軸と2段目掘込みの長軸とでは軸の中心がやや北西側にずれていたため、急遽2段目の墓壙にあわせて主軸をとり直し、棺内の縦断土層（図12縦断面十層図のラインで囲んだ範囲）を記録することとした。墓壙の底にはわずかに長楕円形の掘り窪みが認められ、壙底の横断面はU字状を呈し、縦断面もゆるく弧を描いていた。土層観察からは壙底面に沿う横断面U字形の棺痕跡が確認でき、埋葬主体は刳抜き式の木棺を使用したと考えられるが、縦断面の棺痕跡も壙底面同様ゆるくカーブするため、刳抜状の木棺ではなく、棺底が舟底状を呈する木棺が使用されたと想定される。また墓壙底面で半面的にも長楕円形の棺床の痕跡（図12の上段半面図の中央の窪み）を検出できた。

2段目の壙の深さから、棺はその蓋を2段目平坦面上に出していたと考えられるが、断面からは蓋が平坦なものか棺身同様刳抜きによるものかは確認できなかった。なお棺痕跡の周囲には地山チップを多く含む土が裏込め状に詰まっており、棺を被覆する粘土等は確認されなかった。

土層断面から推定される棺の規模は、舟形状の棺の縁部にあたる土層9と土層8の外側で計測して長軸2.6m、短軸0.4mである。また図12の縦断面図の土層11の北東側の途切れ部から、土層8と土層10の切れ目に立上りが確認できたため、棺内に仕切り板が存在したと考えられ、棺は副室をもつと考えられる。なお、この仕切り板から南西小口までの長さは1.9mを測る。

遺物は、墓壙上面より鼓形器台**3**、土師器片**4**、床面付近より鉄鏃**5**が出土した。鼓形器台**3**は主体部のほぼ中央、墓壙検出面よりわずかに下がった土層2～3層内で出土した。器台上半部が上面を伏せた状態で検出され、破片は棺中央にむけてより深く落ち込んでいた。土師器片**4**は墓壙主軸上のやや南西で、鼓形器台**3**と同様墓壙に落ち込んだ状態で出土した。小片ではあるが高杯の口縁部と思われる。このような出土状況から、これら土師器片は墓壙の埋土上面に置かれたものが、棺材腐朽後の陥没に合わせて落ち込んだものと考えられ、供献もしくは墓上祭祀に使われたものと推測される。鉄鏃**5**は棺の北東部、南東寄りの棺底痕跡上で検出した。土層10層上で検出され、セクションでみられた仕切り板の外側にあり、副室内に置かれた副葬品と考えられる。刃身はゆるく曲げられており、凸面が棺床の曲面に揃えるように下にして置かれていた。鏃は、副葬時に意図的に曲げられたものと推察される。刃部は北東側、棺中央から見て外方を向くように置かれていた。また切っ先も棺の側面外側に向けられていた。この副葬品の位置と墓壙幅の関係から、被葬者の頭位は北東に向けられたと推定される。

墓壙底面で、壙掘削時の工具痕が多数検出された。痕跡から、工具は刃先が幅14cm程度の直線的なもので、墓壙底面に両小口側から壙中央に向けて鈍角に打ち入れられており、棺中央で刃の打ち込み方向が向かい合うように掘り進んだことが判明した。鍬状の工具の使用が推測される。

第1主体部出土遺物　鼓形器台**3**は器台上半部の3/4程度が現存する。口径は19cmで口縁部はわずかに肥厚し、外方に屈曲して広がり、口縁端部は平坦に調整されている。突起部は下方からナデあげられるようにほぼ水平にとびだして、摩耗しているが断面台形に仕上げられている。筒部は強く屈曲し、器面内側はミガキ調整が施されている。器面は化粧土が塗布されており、全体が赤味を帯びている。

土師器片**4**は高杯口縁部の小片と考えられる。復元された口径は21cmで、端部へ向けて器壁がやや薄くなり、口縁は短く屈曲して外側にわずかに開く。器面は風化が激しく調整等は確認できなかった。乳白色を呈する。

鉄鏃**5**は中型の直刃鏃で、長さ12.5cm、幅は基部付近で2.8cm、先端で1.7cm、厚さは背部で0.5cm程度を測るものである。基部は0.3cm程上面に折り返しており、形状は研ぎ減りのため刃部中央から先端にかけて幅が狭くなっているが、本来短冊状を呈していたものと思われる。目釘はない。棺底に接していた背面には一部布目が確認され、布に包んで副葬されたと考えられる。なお基部には木質等は確認されなかった。

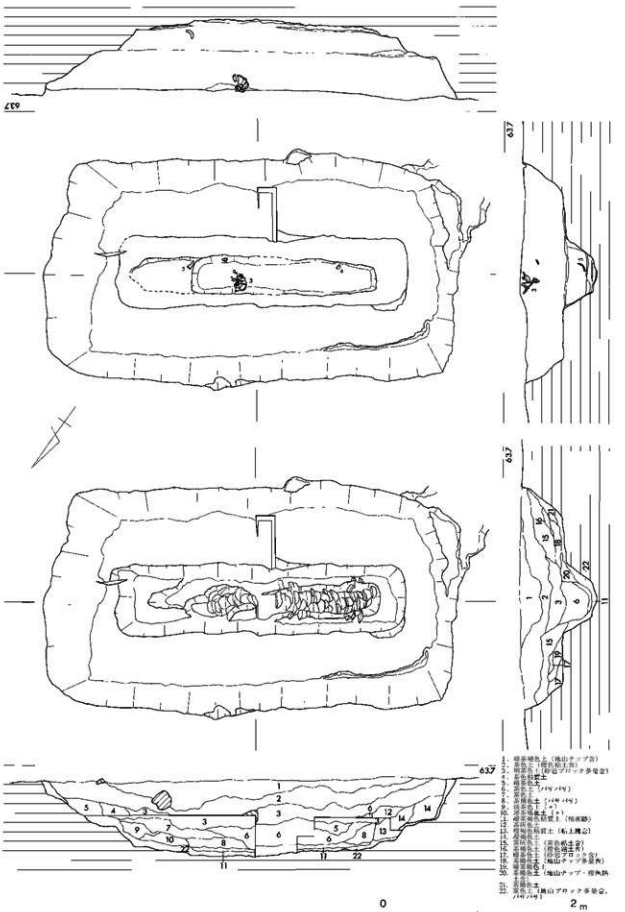


図12　56号墳第１主体部実測図

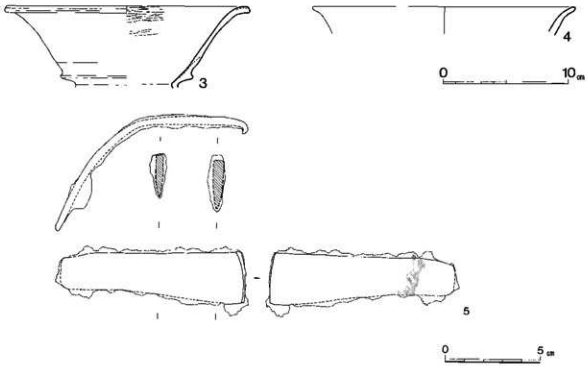


図13　56号墳第１主体部出土遺物実測図

第２主体部　墳丘南西辺墳端に掘り込まれた主体部で、区画溝に墓壙の一部がかかる。埋葬主体は組合せ式の箱式石棺で、主軸方位はN－33°－Eである。墓壙の規模は長辺1.0m、短辺0.9m、深さ0.4m、棺内法が長軸0.58m、短軸0.2m前後、深さ0.15mと極めて容量が小さく、小児用の棺と考えられる。石棺は小口に各１枚と側板に各２枚の計６枚の板石材で四面を構成しており、底面に石材はない。棺は側板を小口が挟み、小口板は壙床面に掘られた溝に立てられていた。棺蓋は比較的大きな板石１枚とそれで覆えないところに小さな数枚の板石を積み重ねて置いていた。裏込めにも数個の石を使用しているが、裏込め石の状況と土層観察より、棺材設置の後、棺外に棺の高さ半分程度まで粘質土を詰め、裏込め石が置かれている。また棺蓋と側板の合わせ目の周囲は粘質土で覆われていたことが確認されたが、棺内は検出時点では土が充満していた。

棺石材はいずれも流紋岩質凝灰岩で、基本的に同一母岩のものであると思われる[16]。棺身上端の蓋石に接する面に一部加工痕が認められた。石材の加工具は手斧状のもので、最大で幅５cm程度の加工痕が連続している。その他、小口と側板、蓋石同士との接面部分で、石材小口の方に加工痕がみられるが、石材の面的な調整は行われておらず、材は剥離面そのままで使用されている。

この第２主体部からの出土遺物はなかった。

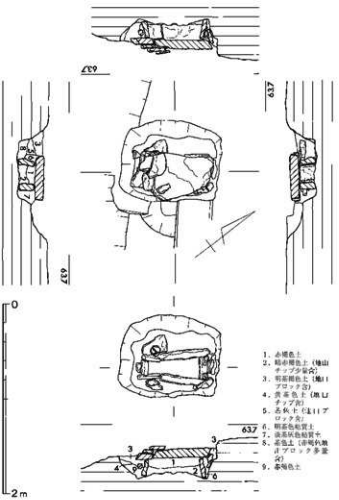


図14　56号墳第２主体部実測図

5．68号墳

墳丘は56号墳第１主体部と57号墳第１主体部との間の非常に狭い部分に作られている。尾根主軸方向に短辺約２m、尾根直交方向に長辺約７mで、異質の墳丘といえる。

現状の墳丘の標高は61.5mで、57号墳第１主体部とほぼ同様の高さに位置する。墳丘は地山を削り出し、尾根に直交する２本の区画溝をつくることによって整形される。ただし、68号墳と57号墳はいずれも盛土をもっていたと予想されるので、実際には墳丘の高さに差をもっていた可能性がある。

68号墳主体部は当初、57号墳に伴う墓壙と思われていたが、57号墳第１主体部との間に溝が見つかり、56号墳、57号墳どちらにも伴わない独立した古墳であることが判明した。56号墳、57号墳が築造された後、この場所に墳丘を造らねばならなくなったようである。

56号墳と57号墳の墳丘は、本来、溝をはさんで隣接していたと思われる。その後、68号墳をつくるために、56号墳墳丘の北側と、57号墳墳丘の南側を一部削って、平坦面をつくり、さらに、56号墳との間に区画溝を設け、北側は56号墳と57号墳との間にあった溝を利用して区画していると予想される。もともと狭いところに墳丘をつくろうとしているため、56号墳との溝は、非常に狭いものにならざるを得なかったと思われる。

主体部は主軸を尾根に直交するかたちでつくられている。石蓋をもつ土壙で、現状において長辺1.9m、短辺0.5m、深さ0.4mを測る。主軸方位はE－45°－Sである。

石蓋とする石材は３点あり、１点は板状節理を利用して打ち割っただけのものと思われるが、他の石材は工具による加工痕を残す。材質はいずれも流紋岩質凝灰岩で、鹿島町御津から恵曇にかけて採取できるものである[10]。

石蓋は、後世に攪乱を受けている可能性があり、本来の石材の数と位置を留めているとは言いがたい。また、石蓋の付近で袋状鉄斧６が出土しており、供献ないし副葬されたものと思われるが、本来の場所から動いている可能性がある。

墓壙は、流紋岩岩脈の流理構造[11]を利用し掘り込んでおり、凹凸が激しい。床面は平らではなく、やや丸みを帯びる。壁の立ち上がりもU字状を呈し、他の墓壙に比べると、不整形なものである。また、墓壙北端の床面には木の根が深く入り込んでいたようで、黒褐色土が深くまで入り込む。

土層において小口板の痕跡がみられた。これにより、棺内の長辺は1.5mと推定される。しかし、側板の痕跡はみられず、墓壙の短辺も0.5mと狭いため、側板を使用していない可能性がある。おそらく、墓壙に小口板を立て、人体を納めた後、墓壙上面に石蓋をのせたと思われる。

床面において、南東側がやや高く、幅も広いので、南東頭位に遺体が納められた可能性が高い。

68号墳は盛土の位置を想定したとしても、やや北側につくられている。スペースとしては、同様な埋葬施設をもう１基つくることが可能であるが、埋葬施設はみつからなかった。

68号墳は、石材を使用した埋葬手法であり、他に石材を使用した埋葬主体は、56号墳第２主体部と墳丘をもたない番外１号墓と56号墳周辺に限られることから、56号墳の被葬者に関係が深い人物が葬られた可能性が考えられる。

石蓋加工　今回調査した奥才第Ⅰ支群では石材を使用する埋葬施設は56号墳第２主体部と68号墳、番外１号墓の３基で、工具による加工痕を残す石材は、

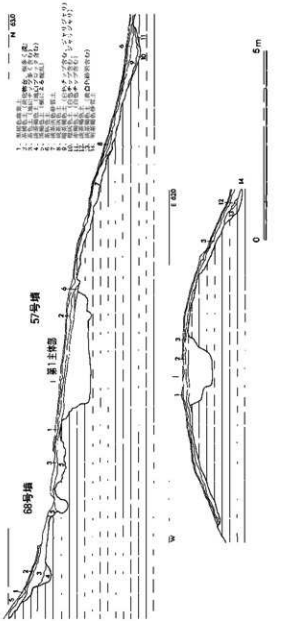


図15　68・57号墳土層図

56号墳第２主体部と68号墳の石蓋である。

68号墳の石蓋に使用された石材は、３点のうち２点が工具を使用して加工されたことがわかった。袋状鉄斧に一番近かった長細い石材と２枚重なっている板状の石材のうち上側のものが加工されている。このうち加工痕をよく残す、板状の石材の拓影を示す（図17）。

これをみると、幅５～６cmで、長さが約１cmの削りの痕跡がみられる。削りの方向は一定ではないようである。部分的に加工痕のはっきりしないところがあるが、風化のためか、もしくは工具のあとを敲打し、加工の痕跡を消していると思われる。

以前調査された奥才古墳群で見られた石材の加工は、手斧を使用し、削りの方向はほぼ一定で、面取りにおいても手斧で削るだけでなく、敲打して工具痕を消す技法を使用するものがあり、非常に丁寧につくられている。それに比べると、68号墳の石蓋のつくりは、やや乱雑な印象を受ける。

出土遺物　鍛造無肩の袋状鉄斧で全長約18.5cm、基部幅約５cm、刃部幅約7.5cmと大型のものである。全体的に端整で、非常に重厚につくられている。現状で1,100ｇを測る。袋部の折り返しがしっかりと閉じられて、基部の断面は楕円形を呈する。刃部で最大幅をもつ、平面形は縦長の台形を呈する。また、刃部は両刃で弧状を呈すると思われる。大型のものなので、伐採や木材の製材用具として使われたものと考えられる。最終的にはこの墓壙の掘り下げに使用された可能性もある。

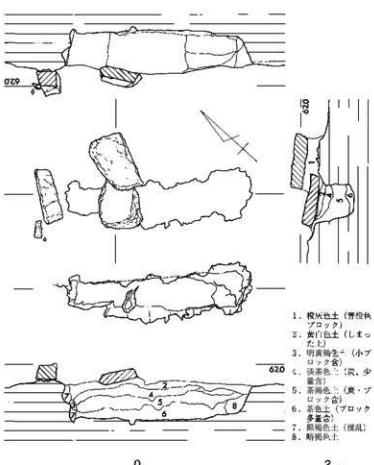


図16　68号墳主体部実測図

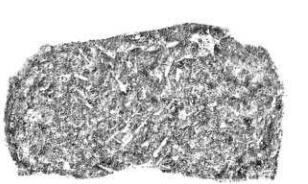


図17　68号墳主体部石材拓影（１／８）

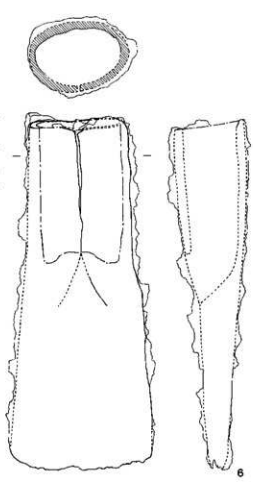


図18　68号墳出土遺物実測図

6．番外1号墓

68号墳の南側に位置する主体部である。標高61m付近に作られ、隣接する68号墳との比高は現状では約0.7m低い。番外1号墓の南側はさらに急な斜面になって降っており、周辺の様子からも、ここに墳丘を設けたり、盛土を施したようにはみられない。尾根から南に下がる斜面を削って2×1m程度のわずかな平坦面を斜面の傾斜に沿わせてつくり、ここに墓壙が掘り込まれている。

主体部は、石蓼土壙である。斜面の傾斜に主軸を沿わせて作られている。土壙上面に石を並べ置き、蓋とし、おおまかに数えて20個の石を使用する。一辺が30cm～50cmの石の長辺を墓壙短辺に架け渡し、この石材の隙間を一辺10cm弱の小さい石で塞いでいる。軟質な石材を使用しているため、土圧のために、大きめの石の中には、割れてしまっているものや、折れて墓壙の床面近くまで落ち込んでいるものがある。このことから、本来使用された石材はもう少し大きい石で、数としても現状より若干少ないと思われる。

石材は、基本的に68号墳の石蓋同様、流紋岩質凝灰岩だが、材質としては68号墳の石蓋に比べ、軟質で粗いものが使われている。また、小さい石の中には、異質な流紋岩も含まれている[10]。

いずれの石材も工具で加工された様子はない。板状節理を利用し、打ち割った状態のままで使用しているものが多く、不整形な形である。

墓壙は、現状で長辺1.8m、短辺0.4m、深さ0.2mを測る。墓壙は岩盤と岩盤が風化した茶褐色の地山を掘り込んでつくられている。本来、墓壙は現状よりいくらか深さがあったと思われるが、地山自体が比較的軟らかいのに加え、石蓋が壙内に落ち込み、墓壙の上端が崩れ、墓壙東側の斜面に土が流れていってしまったようである。特に、墓壙の北側はほとんど壁が崩れてしまっている。

墓壙のおよそ半分が流失してしまっていることと、床面近くまで落ち込んだ石蓋のために、土層の様子をはっきりと観察することができなかった。墓壙の短辺が0.4mと狭く、棺痕跡は確認できなかったので、木棺を使用しないものであった可能性がある。

墓壙の北東端付近では岩脈と同様の材質をもった石片が多く出土しており、墓壙を掘り下げる時に削った岩脈の破片を、小口部の押さえのために使用していた可能性がある。この場合は、68号墳同様、側板を使用せず、小口板のみを使う方法で埋葬されたと思われる。

頭位方向は、床面は北側がやや広く、わずかに高くなっているため、北頭位N－19°－Eであろう。

68号墳がつくられる前に56号墳に付随する形でつくられたのか、68号墳がつくられた後でこれに付随させてつくられたのか、伴う遺物もなく不明であるが、石蓋土壙を埋葬施設とし、墓壙の幅が狭いという共通点から、68号墳との繋がりが強く、また、石材を使用する埋葬主体ということから、おそらく68号墳に前後する近い時期のものと考えて大過ないように思われる。

番外1号墓は、68号墳と埋葬施設が類似するにもかかわらず、68号墳よりも一段下がったところに平坦面を削り出し埋葬施設を作っている点、68号墳の石蓋には工具による加工がされるのに対し、ここで使用される石蓋にはそれがみられないなど、作りに差がみられ、副葬品をもたないなど、格差が認められる。

これら石材を使用する主体部は、出雲地方においては、古墳群中の盟主的な存在の墳丘に陪家的に伴って確認される例が多い。このような状況は、56号墳の他に13号墳脇の39号墳、14号墳裾の石蓋土壙があり、また、松江市大佐遺跡SK－08[11]等でも同様な状況が見られることは、なんらかの共通認識のもとで、これらの石材使用墓が造営された可能性が指摘できる。

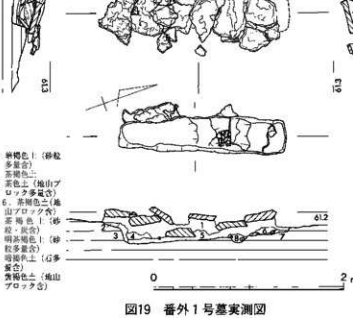


図19　番外1号墓実測図

7．57号墳

68号墳北東側に区画溝を共有して所在する。墳頂の標高は61.5m で、墳丘は不明瞭だが、長辺約10m、短辺約８m 程度の方墳と考えられる。68号墳との比高差は現状ではほとんどなく、56号墳の墳頂からは約２m 低い。また、北側の58号墳との間には、はっきりとした区画溝を確認することはできなかった。

墳頂平坦面の第１主体部は２段掘りの箱式木棺、第２主体部は墳裾にある土器片で被覆する土器蓋土壙である。第１、第２主体部間は距離で約4．5m、比高で約1．3m とやや距離が開いて位置している。

前述したように、本来なら57号墳は、56号墳と溝をはさんで隣接していたと思われる。また、溝の傾斜から復元すると５×７m 程度の墳頂平坦面を盛土によって作っていたと想定される。想定される平坦面と第１主体部の位置を考えると、第１主体部は68号墳が築造される時に墓壙の上端の一部を削られている可能性がある。また、第１主体部の北側に存在した埋葬施設が、盛土の流失とともに失われた可能性もあるが、第１主体検出面では何の痕跡もとどめておらず、推測の域をでない。

第１主体部　この主体部は主軸が尾根に平行するようにつくられている。主軸方位はＮ−43°−Ｅである。墓壙は、短辺側では南側に緩やかな段がみられるが基本的に１段掘りである。長辺側は、一部で３段を呈する部分がみられるが、はっきりした段をもたないため、基本的に２段を意識して成形されていると思われる。墓壙上面での土器などの出土はなかった。

現状において墓壙の上面で長辺3．1m、短辺1．7m、深さ0．7m を測り、２段目における墓壙の法量は長辺2．8m、短辺1．0m、深さ0．4m を測る。墓壙は岩盤に掘り込まれており、全体が甕状に凹凸を呈している。

墓壙内の土層で側板と小口板の痕跡を観察し、木棺が据えられていたことを確認した。また、北側の小口板と墓壙の北端との間に空間がみられ、副室が存在したことが考えられる。この空間からの遺物の出土はなかった。これにより推定される棺の内法は、長辺2．5m、短辺0．5m 程度、やはり土層断面から想定できる棺の深さは約0．4m 程度と考えられる。

床面北側には敷居状の溝が見られる。長さ約0．8m、幅約0．1m、深さ約0．1m を測る。これは土層における小口板の痕跡とは若干ずれており、なぜこのような溝を設けているのかは不明である。たまたま岩脈の層間に木の根が入り込み、溝状に地山を削ってしまった可能性も考えられるが、ほぼ一定の幅と深さをもち、墓壙の側壁をえぐることなく終息しているため、人為的につくられたものと思われる。

棺内北側の床面で敲形器台７が出土した。床面の敷居状の溝の上面に相当する位置である。この位置によって、埋葬頭位が北東と判明した。敲形器台は、上台の南側に面する部分を大きくＬ字に打ち欠いており、ここに頭部を乗せ、枕に使用したものと考えられる。

出雲地方では敲形器台そのものは数多くありながら、古墳主体部で枕として使用された例は、県下では初例であろう。

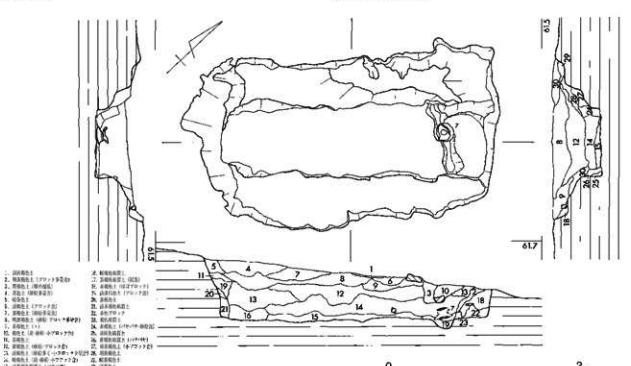


図20　57号墳第１主体部実測図

出土遺物　鼓形器台７は、埋葬の枕に転用されたもので上台の一部が大きくＵ字に打ち欠かれている。

上台の1/3の欠損は、埋葬時に意図的に打ち欠かれており、下台はほぼ完全に残っている。

復元口径約18.5cm、復元底径約18.5cm、復元器高10.3cmを測り、筒部の簡略化が進んだものである。下台部に３方の円孔をもつ。上台下台ともに端部を横なでし、平坦面をもたせている。外面の調整は、筒部は横方向になでるほかは、風化のため不明。下台内面は斜め方向のヘラケズリを施している。

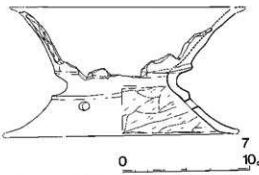


図21　57号墳第１主体部出土遺物実測図

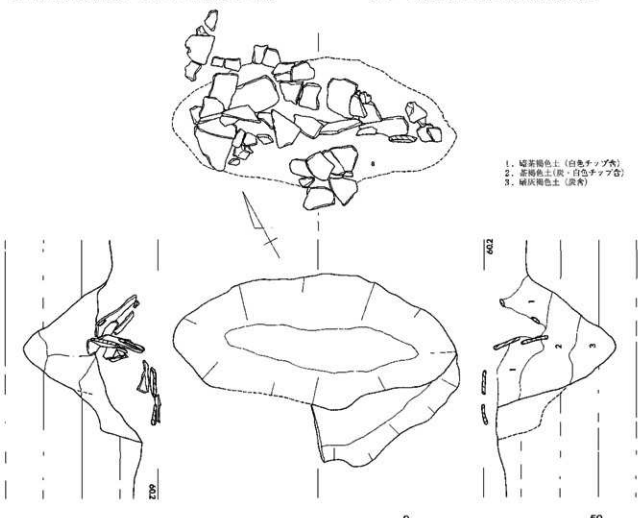


図22　57号墳第２主体部実測図（１／10）

図23　57号墳第２主体部出土遺物実測図（１／６）

第2主体部　前述のように第1主体部より北東に4.5m程離れたところに位置する土器蓋土壙である。墳丘に盛土がされていたことを考慮すると、位置的には墳頂平坦面につくられたとは考えにくく、おそらく、墳裾に作られたものと推定される。土壙は盛土から掘り込まれると考えられ、本来はもう少し深いものであったと思われる。

土壙は、現状で長辺0.8m、短辺0.3m、深さ0.3mを測る。土壙の長軸を中心に土器が割れて落ち込んでいる。主軸方位はW−33°−Nである。土壙に納められたものを覆うように土器を被せていたと思われる。

破片を接合したところ、完全には復元することはできなかった。復元された形から、おそらく土器の体部のみを壙の被覆に使用したと思われる。他に土壙から遺物は検出されなかった。

壙の内法からすると、乳幼児が埋葬されたものと思われ、乳幼児埋葬が墳丘の隅や墳裾に作られる例のひとつと考えられる。

出土遺物　墓壙の被覆に使われた壺または甕**8**の1点である。接合すると、口縁部、底部はなく、体部の一部だけであった。器壁の凹みや接合した破片のカーブなどから、以前調査された第V支群13号墳墳頂出土の土師器壺が類似する。体部のうちでも下半に相当する部分と考えられる。現存する部分での最大径は約60cmを測り、大形のものと考えられる。

器面の調整は、外面は風化が激しいが、縦方向のハケメが一部残っている。内面は横方向のケズリが施される。ところどころ、粘土の積上げ痕が水平な稜線として認められる。

8．58号墳

57号墳と59号墳の間に位置する。墳丘は地山の削り出しによって築造された一辺約7mの方墳であり、墳頂の標高は59.5mである。墳丘南東部は後世に付けられた道により、一部削平を受けている。また、墳丘北東側では墳頂平坦面は明瞭でなく、この部分はいくらか盛土がされて、墳丘が整えられていたものが全て流失したものと考えられる。

57号墳との間は、幅約1.3m、深さ約0.2mの溝によって区画されるが、この溝は第Ⅶ支群中の他の区画溝と比較すると浅く、あまり明瞭なものではない。一方、59号墳との間には、幅1～1.5m、深さ0.4mの溝が掘られている。また、南東斜面では他の古墳と同様に墳裾は明瞭でない。

ここでは墳頂平坦面の南西側、57号墳寄りから、切り合う形で2基の主体部を検出した。墳頂平坦面の59号墳側にもさらに主体部が存在することが予想されたが、サブトレンチを入れた結果、この2基の主体部以外の遺構は検出されなかった。主体部上面などでの土器の出土はなかった。

第1主体部　素掘りの墓壙で、長辺2.4m、短辺0.8m、検出面からの深さは0.5mを測る。主軸方位はW−33°−Nとなり、尾根に直交する。墓壙検出当初、第1・2主体部を1つの主体部と考えていたが、横断トレンチを入れた結果、2つの主体部が切り合っていることが判明した。

土層断面から、第2主体部を一部掘り込んで、第1主体部が造られたことがわかった。この主体部からは小口板の痕跡らしき層を検出した。このことから棺の内法は長辺1.6mとなる。短辺については、

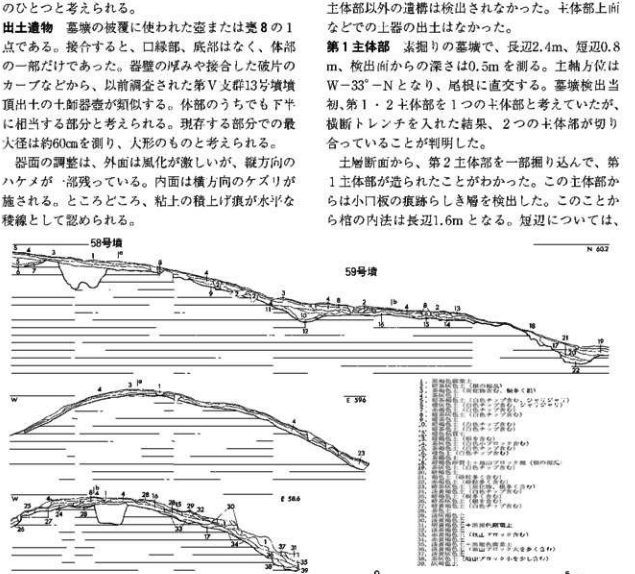


図24　58・59号墳土層図

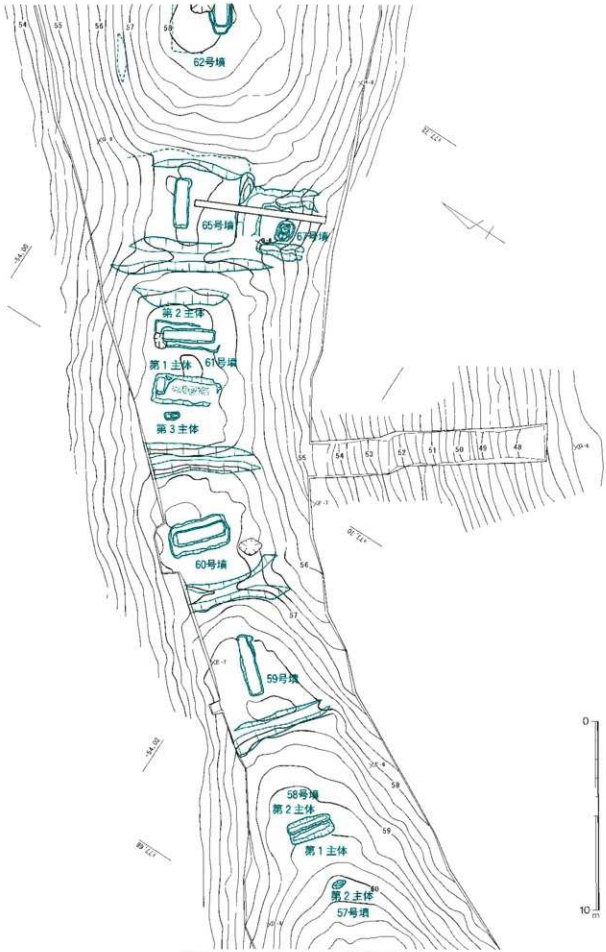


図25　58・59・60・61・65・67号墳測量図

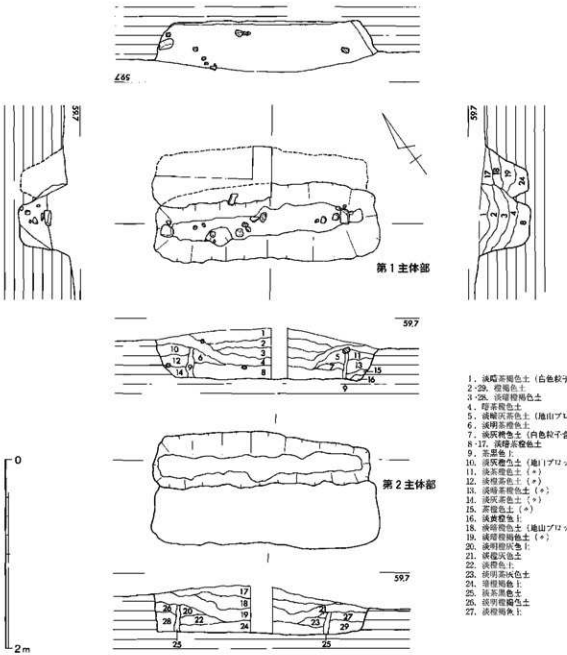


図26　58号墳第１・第２主体部実測図

土層断面からは側板は確認できなかったが、墓壙底部の幅が約0.3m、最も狭い部分では0.2mと、非常に狭いため、本来側板はなかったものと考えられる。

この主体部からは角礫が数点検出された。土層の堆積状況から見て、墓壙埋め戻しの際に、土と一緒に掘められたものと考えられるが、一部小口の裏込めの土に混ざって検出されたものもあった。墓標の可能性も考えられたが、角礫の色は地山岩盤の色調に近い黄褐色で、特に使用・加工痕等は認められず、用途は不明である。小口の裏込めの土に混ざって検出された角礫も、墓壙底部から浮いて検出されているので、小口を設置する際の裏込めとして使用されたものとは考えにくい。

出土遺物としては、墓壙内からは刀子が１片検出された。これは墓壙検出後、覆土をふるいにかけた際に見つかったもので、出土位置は不明である。

頭位方向は、墓壙底の高さから北西側と思われるが、南東側の高さと比較しても大きな差がないため、断定できない。

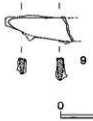


図27　58号墳第１主体部出土遺物実測図

第1主体部出土遺物　9は刀子の切先部である。残存長3.5cm、厚さ0.3cmを測る。断面は縦長の二角形である。鞘の木質や布の痕跡など埋納状況を示すような付着物は認められない。

第2主体部　やはり素掘りの墓壙で、長辺2.3mを測る。短辺は南西側が第1主体部によって切られているために不明であるが、墓壙の立ち上がりの角度から約0.7mであったと推測される。深さは検出面から0.5mを測る。主軸方位はW−34°−Nで第1主体部とほぼ平行する。

この第2主体部でも第1主体部同様、小口の痕跡と思われる層を確認した。このことから、棺の内法は長辺1.6mと考えられる。こちらでもやはり側板と思われる土層の立ち上がりは確認できなかったので、木棺の形態は第1主体部と同様のものであったと考えられる。この主体部では小口を設置する際の裏込めのような石材は検出しなかった。墓壙底部の幅は約0.2m、最も狭い場所では0.15mを測り、第1主体部同様非常に狭い。

頭位方向は、墓壙底で北西側が南東側に対して高いため、北西側と推測される。

なお、この主体部から遺物は検出されなかった。

58号墳第1・2主体部はいずれも墳頂平坦面中心部からやや外れた場所に位置しており、あたかも続く埋葬に備えていたかのようである。

9．59号墳

墳丘は1辺約7mの方墳。尾根に直交するかたちで溝を作り、墳丘としている。墳頂の標高は58.3mである。

墓壙の上面から鼓形器台片10と高坏片11が出土しており、供献ないし墓上での祭祀に使用されたものと思われる。土器の検出面がかなり高いので、本来の墳丘は現状よりかなり盛土をされていたものと考えられる。墓壙が、盛土をした墳頂平坦面から掘り込まれたとすれば、検出した状態よりも深いものであったと思われる。

墳頂平坦面のほぼ中央に、南北に長い主体部が1基つくられている。墳丘の北側は、盛土が流失し、岩脈がむき出しになっており、主体部は盛土と岩脈を掘り込んでつくられたようである。

主体部は、主軸が尾根に平行するようにつくられており、現状で長辺3.3m、短辺0.7m、深さ0.3mの墓壙に棺を据えたものと思われる。土層で、小口板や側板と推定できる部分が観察でき、箱式木棺を使用したと判断される。また、小口板の内側に仕切り板らしき土層も確認できたことから、副室を両端にもつ木棺であった可能性がある。棺内法は推定2.8m、幅0.5mである。棺内主室の長さは、1.9mと推定される。床面は南側が若干広く高いので、頭位方向は南方位と考えられ、主軸方位はS−39°−Wである。

棺内に副葬品はなく、副室においても出土遺物はみられなかった。

出土遺物　墓壙上面から鼓形器台と高坏が1点づつ出土している。

鼓形器台10は、調整はほとんど観察できない。内面にわずかにケズリがみられたので、下台部と判断した。端部をなでて、平坦面をつくっている。底径を復元すると、約13.2cmと推定され、やや小形のものである。

高坏11は脚部の一部である。筒状の脚部から杯部にかけての破片で、調整はほとんどわからない。脚と杯の接合方法は十分な観察ができなかった。

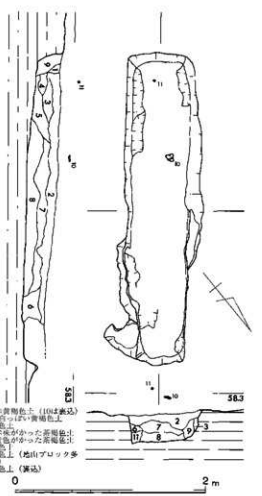


図28　59号墳主体部実測図

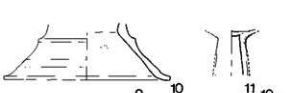


図29　59号墳出土遺物実測図

10. 60号墳

古墳群が営まれる馬背状の尾根の鞍部に位置する。墳頂の標高は57.0m で、隣接する61号墳とはほぼ同じ高さで並んでおり、南西方向に56号墳、北東方向に62号墳を仰ぎみる場所に立地している。

調査は墳丘の北西斜面を除く大半を対象として行った。墳丘は1辺7mの方墳で、墳丘は現状では盛土が確認されず、地山の削り出しによって造営されたと考えられる。なお墳頂平坦面は山道によって南半の一部を削平されていた。

他の古墳と同様、尾根斜面側の墳端は確認できなかったが、隣接する古墳と共有する溝によって両端が区画されている。

59号墳側の溝は断面U字形で、幅1.0m、60号墳墳頂からの深さ0.2m 程度まで地山を掘り込んだもので、土層の観察では59号墳との切り合い関係は確認できなかった。

61号墳側の溝は、調査時点では確認できなかったが、土層断面では溝の切り合う可能性が考えられた。まず、溝は深く鋭角なV字状に地山に掘り込まれている。この溝が図30の土層図第15層以上が堆積したところで、第14層以上に見える新しい溝が旧溝と軸をずらし、60、61号両墳丘の一部を削り込んでつくられている。土層断面からは溝と古墳との対応は判然としないが、平面では、深い旧溝の直線が61号墳の墳丘の軸に、また浅い新溝が60号墳墳丘の軸にそれぞれ直交していることから、61号墳築造の後、60号墳が築造された可能性が考えられる。ただし、・60号墳主体部と後述する61号墳の第2主体部とは構造が非常に類似する、・61号墳第1主体に棺床が使われること、・同一古墳上に中心主体となる同規模の主体部を並列して作ることは第Ⅲ支群中ではみられず、第Ⅴ支群13号墳、14号墳で初めて確認される新しい要素であることなどから、浅い新溝がどの主体部の築造段階で掘り直されたものかは一概には判断できない。

主体部は、墳頂部中央に2段掘りで箱式木棺を埋葬主体とするもの1基が検出された。表土より0.2m 程下げた地山面で掘方を検出し、長軸は尾根に直交して造られている。調査区を北西にわずかだが拡張して墓壙全体を検出した。

主体部　主体部は2段掘りの墓壙で、平面は長方形を呈し、規模は長辺3.3m、短辺1.5m、深さ0.4mを測る。主軸方位はW－44°－Nである。墓壙2段目のテラスは両側板側に0.3m程度と幅を広くとり、小口側は平坦面が狭く明確な段を作らない。下段の壙は長辺3.0m、短辺0.8m、深さ0.2mで、ほぼ垂直に掘り込まれており、その下端には深さ2～3cm程の浅く細い掘り込みがめぐる。この掘り込みは棺を据え付けた痕跡と考えられるが、土層断面からはこれに一致する棺痕跡は確認できず、やや内側に寄るように裏込め土が分層できた。可能性としては土圧により棺外の土が内側に押し込まれたか、もしくは下段の掘り込み時にできた工具痕と考えられる。

以下土層断面の観察より推測できることを列記しておく。北西小口では小口板と裏込め土は棺内に倒れ込んだように観察された。南東側の小口では比較

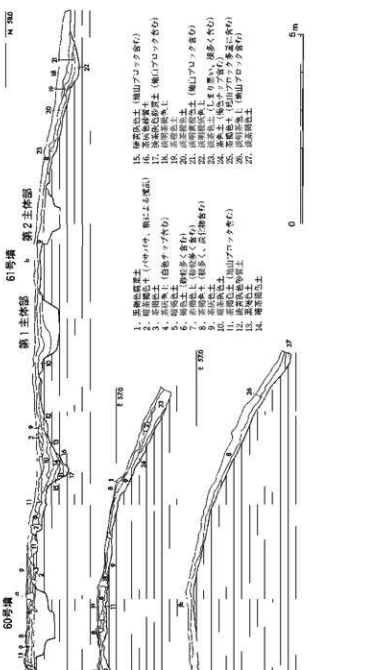


図30　60・61号墳土層図

的裏込め土と小口板の境が立った状態で観察できるが、ここから棺身の高さが0.3m以上あったことが推測でき、埋葬時この棺が墓壙2段目のテラスより上に棺身上部を出していたことが推定される。棺痕跡より復元できる棺の規模は棺長2.5m、幅0.5m、棺深0.35mで、棺底板の有無は不明である。

このような構造の2段掘りの墓壙は、後述する61号墳の第2主体と非常に類似しており、溝に新旧関係がある可能性が指摘できるものの、主体部造営の時間的な近さが窺える。

主体部から遺物は検出されなかったが、壙底面付近で土が赤味を帯びる部分（図31のスクリーントーン部）が確認された。北西小口側で薄く土ににじむように検出されたもので、赤色顔料を撒布したものか、それが付着した有機物を副葬していた可能性が考えられる。これにより被葬者の頭位が北西に置かれた可能性が指摘できるが、遺構からは明確な根拠は確認できなかった。

なお、第2主体と考えていた小形の土坑は深さが0.2m前後の不定形なものであり、土層観察等により、根の痕跡であると判断した。

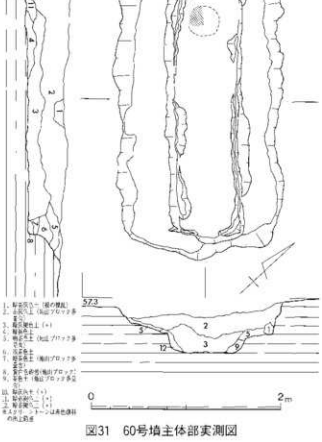


図31　60号墳主体部実測図

11. 61号墳

60号墳と65号墳との間にあり、第Ⅷ支群を構成する尾根筋の屈曲点に位置する。60号墳の間は前述のように、他の区画溝と比較して深いV字の溝によって区画されている。

墳丘は長辺約9m、短辺約8mの方墳で、墳頂の標高は57.0mである。盛り上は観察されず、地山削り出しによって築造されている。

ここからは素掘りの墓壙で礫床を有する第1主体部、2段掘の墓壙の第2主体部、土器棺の第3主体部の3基の主体部が検出された。前述したが、中心主体が2つ存在すること、礫床を有することなど、第Ⅷ支群の中では新しい要素をもっている。

第1主体部　素掘りの土壙で礫床を有する。墓壙は長辺3.3m、短辺1.5m、深さは検出面から0.45mを測る。主軸方位はS−31°−Eで尾根に直交する。主体部南東側の上部は、後世に削平を受けてしまっているが、当初は隅丸長方形の墓壙であったと推測される。この主体部では土層断面から木棺の痕跡を検出しており、副室の存在も確認した。礫は主室にのみ敷かれている。礫床および土層断面から、主室の内法は長辺2.1m、短辺0.5mとなる。副室の長辺は約0.25mであり、主室と副室の長辺を合わせた長さは約2.4mとなる。礫床の端部を直線的に検出しており、木棺を組んだ後、礫が敷き詰められたと推測される。また、礫床周辺からは角礫を数点検出しており、木棺の組み立て時に裏込めに使用した可能性が考えられる。礫床は北西側に約1～3cmと細かな礫を、特に小口・側板付近には1～2cm程度の小礫を多用していたのに対し、南東側は約4～5cmと、比較的大きめの礫を多く使用していた。これは、意図的に礫を使い分けていたことを示すものと思われる。礫床上面の高さは南東側が高いものの、北西側の礫床は扇圧、特に北西側小口付近と北東側側板付近がやや盛り上がるように置かれていた。図32には礫床面から浮いた状態で検出した礫をドットで示したが、やはり北西側小口付近と北東側側板付近に集中している。これは、北西側小口板と南東側側板に沿って高く積まれていた礫がその後、棺の内側へ転がったためと推測される。この他に墓壙覆土からも少量の礫を検出している。礫の量に違いはあるが、覆土に礫を混入させる事例は、奥才14号墳の第1、第2主体部でも認められる。

なお、この礫床に使用された礫の総重量は38.3kgであった。

出土遺物としては、礫床南東側から刀子を1片検出している。頭位方向については、礫床上面が高くなっていること、刀子を検出したことから、南側と推定した。

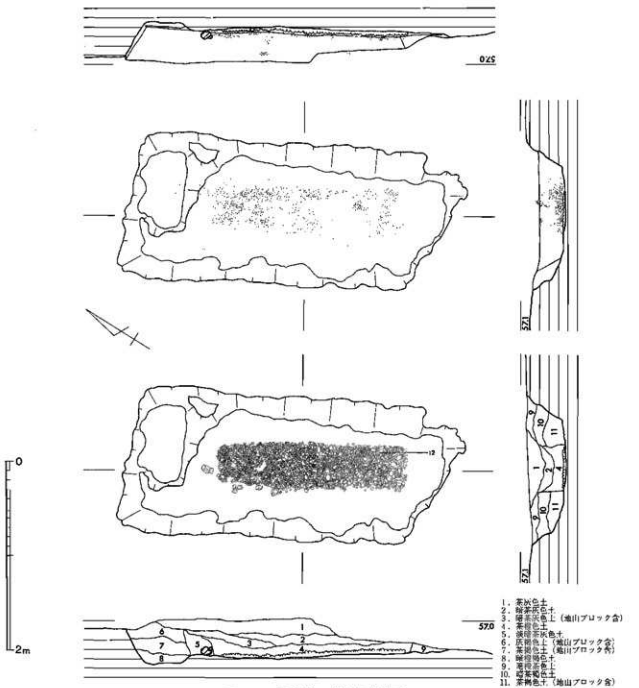


図32　61号墳第１主体部実測図

第１主体部出土遺物　刀子12は残存長4.8cmの茎で刃部を欠く。錆化が著しく、刃部と茎部の境界は判断できなかった。幅は0.5cm、厚さは0.2cmで断面は縦長三角形である。この刀子には木質が付着している。付着する木質は斜めに繊維が見え、鞘とは考えにくく、棺材の一部が付着したものと推測される。

第２主体部　２段掘りの土壙で、長辺3.5m、短辺1.4m、深さは検出面から0.4mを測る。墓壙東側隅は第１主体部同様、一部後世の削平を受けており、西側隅も木の根を除去する際に破損したが、当初は隅丸長方形の墓壙であったと考えられる。主軸方位はS－31°－Eで第１主体部と軸を揃える。ここでも土層断面から木棺の痕跡を確認した。棺内法は長辺2.1m、短辺0.3mで箱式木棺と考えられる。掏小口付近には棺材を据えるための溝を検出した。なお、この主体部からは、遺物は出土しなかった。頭位方向は、墓壙底面の高さから南側と推測される。

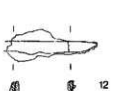


図33　61号墳第１主体部出土遺物実測図

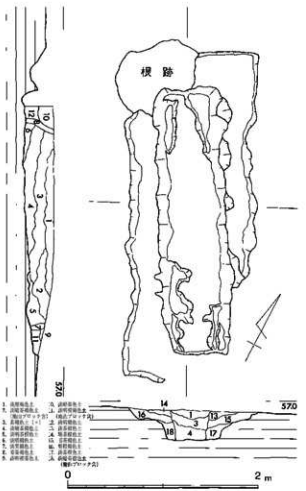


図34　61号墳第２主体部実測図

第３主体部　第１主体部の西に隣接して、墳頂平坦面の西寄りにつくられている。

現状で長辺0.8m、短辺0.4m、深さ0.2mを測る土壙に、２個体の甕の口を合わせ、横向きの状態で据え、埋葬施設としている。主軸方位はE－42°－Sである。

甕はいずれも単純口縁のもので、一方は口縁を打ち欠いて、もう一方の甕の口縁に据えている。木の根が、甕、土壙の一部を壊している。北西の甕14は底部を残しているが、南東の甕13は底部がなく、根により粉砕されたか、わざと打ち欠いている可能性も考えられる。

小形の土器棺であることから、乳幼児が埋葬されたものと思われる。

出土遺物　単純口縁甕が２個体ある。甕13は口縁部が内湾ぎみにたちあがり、端部に平坦面をもつ。最大径は胴部中位にある。外面は風化のため調整は不明である。内面は横方向のケズリを施す。底部を欠損している。甕14は口縁部が打ち欠かれている。体部の最大径が甕13より高位にある倒卵形となる。全体的に器壁が薄くつくられる。風化のため、外面はほとんど調整が観察できない。内面は、体部上半部は横方向および斜め方向のヘラケズリが施され、底部付近に指頭圧痕がみられる。２個体とも赤褐色を呈する。いわゆる布留甕である。

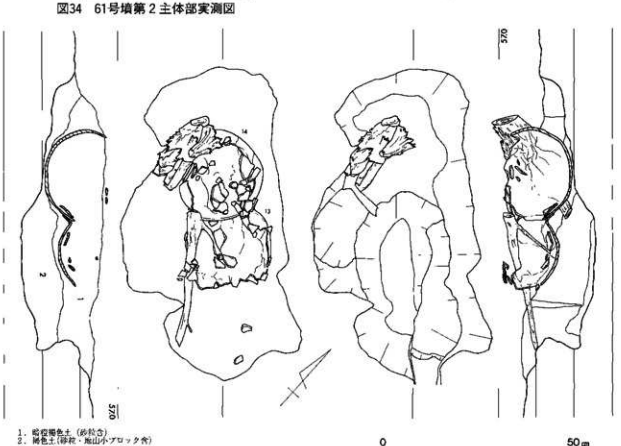


図35　61号墳第３主体部実測図（１／10）

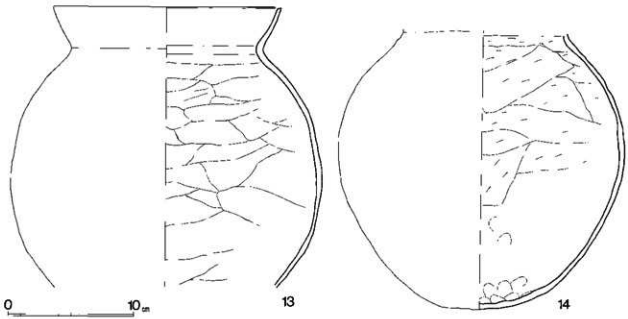


図36　61号墳第３主体部出土遺物実測図

12．65号墳

調査前は、61、62号墳間の空隙地と考え墳丘の存在を予想しなかった尾根鞍部に位置している。墳丘は１辺約５ｍの方墳で、墳頂の標高は56.3mである。土層の観察から、墳丘にはいくらか盛土がされていたようで、本来の墳丘は今よりいくらか高いものと思われる。

墳丘の東側では、62号墳墳裾を削って区画する溝をつくり、61号墳築造の際に掘り直されるが西側にも区画溝があり、また67号墳築造の際に掘り直されるが南側にも区画溝がある。墳丘周囲にあわせて３本の溝を掘り込んで墓域を区画していたことになる。第Ⅷ支群では斜面側に墳裾を区画するものは、この１例のみである。

主体部は素掘りの墓壙で、現状で長辺2.6m、短辺0.8m、深さ0.2mを測る。墓壙は、木の根によって、南西側の床面から上面にかけてと、北東側の床面の一部が壊されている。土層の観察で棺痕跡を認め、縮式木棺が納められていたと推定される。これにより、棺内法は長さ1.7m、幅0.5mと推定され、検出面からの深さは0.15mである。

墓壙床面の幅は北東側がやや広いが、床面は南西側がわずかに高くなっており、頭位方向について明

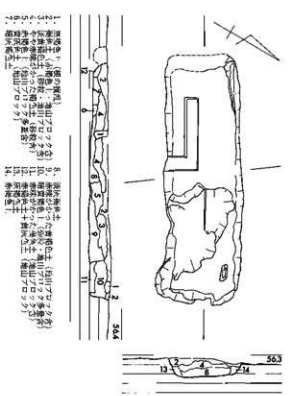


図38　65号墳主体部実測図

図37　65号墳土層図

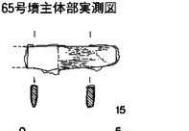


図39　65号墳出土遺物実測図

言はできないが、仮りに北東側とすると、主軸方位はE－30° Nである。

周囲の区画溝とそれぞれ隣接する古墳との切合い関係を整理すると、65号墳の東溝は62号墳墳裾を削り、65号墳の南溝は67号墳の北溝に壊され、67号墳の北溝は61号墳の東溝に壊されていることから、62号墳－65号墳－67号墳－61号墳という築造順序が復元できる。

出土遺物　墓壙排土から刀子15が見つかっている。茎から刃身にかけての一部が残っている。茎部に木質が付着しており、柄が装着されていたと思われる。棟関はみられない。鋲の付着により、刃関があるようにみられたが、はっきりとはわからなかった。茎、刃身は偏平なものである。

刃身が欠損しているため、細かい分類はできないが、少なくとも古墳時代前半期におさまるものであろう。

13．67号墳

65号墳墳裾に掘り込まれた「コ」字形の周溝をもつ辺約2.5mの小墳丘で、この墳丘中央やや西寄りに土師器壺1が埋納されていた。

周溝は65号墳南辺を一部削るように掘り込まれており、幅0.8～1.4mを測り、深さは0.2mである。底面はさほど平滑に仕上げられた様子はなかった。

主体部である埋納壙は長辺1.1m、短辺0.9m、検出面からの深さ0.4mを測るもので、壙南辺のみは2段掘りとなっている。

埋納された壺は1個体のものを縦に半截し、壙内に伏せられており、土器の継ぎ目には口縁部片などが副えられ、隙間が塞がれている。壺は陥没することなく内部に空間を留めていた。壙内で上方に位置する胴部中央付近には、検出時に陥没したものとは別な、さしわたし約10cmの焼成後の穿孔があるが、調査時まで壺内部に空間をとどめていたことからす

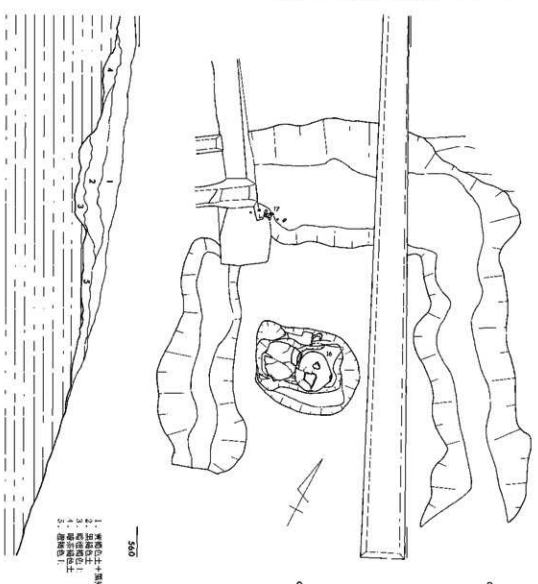


図40　67号墳実測図（1／40）

ると、穿孔は何らかの有機質のもので蓋をされていた可能性がある。検出面では埋納された壷の頂部が見えており、本来はこの上に盛土による小墳丘が作られていたものと考えられる。

これらの形状から、この主体部は、乳幼児を埋葬したものと考えられるが、壷内には骨などは残っていなかった。また、壷を縦に文字どおり半截しているため、壷頸部に相当する部分では幅はわずか9cm、高さ5cmしかなく（図版23中段）、壷の中央に位置するこの部分では物理的に埋納が困難であり、いずれか一方の壷体部内あるいは両方の体部内に納めたものか、固体でないものを納めたものか判断しかねる。

遺体を納めたものと仮定して、復元できる埋納の順序は、以下のようである。

①周溝内側の墳丘基底部内に壷を据り、②約15cmの厚さに土を入れ、壷底を整える。③遺体を安置する。④これに前後して、複合口縁壷を縦に半截し、⑤一方に穿孔を行う。まず、⑥底部から口縁部までつながった破片を東から西向きに伏せる。続いて⑦口縁部を欠いたもう一方の体部を頸部断面が南に向くように先の個体の口縁部にかぶせる。この後、⑧両体部片の接する個所に後者の体部から外れた口縁部片を重ねて隙間を塞ぎ、穿孔部分も何らかの有機質のもので蓋をする。⑨壙を埋め戻し、⑩墳丘を築く。

なお、67号墳と65号墳墳丘とを区画する周溝北西隅では、やや浮いた状態で土器数片が出土しており、17として掲載した。

出土遺物　主体部を構成し1個体に復元できた壷16は、やや偏平な胴部をもつもので、底部は小さいながらも平底を有する。短い頸部から複合口縁部を経て、大きく外反する口縁にいたる。器高45.8cm、胴部最大径40.7cm、口縁径25.5cm、底径7.0cmである。淡い赤褐色を呈する。口縁内面には黒色の付着物が認められる。口縁部内外面は、横方向のヘラミガキで仕上げられ、体部外面はハケで調整した後、縦方向の細かいヘラミガキで仕上げる。体部内面は、下半部では底部を中心に横方向のハケメ、上半は縦方向のヘラミガキと横方向のヘラミガキを丹念に施す。内面には水平に粘土の積み上げ痕が認められ、

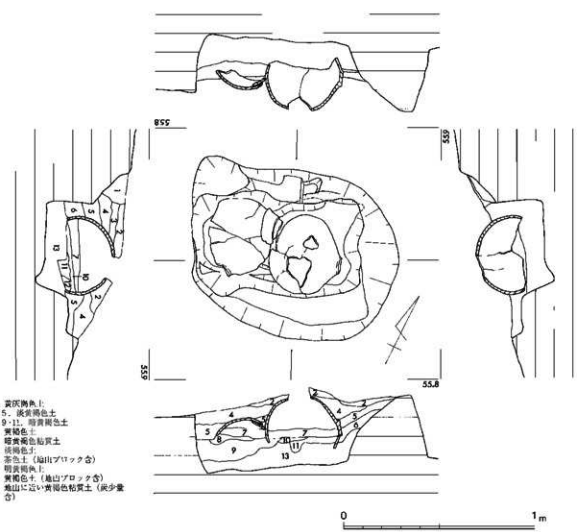


図41　67号墳主体部実測図（1／20）

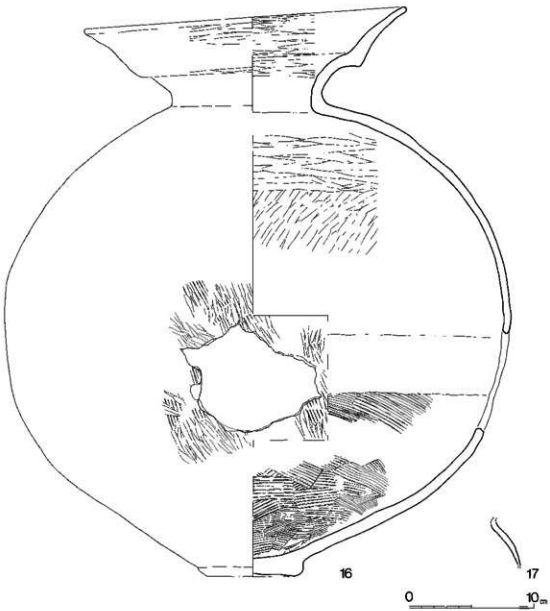


図42　67号墳出土遺物実測図

これを境として調整が異なる部分がある。成形の工程を示すものであろう。器形からは、在地系のものとは考えにくく、また、胎土も若干異なるようである。近畿庄内式の系譜を継ぐものであろうか。

65号墳との境の溝から出土した土器片17は、小形の壺などの肩部と考えられる破片で、赤褐色を呈し、内面にかすかにハケメをとどめる。小形丸底壺であろうか。この個体はあるいは65号墳から転落したものの可能性がある。

土器棺　67号墳土器棺は、在地の土器を使わない埋葬である。奥才古墳群での土器を使う乳幼児埋葬には、このような非在地系の土器の使用が注意される。第Ⅲ支群61号墳第３主体、63号墳第１主体、第Ⅴ支群遠結墓は、それぞれいわゆる布留甕を使用している。63号墳第１主体は若干新しい形態を有するが、布留甕の範疇に含まれる。乳幼児の埋葬に非在地系、特に近畿系譜の土器を使用することの背景、意味は今明らかにはしえないが、当時の対外交渉をなんらかの形で反映しているものと考えられる。

65号墳を避けて斜面につくられたこの古墳の立地は、65号墳築造後にしかつくりえない位置にあり、67号墳は65号墳に後出して作られたという先後関係ととらえることができる。同様な立地をもつものに、第Ⅲ支群では68号墳に付随する番外１号墓があるが、これは明瞭なマウンドを持たない例である。第Ⅴ支群39号墳も、13号墳墳裾線に周溝を沿わせるように作られており、類似の例といえる。

また、壺内に遺体を納めるスペースが不足する点では、第Ⅴ支群34号墳が、墳内に大形の壺を正位に埋納しながら、壺内には礫が充満しており、成人遺体を納める余地がなかった例であり、類例として検討しうる。

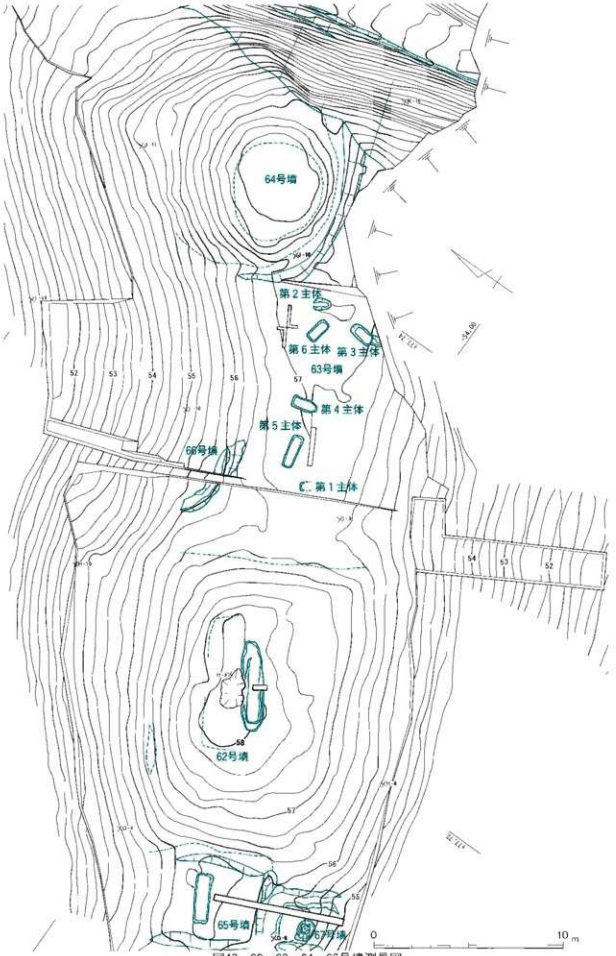


図43　62・63・64・66号墳測量図

14. 62号墳

第Ⅶ支群のある尾根の北東側に位置し、南西から降る尾根がもう一度高く隆起する部分に墳丘が造られている。墳形は尾根筋に長軸をとる縦長の方墳で、長辺約16m、短辺約14mを測る。また墳丘は、墳頂面との比高が南西墳裾とは2m、北東墳裾とは1.5m近くもあり、支群中の他の古墳にない明瞭な墳丘が造り出されている。これは支群中最大の墳丘規模である。墳頂面の標高は58.0mで、尾根最高所より低いものの、立地的には平野部に近く、その眺望は56号墳に劣らず平野を一望できる。これらの規模、立地から、62号墳が支群中では56号墳と並び盟主墳にふさわしいものと推察される。

墳丘は、東側の半分を後世の山道で大きく掘削され、墳頂平坦面は原形を留めていない。また墳裾は比較的残りがよいが、区画溝は北東側でやや墳裾から間をおいてわずかに窪む部分を確認できるものの、62号墳に伴う明確な痕跡はなく、また南西側の溝も65号墳に削り込まれており、62号墳に伴う溝の有無は確認できなかった。墳丘として他に例のない高さをもつため、本来、区画溝をもたない墳丘であった可能性も考えられる。

なお、南西側墳端は65号墳に削られており、62号墳は65号墳に先行して作られた古墳であることが確認できた。

墳丘土層の観察からは盛土は確認できず、墳丘はその基礎を地山の削り出しによって造成されたと考えられるが、後述の主体部の検出状況からは、現存よりも高い墳丘が造られていたと想定され、墳丘盛土はかなり流出している可能性がある。

主体部　墳頂平坦面の中央で2段掘りの墓壙に刳抜き木棺を埋葬主体とする主体部1基が検出された。墓壙の平面形は長楕円形で、長軸を尾根筋に沿わせており、主軸方位はW−35°−Sである。規模は長軸4.7m、短軸1.2m、深さ0.4mを測り、支群中で最も長い壙である。

墓壙は地山面より検出したが、墓壙南東側は道のため大きく削られ、また一部北西側も風倒木に壊されており、さらに表土から検出面までが0.2mと浅い上、大きく根の攪乱を受けており、墓壙2段目のテラスまでの掘り込みの立上りも明瞭には検出できなかった。現状では墓壙自体もかなり浅く、かろうじて残存した墳丘北西側の墳頂面に、墓壙の底部が検出できたものと考えられ、墓壙上部のほとんどが流失しているものと判断される。墳丘自体の遺存状態が良ければ、より規模の大きな墓壙であったことが推測される。

墓壙の構造は前述のとおり不鮮明ではあるが、まず壙内テラスと下段の掘り込みが確認でき、支群中の他の2段掘りの墓壙と比べると、小口側にもテラスが広く作られているようである。また2段目の掘り込みは不明瞭ながら、長軸方向に長い隅丸長方形で、規模は長軸3.5m、短軸0.8m、深さ0.3mと長く浅い壙であり、棺身全体を収めるものではなく、棺底を据え置くための壙と推察される。

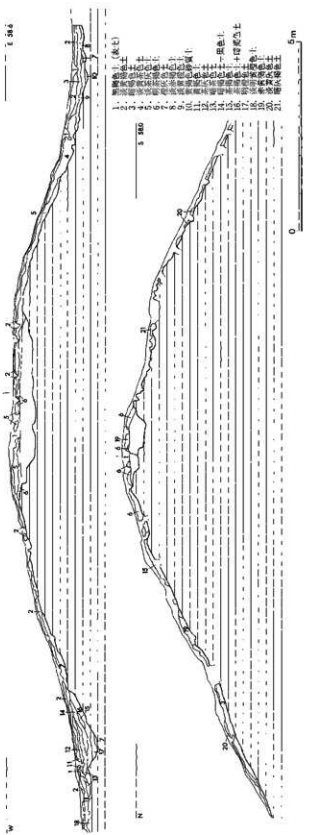


図44　62号墳土層図

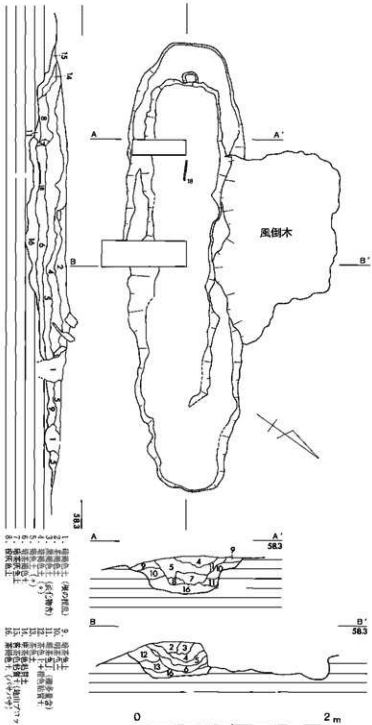


図45　62号墳第１主体部実測図

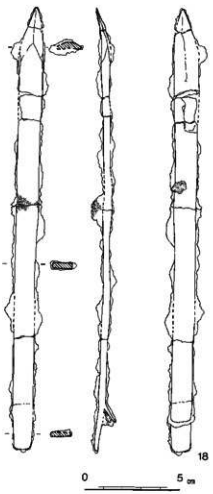


図46　62号墳第１主体部出土遺物実測図

幕壙覆土の土層横断面からは断面じ字形の棺痕跡が検出され、刳抜き木棺が使用されたと推定されるが、56号墳第１主体とは違い、土層縦断面では棺底は直線的に検出され、舟底状の木棺ではなく、割竹形木棺が使用されたものと考えられる。また、壙底面には棺底との間に土が一層敷かれており、棺を水平に置くための配慮がされたものと推測される。

鏃18が棺中軸の南西側で検出された。十層断面で仕切り板状に検出された図45土層７のすぐ内側、棺底痕跡の直上にほぼ水平な状態で検出されており、棺内の南西端に副葬されたものと考えられる。鏃は長軸をほぼ棺の主軸に揃え、切っ先を棺の中心である北東に向けており、刃部の裏面が上を向くように置かれていた。この副葬品が被葬者の頭部付近に置かれたとするならば、頭位方向は南西であると考えられる。

出土遺物　鏃18は、全長23.4cmで、刃部は長さ2.5cm、最大幅1.2cm、最大厚0.4cmである。両側に刃を付け、やや反りをもち、反りの内側に三叉鏑をつける。裏面が逆状を呈する。刃部を除く部分は長さ20.9cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmで、断面形は長方形である。裏面には下端より2.5cm程のところに長さ１cm、幅１cm程度の板状の突起が下方約40°の角度で付いているが、本来のものか、錆が隆起したものか判断できない。柄の下端部はその突起の位置でわずかに屈曲する。表面の一部には木質が錆着している。この木質は、柄に由来するものか、植材に由来するものかは不明であるが、長軸に平行するものとしないものがある。

15. 63号墳

63号墳は明瞭な墳丘をもたず、所在した土壙墓群に伴う出土土器から弥生時代後期の土壙墓群と判断した。土壙墓群の南西端には、古墳時代の土器棺が1基みられるが、土壙墓群と同じ平坦面につくられているので、これらの墓をもつ平坦面を便宜上「63号墳」と表記する。

63号墳は、62号墳北東の平坦面に位置し、墳頂の標高は57.3mである。北側はかなり急な斜面になっている。Ⅷ－1支群と異なり、地山に岩脈はほとんどみられず、岩盤の風化した茶褐色の地山に土体部が掘り込まれている。主体部は6基見つかっている。うち、1基は土器棺で、古墳時代のものである。他の5基は、隅丸方形の墓壙をもち、そのうちの2基が弥生時代後期の土器を伴っている。

土器棺である第1主体部は、62号墳と約4m離れており、この間には遺構はない。第2～6主体部は主軸方向が南北と東西方向の2方向に分けられるが、それ以上の規則性は認められなかった。残存状況が悪いことにもよるが、墓壙の規模が小さいものが多い。遺物が伴うのは、第2、第3主体部である。その他の主体については、明確な根拠はないものの、埋葬主体が似ること、床面から想定される掘り込み面がほぼ同一の時期と考えられるため、第2～6主体部は弥生時代後期の墓壙と判断した。

第Ⅷ支群の古墳群が築造される以前には、こうした墳墓群として尾根の利用がされていたことが判明した。また、古墳群には直接続かないが、この支群尾根にはすき間なく古墳が作られていることから、この地点だけに墳丘が作られないのは、古墳時代前期段階にはまだ前代の墓域であるとの認識が残っていたのであろう。

第1主体部　トレンチ設定のために、土器を残し、壙の半分を掘り下げてしまった。このため、壙の長辺は不明だが、短辺0.4m、深さ0.1mの壙に土器が据えられている。主軸方位はS－39°－Eである。

所在する位置や古墳時代の土器棺であることから、この土体部の北斜面にある66号墳との関係も考慮される。

土器棺には、土師器の単純口縁壺19を使用している。壙の大きさから、乳幼児を埋葬したものと推定される。1個体の壺を口縁部と体部に分割し、さらにこの体部を縦に2分割した計3片で遺骸を覆ったものと考えられる。分割した体部の1片を壙内南側に底部が北を向くように伏せ、これにもう1片の体部をやはり底部を北にむけて重ねて遺骸を覆ったものと考えられる。さらに口縁部を口縁端が北を向くように重ねていた。この後、壙を埋め戻しているものと考えられる。ここから人骨や副葬品等は出土しなかった。

出土遺物　単純口縁の壺19は、体部がかなり細片になっており、接合できなかったが、復元すると図49のようになると思われる。

口径は17.6cmを測る。復元したものから推定する

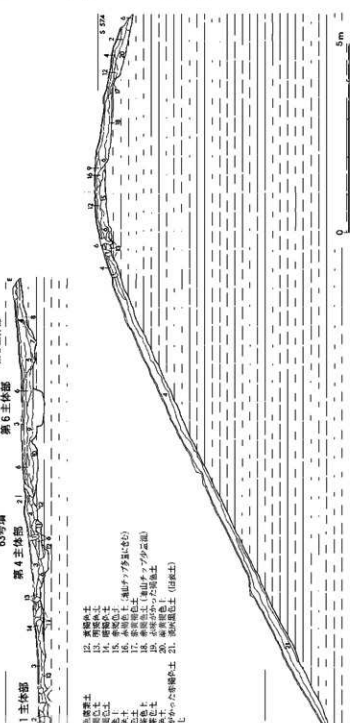


図47　63号墳土層図

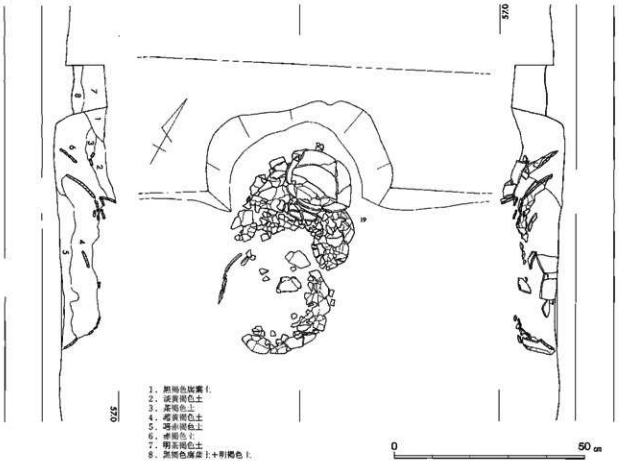


図48　63号墳第１主体部実測図（１／10）

と、胴部は約29cm、器高は約30cmの程度になるものと考えられる。

全体的に器壁は薄く仕上げられており、丸底で、体部にはやや長胴化の傾向がある。頸部と口縁部の接合部はやや厚みをもち、口縁部は端部に向けて直線的に開き、端部をわずかに外方に屈曲させる。また、口縁は端部に向かうにつれて、器壁を薄く仕上げている。

外面は、風化してほとんど調整を観察することができないが、破片の一部にハケメが確認できるものがあった。内面は、底部に指頭圧痕が残り、頸部下には横方向のヘラケズリと指頭圧痕を留める。

古墳時代の土器ではあるが、布留式の範疇に含めうるものであろうか。

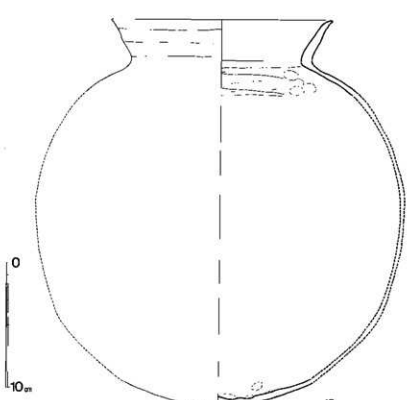


図49　63号墳第１主体部出土遺物実測図

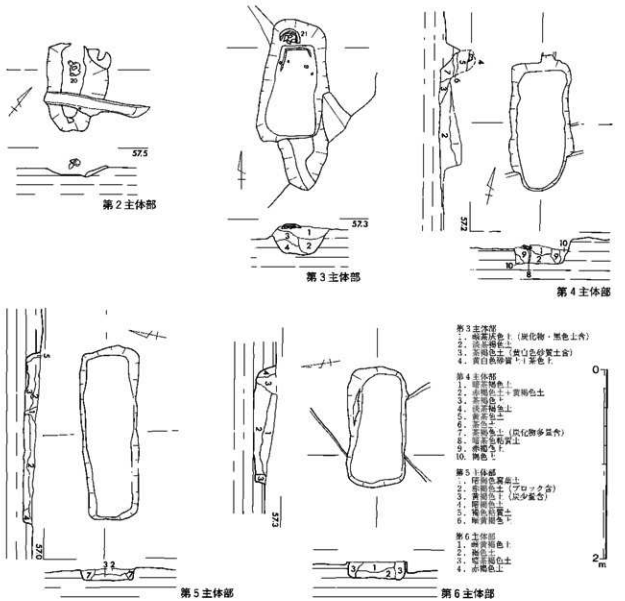


図50　63号墳第２～第６主体部実測図

第２主体部　平坦面の東端に位置する素掘りの墓壙である。上部はほとんど残っておらず、北西部分も失われている。規模は残存部分で長辺0.9m、短辺0.6m、検出面からの深さ0.1m を測る。底面の北西側が、低いが幅は広く、遺物も出ることから北西頭位であるものと考えられ、主軸方位は N－31°－W である。

墓壙中央からやや北側で、底面から６cm浮いた状態で鼓形器台**20**が見つかっている。壙底が近い上、ド台部の開いた方を上に向けていることから、土器枕として使われた可能性があるかも知れない。その場合には墓壙の端までの距離が60cm程と短く、子どもを埋葬したことが想定されよう。

出土遺物　鼓形器台**20**は下台部から長い筒部にかけての下半の破片で、ド台部は径の半分ほどが残存している。下台部の復元径は16.5cm、残存高14.4cmを測る。表面が風化しているため、調整は不明瞭であるが、外面の一部にナデが、下台内面にヘラケズリが認められる。下台部に擬凹線は施さない個体である。筒部上端は、上台との接合面で剥離している。淡赤褐色を呈する。類例として安来市九重遺跡出土のものがあげられる。弥生時代後期中頃のものと思われる。

第３主体部　平坦面の南東隅に穿たれた土壙である。主軸はほぼ南北方向である。主体部の規模は長辺1.3m、短辺0.7m、検出面からの深さ0.4m を測る。底面は北側が狭くて高い。遺物が北側から見つかっていることから、北頭位であると思われ、方位は N－10°－E である。また北側の小口付近に浅い溝が認められることから、箱式木棺を組んだものであると考えられる。

北側の小口付近で、底面から25cmほど浮いて、口縁端を下にして伏せた状態で甕口縁部**21**が見つかっている。墓壙上面にあったものが陥没したものと考

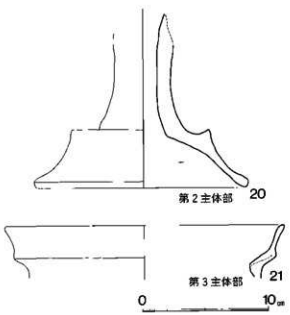


図51　63号墳第２・第３主体部出土遺物実測図

えられる。

出土遺物　壺21は口縁部の破片で、径の半分弱ほどが残っている。復元口径は22.2cmを測り、中形のものである。口縁は外傾して立ち上がる古手の複合口縁である。風化して化粧土が剥落しており、不明だが、径１mm前後の砂粒を多く含む。暗赤褐色を呈する。弥生時代後期前半に含まれるものであろうか。

第４主体部　平坦面ほぼ中央に位置する。主軸はほぼ南北方向である。主体部の規模は、長辺1.4m、短辺0.6m、検出面からの深さ0.3m を測る。底面は南側が若干高く、南頭位であると想定した。主軸方位はS－14°－E を測る。しかし、墓壙の北側上面には拳大の石材を伴うことから、北頭位の可能性も残されている。墓壙は、ほぼ垂直に掘り込まれている。墓壙横断土層で棺材の痕跡とみられる立ち上がりが認められたことから、箱式木棺であると考えられる。

第５主体部　平坦面の西側、第４主体から1.2m ほど離れたところに位置する。主軸はほぼ東西方向で、第４主体とは直交する関係にある。主体部の規模は長辺1.8m、短辺0.5m、検出面からの深さ0.2m を測る。底面は東側が高くて広く、東頭位であるものと思われ、方位はE－14°－N を測る。土層の堆積状況からは、箱式木棺であると考えられる。

第６主体部　平坦面の東側、第２主体から西に0.4 m 離れたところに位置する。主軸はほぼ東西方向である。主体部の規模は長辺1.3m、短辺0.6m、検出面からの深さ0.3m を測る。底面は西側が高くて広く、西頭位であると思われ、方位はW－12°－N を測る。土層の堆積状況からは、箱式木棺であると考えられる。

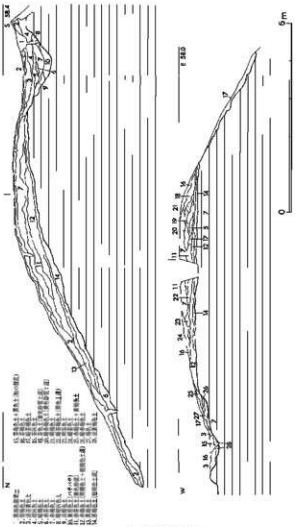


図52　64号墳土層図

16．64号墳

63号墳平坦面北東に隣接し、尾根筋からは外れて、わずかに北東側に突き出す小尾根に築かれた円墳で、直径約10m、墳頂の標高は57.8m を測る。調査は土層観察用のトレンチを、尾根とそれに直交する形で設定して行なった。結果、旧表土の黒褐色土を墳丘下で確認し、墳丘は盛土によって作られたことがわかった。墳丘の南半部では地山を掘り込んで弧状に周溝をめぐらせており、その土を墳丘の盛成に用いたものと思われる。しかし、盛土が流出し、盛土内にあった主体部もまた失われたものと推測される。

周溝は検出面で、上面の幅は1.1～2.1m、底面の幅は0.3～1.0m、深さは0.5m を測る。南東側は２号道により、南側は旧県道によって削られているが、整美な円墳という印象を受ける。

遺物出土状況　墳丘北半では、墳裾にめぐらせた円筒埴輪が５個体検出された。このうち東側の２個体は掘られた状態で、掘り方まで残っており、原位置と考えられる。この付近は少し平坦で、テラスとなっていたものと思われ、上層の堆積状況からもそのことを確認した。残り３個体の埴輪は墳丘北側斜

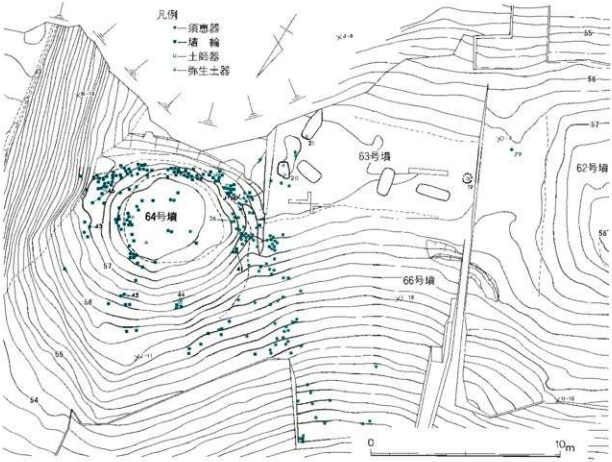


図53　64号墳遺物出土状況図（1）

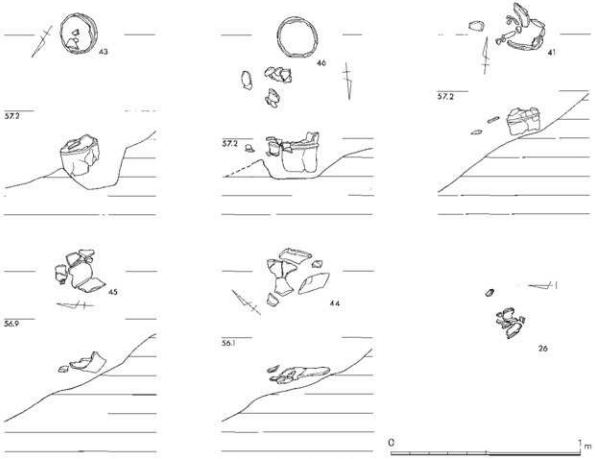


図54　64号墳遺物出土状況図（2；1／20）

面を若干低い位置にめぐらされており、平野側から見た際に墳丘が大きく見えるような配列が意図されているものと考えられる。他にも墳丘上面や周溝からは多数の円筒埴輪片が採集されており、墳丘上部にあったものが転落したことが推測される。以上のことから、墳裾には5個体以上の埴輪がめぐらされ、また墳頂にも個体数は不明だが、埴輪が樹立されていた様子が想定できる。

墳丘を北西側に下った斜面からは須恵器の大甕の破片が点々と見つかっている。古墳に伴って大形の土器が検出される例はこれまでにもいくつか知られており、先の奥才1号墳の調査でも、墳丘を区画する溝から須恵器の大甕が出土している。64号墳とは時期的にも比較的近く、また立地も似ていることから、64号墳においても同様にして用いられたものと推測される。

周溝からは埴輪の他に、須恵器の蓋杯や有蓋高杯が採集されている。これらは一般的に、副葬品として主体部に供えられるものであり、このことからも主体部の流失が窺える。

出土遺物　土師器は1点のみ、赤彩された小形の壺**22**が出土している。複合口縁を痕跡的に留めるもので、調整は外面にはミガキ、内面下半にはケズリが認められる。胴部最大径は10.2cmを測る。

須恵器は蓋杯や有蓋高杯、大甕が出土している。蓋杯はセットで1個体分が見つかっている。蓋**23**は口径に比して器高が高く、明瞭な稜を持つ。稜を挟んで上下をわずかに凹ませ、稜線を強調する。口縁端部には段を有する。天井部外面は回転ヘラケズリを施し、ロクロの回転方向は右である。口径12.2cm、器高5.6cmを測る。杯**25**は底部から体部にかけて丸味をもち、立ち上がりはやや内傾し、端部はやや肥厚し段を有する。底部外面は回転ヘラケズリを施し、ロクロの回転方向は右である。底部内面にはナデ調整、その他には回転ナデを施す。口径11.0cm、受部径12.9cm、器高5.2cmである。有蓋高杯には蓋が1個体、高杯が4個体分ある。蓋**24**は口縁部片で、復元口径14.0cmである。口縁端部に向かい肥厚し、段を有する。内外面ともに回転ナデが認められる。高杯**26**～**31**はいずれも同様の特徴をもつもので、それらを列挙すると、脚部が短くハの字に開いていくもので、筒部には三方向に長方形の透し孔を開ける。脚端部外面にはしっかりとした明瞭な段を有する。杯部立ち上がりは内傾し、端部には段を有する。調整は杯部外面下半に回転ヘラケズリ、ロクロの回転方向は右である。底部内面、その他には回転ナデが施される。**26**は杯部が1/3残るもので、復元すると受部径12.5cm、底径8.6cmを測る。透し孔の直下にある段は鋭く突出するが、そのドの段は鋭くない。**27**はほぼ完存し、口径10.8cm、受部径13.2cm、器高10.4cm、底径8.3cmを測る。脚部の段はともに鋭くはないが、上の段では透し孔との間を凹ませることで、段の強調を意識している。**28**は杯部が1/3残ったもので、復元口径11.1cm、受部径13.0cm、器高10.5cm、底径8.6cmを測る。透し孔直下の段はやや鋭く突出するが、そのドの段は鈍い。**29**～**31**は同一個体と思われるもので、復元すれば口径10.9cm、受部径13.2cm、底径8.8cmを測る。口縁**29**は立ち上がり部の破片で端部に段を有する。杯部**30**は1/4が残存しており、透し孔を開ける際の工具痕が残る。脚端部**31**は1/4が残存し、段は両方ともに鋭くない。これら蓋杯や有蓋高杯の類例として、松江市薬師山古墳のものがあげられる。

甕**32**、**33**は胴部片である。ともに外面には格子状の、内面には青海波紋のタタキ目が見られる。**32**は内面のタタキ目を消そうとしているが、**33**では消しておらず、しかもこの個体だけ内面の当て具痕の種類が異なることから、この古墳に伴うものではない可能性がある。**34**は接合しないが、同一個体と思われるものである。口縁部から頸部の破片は内外面ともに自然釉が付着し、同転ナデが施される。口縁には凹線による段がつけられ、端部は丸くおさめている。段の直下には1条の凸帯がめぐらされるだけで、他に何ら装飾は認められない。復元口径は23.4cm、頸部径は16.6cmを測る。肩部片は外面に赤茶けた緑色の自然釉が付着する。外面には格子状の、内面には青海波紋のタタキ目が見られ、上半部では外面のタタキ目はカキ目により、内面のタタキ目は回転ナデによって一部ナデ消されている。胴部片は外面にタタキ目とカキ目、内面に青海波紋のタタキ目が見られる。復元による胴部最大径は約50cmである。底部片は外面にタタキ目とカキ目、内面には青海波紋のタタキ目が見られ、内面底部には頸部に対応する位置に、わずかに自然釉が付着する。

これらの須恵器は山本編年Ⅰ期[10]、すなわち大谷編年でいう出雲Ⅰ期[9]の範疇のものである。先に有盖高杯の類例であげた薬師山古墳例は山本編年Ⅰ期の代表例であり、TK-208[20]にほぼ併行し、同様にⅠ期とされる松江市金崎古墳例はそれよりやや後出するとの見解が出されている[7]。また蓋杯で比較すると、奥才64号墳例は薬師山例に比べ、口径が若干小さくなるが、器高は高くなりやや丸みをもつ点、ナデ調整などに後出する様相が窺える。他に山本編年Ⅰ期の蓋杯の例としては、奥才38号墳例がある。蓋、身ともに口径が64号墳よりも小さく、器高はさらに高い。蓋のロクロの回転方向が左であることから、より先行するものと考えられる。そうすると奥才古墳群内での変遷は38号墳→64号墳→1号墳となる。

埴輪は基底部以外の部位として口縁部やタガ部がある。口縁部片**35**は、復元径28.4cmで、調整は内面

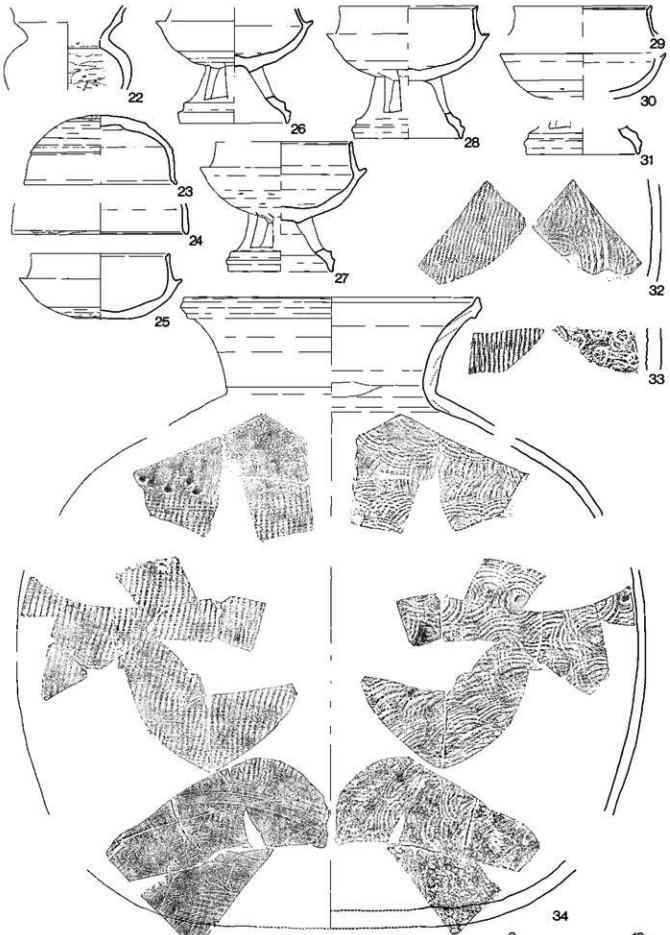


図55　64号墳出土遺物実測図（1）

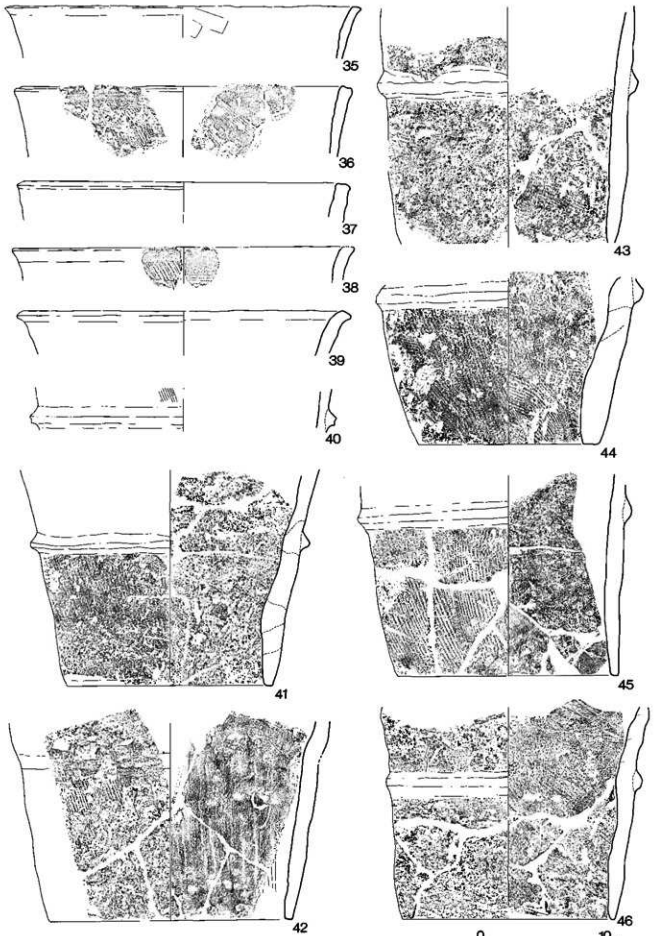


図56　64号墳出土遺物実測図（2）

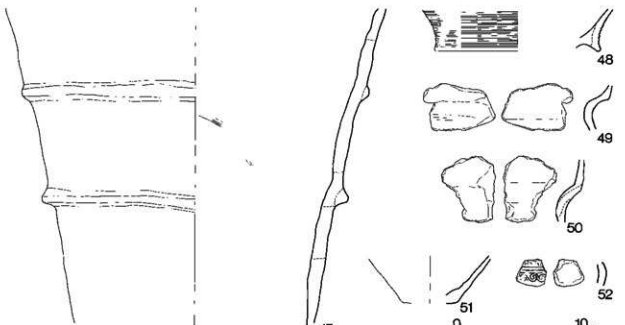


図57　64号墳出土遺物実測図（3）

にナナメハケが見られる。36は復元径27.0cmを測る。内外面ともにナナメハケがよく残る。口縁端面がわずかに凹む。調整は内外面ともにヨコナデが残る。37は復元径26.6cmを測る、やや厚手のもので、口縁端部の外側がわずかに突出する。38は復元径27.3cmで、やや外側に開く。調整は外面にナナメハケ、内面にヨコハケ、口縁付近にはヨコナデを施す。39は復元径26.6cmを測る。口縁端は外側に屈曲して開く。タガ部片40は断面がM字状を呈し、タガは粗いハケ目の後に貼付られる。M字状の断面はこの1点のみである。尭底部41は1/2が残存し、復元径16.4cmを測る。底部断面がコの字状を呈し、カット技法かと思われるやや厚手のもの。外面の調整はナナメハケを施す。タガ部はあまり突出せず、ヨコナデを施す。42は1/4が残存し、復元径19.2cmを測る。底部が断面コの字状を呈するもので、端面をナデるか。調整は外面にナナメハケ、内面に板状工具による圧痕と指頭圧痕が見られる。タガは剥落している。43は底部を欠き、断面がやや先細りになる。調整は外面にナナメハケ、内面は不明である。タガ部は突出せず、ヨコナデを施す。44はほぼ完存する基底部で、底径13.8～14.4cmを測る。底部断面がコ字状を呈し、厚手のもの。底部はケズリの後にナデるカット技法を施す。調整は外面ナナメハケがある。タガを貼付後にハケ目を施し、タガ部はあまり突出せず、ヨコナデを施す。45は底径17.5cmを測る。底部は断面コ字状を呈し、やや先細りになる。外面の調整はハケ目が残る。内外面ともに爪状の工具による調整痕が残る。タガ部はあまり突出せず、ヨコナデを施す。46は基底部がほぼ完存し、底径26.4～26.8cmを測る。底部が丸味を帯び、断面やや先細りのもの。調整は、内面にはハケ目が見られる。タガ部はあまり突出せず、ヨコナデを施す。断片的だが、円形の透し孔が対向して2個ある。47は底部と口縁を欠くが、上方に開く形のものである。復元径は30cm以上となる。調整は内外面とも不明。タガ部はあまり突出せず、ヨコナデを施す。

これらの埴輪の特徴を挙げると、すべて上師質ではあるが、黒斑をもつものは1点も出土していない。全形の判明するものはないが、47や前回の奥才1号墳例からすれば、タガが2条つく3段のもので、上方にやや開く形態になると思われる。透し孔は明瞭には残っていないが、中段の対向する位置に円形の透しが開けられるものと想定される。口縁部は断面がコの字状で、外側が少し突出するものがほとんどである。タガは断面がM字状を呈するものが1点だけあるが、その他は低い台形状を呈している。どれもさほど突出せず、調整はヨコナデが施される。底部はカット技法を施すものと、薄く仕上げるものの2種の調整が認められる。外面調整はナナメハケが認められ、ヨコハケは認められなかった。内面調整ではナナメハケ、ヨコハケ、ナデが、その他に指頭圧痕が認められた。また、基底部調整は板状工具による圧痕が見られた。これらの特徴からすれば、川西編年のV期[21]に相当するものと考えられる。奥才古墳群周辺でこの時期の埴輪を出土しているのは、奥才1号墳、金崎1号墳、松江市古曽志大谷1号墳[22]がある。これらの遺跡では須恵器も出土しており、奥才1号墳のみが大谷編年の出雲2期で、残りは出雲1期である[23]。また出雲1期の中でも古曽

志大谷１号墳の須恵器は新しい特徴をもち、埴輪にも須恵質のものを含んでいることから、より奥才１号墳に近い時期のものと言える。底部調整が２種類認められるのは、金崎１号墳と奥才64号墳である。金崎１号墳ではカット技法を施すものが少なく、奥才64号墳では多く認められる。古曽志大谷１号墳ではカット技法のみが施されている。したがって、埴輪からは金崎１号墳→奥才64号墳→古曽志大谷１号墳→奥才１号墳という流れを確認することができよう。

また、盛土中から弥生時代後期の土器が見つかっている。64号墳西側では弥生時代の墓壙が検出されており、64号墳築造の際に弥生時代の遺構を壊し、盛土としたようである。鼓形器台片**48**は端部を欠くが、外傾し幅広く立ち上がる。外面には擬凹線文が認められる。甕口縁部片**49**は、内外面ともにヨコナデ、頸部外面にはわずかにハケ目を留める。やはり甕口縁片**50**は、内外面とも調整は不明である。底部片**51**は復元底径4.2cm、残存高3.8cmで平底を呈する。**52**は外面が黒く、横位に３本の平行沈線が施され、その下方に渦巻きのスタンプ文が、上方には不明瞭ながら鋸歯文が残る。小形壺の胴部と思われる。

17．66号墳

63号墳の北西側に斜面を少し下りたところに位置する。墳丘は流出しており、周溝の一部が残存し、旧表土上に流出土のわずかな高まりを残す。周溝は現状で上面の幅は0．8m、底面の幅は0．2～0．5m、深さは0.3mを測る。土層確認用に下方まで設けたトレンチでは、旧表土とみられる淡暗灰黒色土を検出した。墳丘は流失して全く残っていないが、64号墳とは近い距離にあり、おそらく同様の形態になるものと思われる。周溝から復元すれば、直径約５m と小形の円墳になる。奥才古墳群では大きな墳丘をもつ古墳から少し降りた位置に、10m 以下の小形のものが作られることが多い。類例として１号墳、28号墳、64号墳があり、これらはいずれも須恵器を伴う中期後半以降のものである。

出土遺物としては、確実に66号墳に伴うと言えるようなものはない。北側の斜面には64号墳に伴う須恵器片が見つかっているが、それらの中に66号墳に伴うものがある可能性もある。また、南へ６m 離れた位置で出土した須恵器甕の口縁部**79**や、63号墳第１主体部が比較的近い時期のものであろうか。

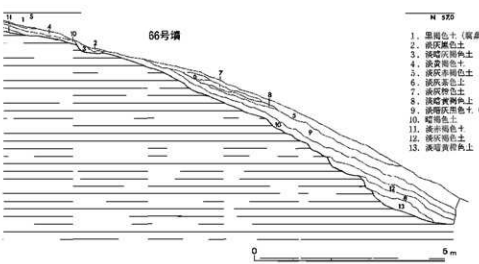


図58　66号墳土層図

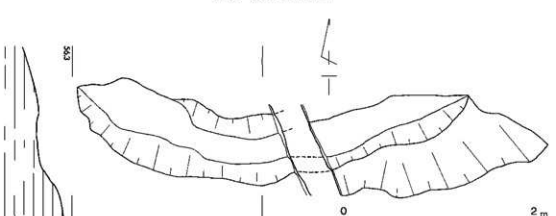


図59　66号墳周溝実測図

18. K　区

64号墳斜面下には、平坦面２段と小尾根が認められ、上段の平坦面には調査前から石材が散乱しており、何らかの遺構の存在が考慮され、小尾根は不明瞭ながらも、小墳丘の可能性があったため、部分的な調査を行うこととし、とりあえず付近の調査杭から周辺をＫ区と呼び、調査を行った。

下段の平坦面はやや広いが、近年までの耕作によって褐土に乏しく、砂利を敷きつめた帯状の部分が検出され、道路であろうと判断した（１号道）。

上段の平坦面の表土を除去する過程で、陶磁器、人頭大の礫が散乱することがわかり、建物等遺構の存在する可能性が考えられたため、精査したが、こうした遺構は存在しなかった。ところが、この平坦面斜面の表土を取り除いたところ、黄色土と赤色土が縞状に認められ、上段の平坦面そのものが人工的な盛土からなるものである可能性があった。このため、トレンチ（Ｋ１）を設定したところ、３ｍもの厚い盛土が現われ、さらに追加した２本のトレンチ（Ｋ２、Ｋ３）でも同様の状況があることがわかり、この盛土下には道路（２号道）が埋没していることが判明した。

このため、２号道の盛土の除去に重機を投入し、あわせてＫ区全体を調査した。結果、１、２号道に留まらず、３、４号道もあわせて検出され、松江市との境をなす高田尾峠に通ずる旧道が錯綜するこの地点の様相を明らかにすることとなった。

２号道を埋めた大量の土砂は、付近の地山を粉砕したものからなるため、近くの丘陵を削って盛土の土量を確保した可能性があり、現状では判断できないが、この付近に所在した古墳を削平している可能性も考慮される。この推測を裏付けるようにＫ区から曲げられた鉄鏃74の出土があり、碧玉原石75の出土も何らかの遺構の存在を予測させる。上段平坦面の石材も由来は不明だが、古墳の石材の可能性も残している。しかし、上方に隣接する第Ⅷ支群の64、63号墳は、盛土のかなりの部分を失ってはいるものの、ここから２号道を埋めうる土量が搬出されたとは考えられず、また、２号道盛土中からの古墳時代の遺物の検出は皆無で、その可能性は低い。現状では第Ⅷ支群とは別の尾根から土砂が運ばれた可能性が高く、あるいは２号道に後出する１号道開設に伴い、その排土が使われた可能性もある。その場合は、１号道は２号道の代替の道路ということとなる。

また、２号道は64号墳の東側で尾根を深く掘り割っており、地形からはもう１基程度の古墳が存在する余地はあるので、２号道はこの部分に所在した古墳を破壊している可能性がある。また、２号道西側は全体に堆積土が乏しく、大きく地形の改変を受けているものと考えられる。

19. １号道

調査区東端で検出した道路で、延長37ｍを検出した。丘陵尾根を回り込むように作られており、路面は幅1.3～2.2ｍで、砂利が敷き詰められ、部分的に側溝をもっている。路面は丘陵先端部では、地山をＬ字に削り出し、露出した地山の岩盤をもって舗装の砂利に代えている。谷に相当する部分であるＫ２ラインでは、盛土を厚くおこなって路面を作った様子が確認できている。後述の２号道と比べると、地形を大きく改変してまで直線的な道路をつくろうという意図はみられない。舗装や側溝内に認められる砂利には、かなり高いレベルから出土したものや、砂利面が何層かにわたって認められる部分もあるので、何回か路面の補修が行われているようである。付近は近年まで畑として耕作されており、詳細は不明であった。路面の覆土はごく浅く、近代に廃絶するまで道路として供用されていたようである。このことから２号道を埋め殺した後は、この１号道が使用されていたと考えられる。

１号道北端は、現在の県道によって断ち割られた崖面で途切れており、ここまでの路面は傾斜なく続いているので、この部分以北には隣の尾根まで土橋があったことが予想される。あるいは２号道の土橋を再利用するものであった可能性もある。南端も同様に土橋によって南の尾根に通じていたものと考えられる。

この道路の時期を特定する材料は少ないが、路面から刀装具の鍔53が出土しており、上限は明らかではないものの、少なくとも近世における供用は明らかであろう。

舗装の砂利は、粒径の細かい黒色頁岩、流紋岩、ドレライトからなり、いくらか摩耗しており、例えば眼下の諸武川の川底で採取されたとしても矛盾のない石材の組成[10]であった。また、路面の土壌は、かなり砂質で、路面の排水を考え、砂利とともに砂も川底から採取され、運ばれている可能性がある。

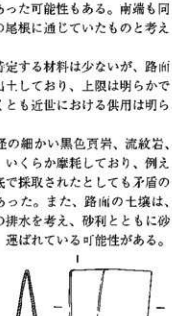


図60　１号道出土遺物実測図（1／1）

鍔53は、金銅製と考えられるもので、全体に錆化が進み、赤褐色を呈する部分と緑青を生じた部分がある。小振りであるので、脇差などの装具と考えられる。

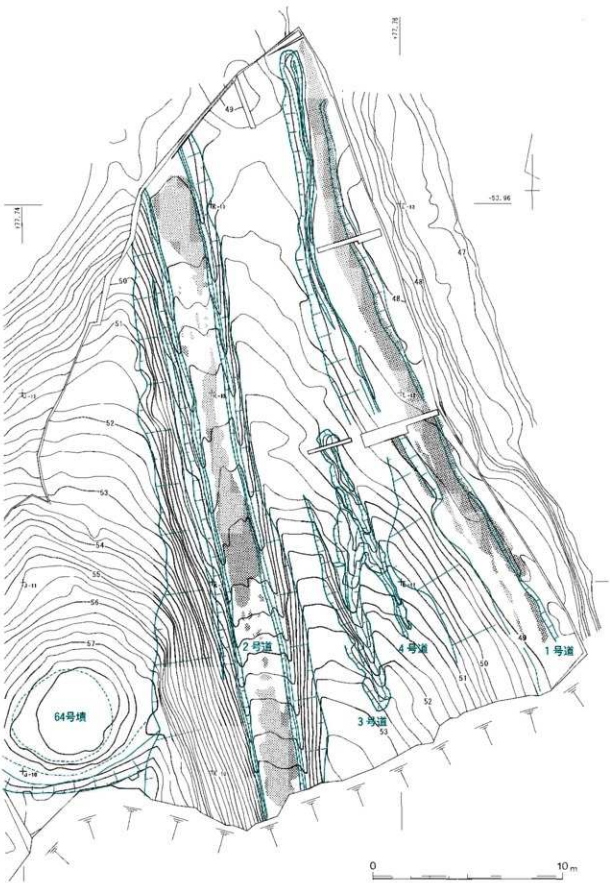


図61　1～4号道測量図

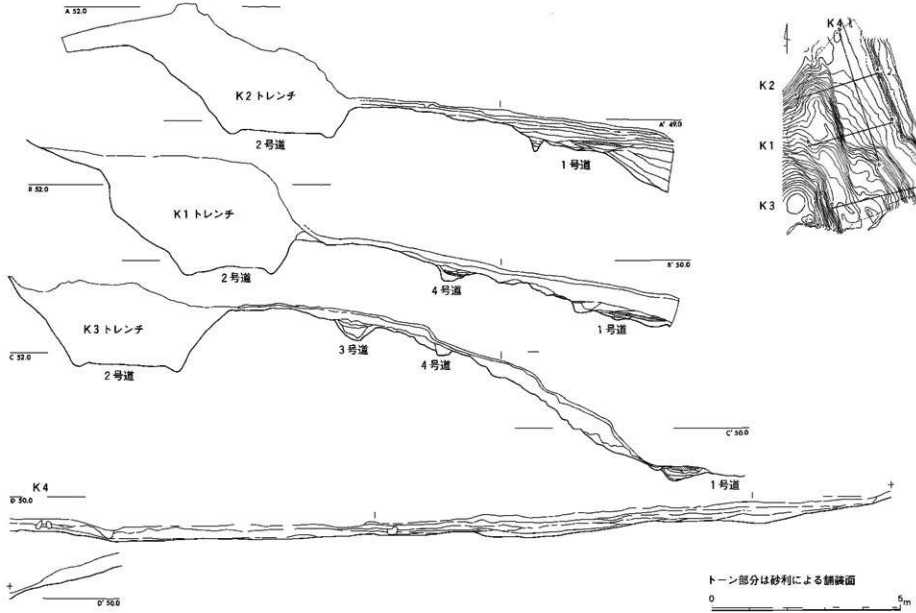

K2 トレンチ
2号道
1号道
K1 トレンチ
2号道
4号道
1号道
K3 トレンチ
2号道
3号道
4号道
1号道
K4
K2
K1
K3
トーン部分は砂利による舗装面
0
5m

図262 K区土層図

20. 2号道

64号墳斜面下、K区上段の平坦部には陶磁器片が散乱していた。また、人頭大から拳大の礫が集積する地点が2か所あった。南側の礫の集積では、ほぼ全てがドレライトからなり、その配列にはさほどの規則性は認められなかったが、北側の一群はドレライトを主とするものの、一部に流紋岩、凝灰岩を交え[14]、南北に並んでいるようにも見受けられた。いずれも後述する2号道を埋めた土の上面に並べられたものであるので、近世ないし近代にいたっての配列であることがわかっている。第Ⅶ支群の所在する尾根は、流紋岩とその風化した赤土からなり、凝灰岩はこの尾根で産出するものではないので、それについてはいずれの時にか運びあげられたものと考えられる。また、南側の石材周辺には数個体分のサザエの貝殻が認められた。

この小尾根と平坦面部分は、トレンチを設定したところ、小尾根そのものが盛土からなるもので、その下部に中世以前まで遡りうる古道が埋没することが判明した。盛土はK1トレンチでは厚さ3mにもなり、黄色土、赤色土が細かく互層状に積まれていた。K2、K3トレンチでも厚さはそれほどではないものの、古道を埋めた状況は同様であった。K1、K3トレンチでは細かく水平に土砂を盛った様子が窺えたが、調査区北端に近いK2トレンチでは傾斜をもったかなり粗い積み方となっている。盛土を路面方向の断面で観察したところ、路面の傾斜に沿った北に降る堆積であり、盛土は南側の高位部から行われたことが知られた。さらにK2トレンチ付近の北半部では、盛土が西側の法面上から行われたこともわかった。いずれのトレンチでも、土砂はさほど突き固められた様子ではない。盛土内には陶磁器小片をわずかに含んでいた。

この盛土を除去して検出した2号道は、尾根を横断してつくられたオープンカットの延長36m、西の64号墳側の法面が高さ7m、東側でも1.5mにもなる一直線の道路で、北に向かって降っている。路面は幅約2mで、側溝は幅0.4m、深さ0.2mのものが両側にある。64号墳から東に続いていたであろう尾根を地形に関係なく深く切り通し、一直線の道路としており、北に向かう道路を作るという測量と設計に基づく強い意図のもとに作業されているものと考えられる。この道路の方位は、座標北に対し12度西である。

路面は、南側で最も高く標高約52m、最も降った北端で48mである。路面の傾斜は、平均7度、最も急なK1－K3トレンチの間で13度であった。

また、舗装に使われていたと考えられる砂利が路面の低い北端部分に厚く残り、非常に固く締まっていた。路面にも部分的に砂利をとどめており、本来は全面が砂利で舗装されていたものと考えられる。舗装の砂利が流失して地山面の露出した路面には、

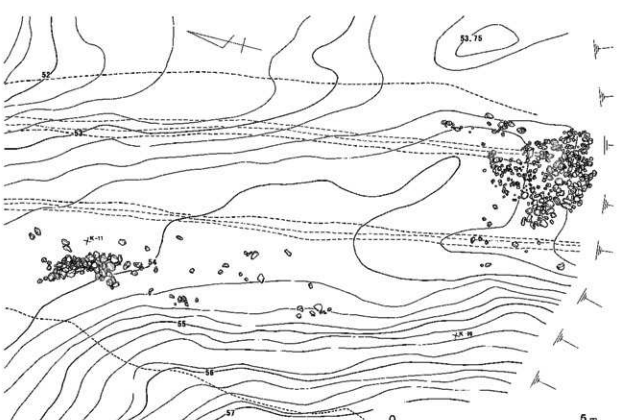


図63　2号道盛土上面石材出土状況図（1／100）

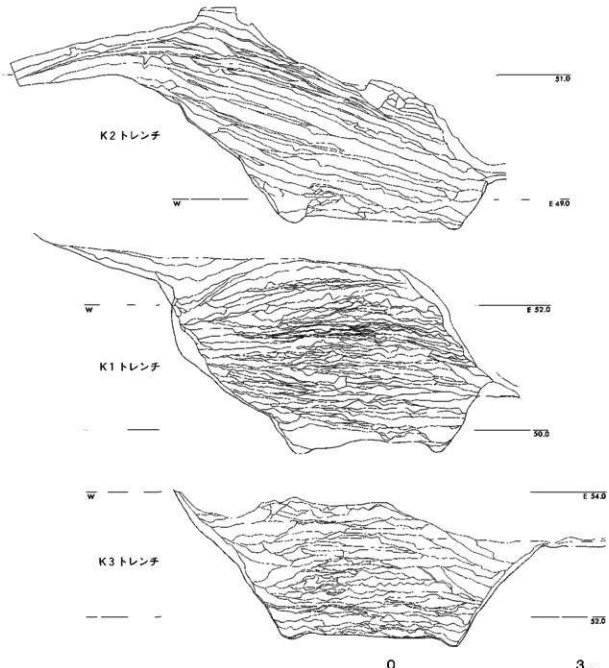


図64　2号道盛土土層図（1／60）

流水によってできたと考えられる凹みが認められ、その一部には砂利が詰められて、補修を窺わせる部分もあった。側溝内には砂利はほとんど認められなかった。

また、道路西側の斜面には幅約0.5mの犬走り状のテラスが延長22mにわたって認められた。

側溝内に砂利が認められないのは、道路としての廃絶後、一定の時間をおいて盛土が行われたのではなく、定期的に管理されていたものが一気に埋められた様子がうかがえる。また、低位部である調査区北端に砂利が集積することからは、この部分から北に存在が予測される土橋にかけては、路面の傾斜がゆるやかになっていたことが推測できる。

2号道の時期を特定する材料は乏しく、路面から陶磁器小片（図版33右下）をえているが、廃絶の時期を示すものとも考えられ、開設時期を特定できるものはない。これらの陶磁器が埋設の時期を示すとすれば、近世末から近代初頭にかけて行われたものと考えられる。遺跡周辺では「殿さん道があった」との伝承が伝えられるのみで、祖設に関わる伝承は得られなかった。「殿さん道」はこの2号道ないし1号道を指した伝承であろう。

さらに、2号道の調査区の北側延長には、第Ⅷ支群と第Ⅶ支群をつないだ尾根鞍部が所在し、ここには2号道の延長の土砂を盛った土橋が所在したものと考えられる。この鞍部は調査時点での県道御津東

生馬線で切り通されており、別の尾根のように見えていたものである。土橋盛土部分を県道で切り通してしまったため、盛土残存部が地すべりを繰り返したようで、2号道土橋が想定される部分に現県道法面の擁壁が築かれている。なお、土橋延長部分の尾根上には「金持荒神」と呼ばれる荒神が祀られており、近年、道路廃絶後に荒神が祀られる例がいくつか報告されている。一方、南側の延長部も地形からは同様に隣の尾根まで土橋があったようであるが、こちらもやはり戦後まで供用されていた県道によって切り通されており残存しない。この切通しにも、やはり地すべりの痕跡をとどめている。尾根を切り通した2号道の敷設に伴って出た大量の土砂は、この土橋部分への盛土に利用されているものと考えられる。

また、調査で2号道を掘り上げた後は、降雨時にはオープンカットの高い法面と路面が雨水を一時に集める水路となり、大量の水流は調査区北端に集中し、土嚢を積むなど排水対策に苦慮した場面もあった。この2号道が供用されていた時代には、さらに長い路面からの水量であったことが予想され、人工的な道路が人工的な洪水を引き起こしたことは容易に想像できる。この道路を深く埋めた理由もこのあたりに求められるかもしれない。特に盛土北端では土砂を十手状に高く積み上げており、付近での出水を東西に振り分けているかのようにも観察できる。

地形を度外視して南北の直線的な道路を敷設することから、講武盆地に敷かれている条里制遺構と一体に整備されたものであることも考慮され、古代から中世にさかのぼる可能性も否定できない。ただし、2号道は、座標北から12度西に振れており、一方、講武盆地に敷かれた条里は座標北から東に3度振れるので、2号道と講武条里は15度ずれていることになる（図版2参照）。また、古代から中世にかけて作られ、近世まで供用されたとするには路面など非常に整美で、それほどの長期間の使用は想定しづらい印象ではあった。この2号道と講武条里の両者は現在、直接的には結びつかないが、いずれにせよ2号道は、講武盆地や日本海に面する御津などを現在の松江市方面と結ぶ幹線であったことは疑いえず、その敷設時期、目的、敷設者については今後の課題としたい。

現在鹿島町と松江市との境界であり、古くは『和名類聚鈔』段階での多久郷と生馬郷との境界である高田尾峠は、調査地の南約300m に位置する。講武盆地から高田尾峠に至るこの地点は、今回の調査で検出した4本の道路、現在の県道、前代の県道、さらに調査の原因となった今後整設される新県道と、新旧計7本の道路がまさに錯綜する地点であるといえる。

21. 3号道

1号道と2号道に挟まれた丘陵斜面上に走る溝状の道である。標高51～53m 付近にかけて検出された遺構で、路面の総延長は約10m を測る。本来は上方から続いていたと考えられるが、上方部は消失して残っていなかった。検出部分では南東から北西に向かって降り、途中からほぼ真北へと向きを変え、4号道と交わる。そこから先は流失し、残っていないが、さらに下方へと延びていたものと思われる。

路面の幅は0.2～0.4m で人が1人通れる程度のものであり、生活道路であろうか。掘り方の幅は0.9～2.5m を測り、幅は向きが変わる部分で一番狭くなっている。軸方位は N－17°－W から N－3°－E へと変わる。路面の比高差は2.8m を測る。地山を逆台形状に掘り込んで路面としており、その掘り込みの深さは0.1～1.2m を測る。路面の一部には砂利混じりの硬化した部分が認められた。それ以外には、特に路面に対して加工したような痕跡は認められなかった。

高位部では道路の埋土の中から、陶器の大甕54が出土している。ほぼ水平に堆積した埋土中から、直立した状態で見つかっており、道の廃没の際に意識的に据えられたものと思われる。その大甕の内部からは甕の上部の破片とともに、磁器片55が出土している。またそこから1.9m ほど下った位置で、路面近くから土師質土器56が出土している。

出土遺物　陶器の大甕54は底部が完存し、口縁部は一部のみ残っていた。口径41.4cm、器高51.6cm、胴部最大径42.0cm、底径18.3cm を測る。石見焼かと思われるもので頸部は高く、肩部には凹線により直線と波形の模様が施される。胴部上半に最大径があり、そこから平底の底部へとすぼまる。調整は内外面とも回転ナデが施される。底から10cm 前後の外面、計12箇所に焼成の際の当て具痕が残る。口縁部は内外に拡幅して面をなす。磁器55は大甕の中から、転落した状態の甕上半部片とともに見つかった。底部が欠失し口径の1/3ほど残ったもので、復元径7.2cm を測る染付の椀である。土師質土器56は底径5.0cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデが施される。底部には回転糸切り痕が残る。他に口縁部も出土しているが、小片であり、風化が著しく接合も図化も不可能であった。

遺構の時期は十層の切り合い関係から、後述の4号道より新しい。また遺物からすれば、土師質土器からは上限を中世以降に、大甕からは下限を19世紀後半[20]までに求めることができよう。2号道との関係は土層観察から、3号道が完全に埋没した後に、2号道も埋め戻されたものと思われる。このことは2号道の覆土上面で出土した、後述のK区出土遺物の年代観からも首肯されよう。

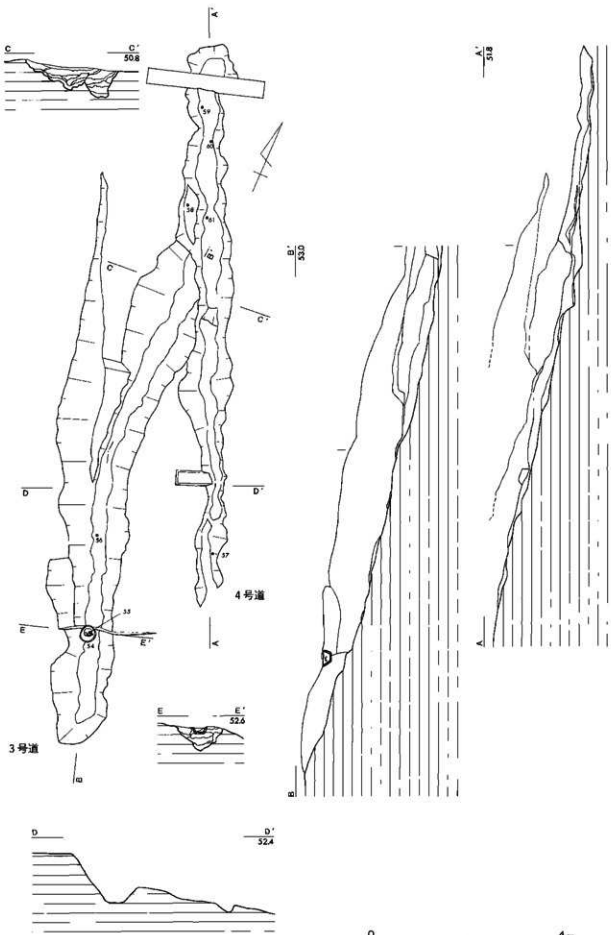


図65　3・4号道実測図（1／80）

22. 4号道

1号道と2号道の間を3号道とほぼ並行して走る溝状の道である。標高50.5～52.5m付近にかけて検出された遺構で、総延長は約11.9mを測る。本来は上方、下方ともにさらに延びて続いていたものと思われる。検出部分は南東から北西に向けて直線的に降っていき、途中で掘り方の一部が3号道により切られている。路面の幅は0.1～0.4mで、人が1人やっと通れるほどで、生活道路であろうか。掘り方の幅は0.2～1.1mを測り、逆台形状に掘り込まれている。軸方位はN－24°－Wである。路面の地高差は約2mを測る。路面の一部には砂利の硬化した部分が認められた。それ以外には1ヶ所少し落ち込むようなところが認められた。前回調査の階段状遺構ほどではないが、波板状凹凸面[20]と呼ばれるものに類するものであろうか。2号道の軸はN－12°－Wから N－8°－Wであり、4号道とは軸が平行しないため、調査時点では2号道の廃道的なものとする考えもあったがはっきりしない。また、土層の切り合い関係からは3号道よりも古いということがわかる。

高位部と低位部でそれぞれ路面やその付近から、須恵器の破片が出土している。これらは遺物の年代を決定する上で重要な、つまみや高台といった特徴的な部分の破片である。道構の時期についてはこれらからある程度限定することができよう。

出土遺物　遺物は全て須恵器の破片であり、全形がわかるものは出土していない。口縁部片**57**は高位部の路面近くから出土したもので、復元径11.2cmを測る。外反してかすかに弯曲して端部は丸くおさめる。小形の蓋であろうか。調整は内外面ともに回転ナデを施す。**58**は低位部より出土した口縁の下部片かと思われるもので、内外面ともに回転ナデを施す。蓋**59**は低位部の路面から出土した口縁部の破片で、復元径17.3cmを測る。端部が垂直に屈曲するものである。蓋**60**は低位部の路面から出土した、天井部のつまみ付近の破片である。調整は外面が回転ヘラケズリと回転ナデ、内面にはナデが見られる。天井部は厚く平らで、つまみの形状は宝珠形を呈するものである。底部片**61**は低位部の路面から出土した、高台部分の破片である。底部の外縁ぎりぎりに低い高台がつくもので、高台の復元径は10.6cmを測る。調整は内外面ともに回転ナデを施す。これらの路面より出土したつまみや高台、蓋の端部から推察すれば、遺構の使用された時期は8世紀後半から9世紀であると考えることができよう[21]。このことは先の3号道との切り合いによる年代観とも矛盾しない。また口縁部片が蔵であるならば、上限が7世紀末から8世紀前葉にまで遡る可能性も考えられようか。

23. K区出土遺物

62は須恵器で、外面はカキ目、内面には青海波文が見られる。**63**は須恵器蓋の口縁端部で、器高は低く偏平なもので、端部下端がわずかに下垂する。

64～71は近代陶磁器である。**64**は陶器急須の口部で、胎土は茶灰色、外面は乳白色に着色される。陶器椀**65**は、口径11.8cm、器高4.6cmを測る。胎土は淡茶灰色、高台内面以外に施釉する。磁器杯**66**は、口径7cm、器高2.6cmを測る。色調は黄褐色で、全体に施釉する。磁器皿**67**は、口径13.2cm、器高3.7cmを測る。型打成形により化弁状に成形される。灰白色で、口縁端は茶色に着色し、底部以外は施釉している。磁器皿**68**は、口径10.7cm、器高6.2cmである。見込みに緋色で風景画を描く。磁器小皿**69**は、口径9.2cmを測る。緋色で花と葉を交互に描く。磁器椀**70**は、口径10.8cm、器高6.4cmを測る。施文は型紙絵付による。白磁皿**71**は、口径12.6cm、器高1.7cmを測る。見込みに木盤打ち込みによる「森」の銘がある。**72**は人黒様の土製人形で、高さは5.7cm、中は空洞で底部には接合の際の粘土紐がみられる。胎土は黄肌色で、帽子、腹、服は水色、足は橙褐色、袋の先端は黄色、小靴は黒に着色され、底部以外は釉が施してある。

これら陶磁器の時期は、**70**が19世紀後半代[22]、**71**が20世紀代のもので、他の陶磁器もこの範囲に納まるものと考えられる[23]。

73は曲刃鎌で、刃部は約16.0cm程度のものであるが、身部は2つ折に、基部もそれに重ねるように折り畳まれていた。折り曲げて使用できなくしていることなから古墳時代のものである可能性が考えられる。**74**は碧玉原石で、重さは93gである。**75**、**76**は黒曜石製の石鏃で、ともに先端部と基部の片側を欠損している。**75**は残存長1.3cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、**76**は残存長1.8cm、幅1.6cm、厚さ0.3cmである。

24. 支群出土遺物

第Ⅶ支群出土の遺構に伴わない遺物を列記する。

77は鉄鉾で、全長36.3cm、刃渡り15.5cmを測る。基端部は互い違いに折り返されており、縄や布などを巻いて柄としていたものと推測される。**78**は高台付きの須恵器皿で、口径は20.2cm、高さ3.9cmを測る。55、56号墳墳丘で表採されたもので、9世紀前半代のものと考えられる[24]。**79**は須恵器蓋の口縁部で、口径は17.8cmを測り、一部自然釉が付着する。口縁は屑部から短く立ち上り、中央に1条の凹線が廻る。62号墳東側にある平坦地より出土しており、66号墳に関連する可能性も考えられる。**80～82**は須恵器甕片で、いずれも外面には叩き目、内面に青海波文が認められる。**80**が56号墳墳頂、**81**、**82**が61号墳周辺で採集されたものである。

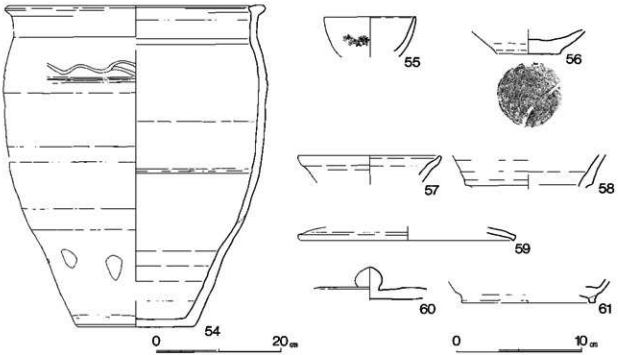


図66　3・4号道出土遺物実測図（54は1／6）　54～56：3号道、57～61：4号道

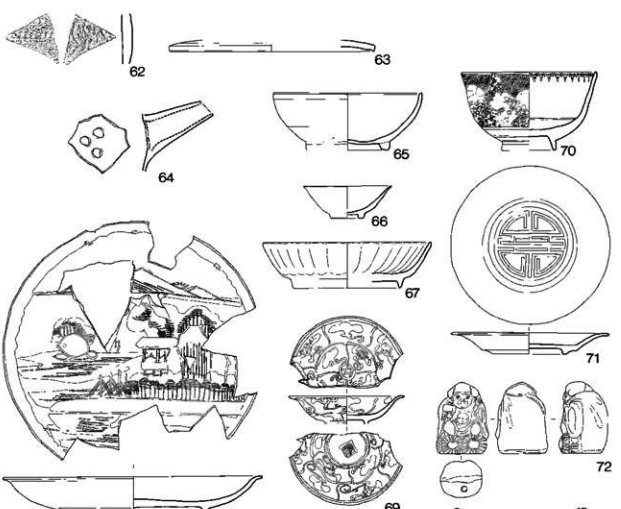


図67　K区出土遺物実測図

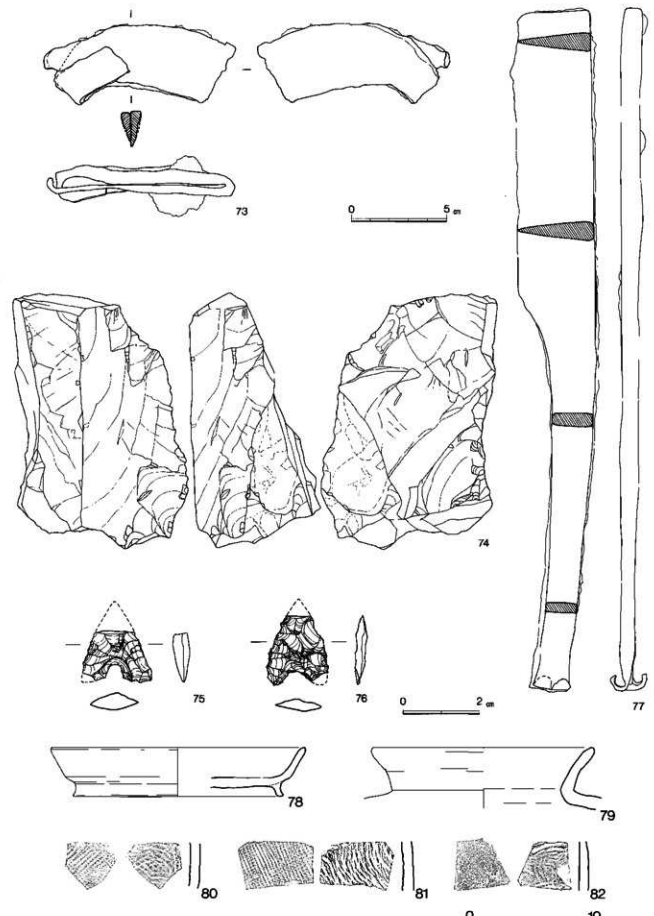


図68　K区・支群出土遺物実測図（73～76はK区、77～82は支群出土）

Ⅳ．小　結

奥才古墳群では、現在までに知られている68基のうち、今回第Ⅷ支群の14基、前回の調査での26基、計40基の古墳を調査しており、古墳群のほぼ全容が明らかになったと考えられるので、若干のまとめを行っておくこととする。

1．奥才第Ⅷ支群

群構成

奥才古墳群は自然地形を反映して第Ⅰ～Ⅷ支群に分けられるが、第Ⅷ支群も尾根の高まりに比較的大形の古墳が造られている。一方、その下方に従属して続く古墳は、辺10m程度の小形の古墳が多く、墳丘、主体部にも若干の格差が認められる。また小形墳は、その造りも尾根を切った溝によって区画されるだけの簡単なものである。

第Ⅷ支群尾根は、2か所のピークを有し、それぞれに56号墳、62号墳が占地し、ともに支群内はもとより、他の支群に類例のない刳抜き木棺を採用し、墳丘規模もあわせ盟主墳と考えられる。この2古墳を契機に古墳群の築造が開始されるものと考えられる。つまり、第Ⅷ支群は2つの小支群に分けることも可能である。両小支群は、60－61号墳間の狭いが深い溝によって区画されるものと考えられる。

新旧関係

第Ⅷ支群で、墳丘の配置、区画溝が先行する古墳の裾を切ることなどから、築造の順序が知られるものは以下のとおりである。

56号墳 →57号墳 →68号墳

62号墳→65号墳 →67号墳 →61号墳

古墳群中最も標高が高く、刳抜き木棺を採用するものがあり、鼓形器台などを墓壙上面に供献するものがあるなど、前回調査の奥才第Ⅰ～Ⅶ支群にはない主体部、土器の使用があることから、第Ⅷ支群は他支群に先行すると考えられ、第Ⅷ支群から奥才古墳群全体の造墓が始まるといえる。

なお、55号墳は、支群中最高所にあって56号墳に先行する可能性があり、支群の盟主墳である56号墳、62号墳では、55号墳に隣接する56号墳がやや先行する印象がある。

主体部の分類

第Ⅷ支群では、刳抜き木棺、箱式木棺、箱式石棺、素掘土壙、礫床を伴う箱式木棺、土器棺、土器被覆土壙と、多様な主体部を検出しているが、第Ⅰ～Ⅶ支群で多く認められた礫床を伴う箱式石棺・木棺は61号墳の木棺の1例のみであった。このことからも第Ⅷ支群は、13号墳礫床石棺から築造が開始される第Ⅴ支群に先行して築造が開始され、支群での築造の終了は、第Ⅴ支群での造墓開始後と考えることができる。

また、須恵器を伴う64号墳は、遺物では第Ⅳ支群38号墳に後出し、第Ⅲ支群1号墳に先行する。38号墳は尾根上にあって、この古墳以前と同様な立地であり、丘陵斜面に占地する立地は64号墳に始まり、1号墳に引き継がれるものと考えられる。

2．奥才古墳群

古墳群形成の年代観

第Ⅷ支群の調査結果を加え、古墳群全体を見渡すと、主体部の様相と出土遺物の検討から、主体部の変遷を次のように考え、図69に表した。支群最高所の盟主墳の時期的な検討をすると、第Ⅷ支群は、56、62号墳での刳抜き木棺の使用、56、57、59号墳での鼓形器台の使用、67号墳での庄内期の系譜を継ぐと思われる古相の土器棺の出土などから、前期初頭から前葉に位置付けられるであろう。

さらに、13号墳は、墳頂の土器から古墳時代前期前葉から中葉段階。14号墳は副葬品の方格渦文鏡[28]や周溝の切り合いなどから前期中葉から後葉段階。12号墳の土器棺は前期後葉と考えられる。これらのことから盟主墳の主体部を追うと、まず前期初頭に56号墳、62号墳（第Ⅷ支群）で刳抜き木棺が採用され、つづいて前期前葉から後葉に13、14、17号墳（第Ⅴ、Ⅵ支群）の整美な組合せ式の石棺が、前期後葉から中期初頭にかけて従属する古墳の主体部として12号墳（第Ⅳ支群）などの礫を敷く長大な箱式木棺が登場するようである。

盟主墳に続く従属墳は、墳丘規模で盟主墳に準ずるとともに埋葬主体も箱式木棺の使用が多いなどの違いがある。13号墳出現以前の第Ⅷ支群では、盟主墳とそれに従属する古墳という差はあるものの、相関関係までには至っていないように見受けられる。また、同支群では、主体部頭位は尾根に対し平行するもの、直交するものの2者しかなく、頭位を一定方位に揃えようとする第Ⅰ～Ⅶ支群とは異なる別の論理で頭位方向が決められているものと考えられる。

箱式石棺

弥生時代、出雲地方での石棺は中心的な埋葬施設として使用されることはなく、あくまでも小児棺や、中心主体に付随する埋葬で採用されるものである。

しかしその後、奥才13号墳から中心主体としての整美な箱式石棺が採用されるようになる。前代の様相から考えると、この主体部は、外来の要素と考えられる。また、箱式石棺の採用とともに中心主体を2基並列する葬法も現れる。

13号墳出現以降は、奥才古墳群でも墳丘規模と主体部内容に一定の相関が見られ、大形墳との埋葬主体や副葬品における格差を考えると、地域の伝統性を越えた広域の階層制の中に中小首長が組み込まれていったことを示唆しているようにも考えられる。

礫床

ここでいう「礫床」とは箱式棺の底に砂利を敷き詰めて棺底としたもので、石棺、木棺の両者にみられる。出雲地方、特に現在の鹿島町を中心とする島根半島部において古墳時代前期から中期前半を中心に多くみられる。講武盆地を中心に見られるものは、黒色頁岩が露頭し転落した海岸で採集される、摩耗した黒色の円礫を使うが、鹿島町域を離れるとこれとは異なる石材を使うものもある。

奥才古墳群での礫床は、先行して築造が始まる第Ⅶ支群では、同支群内では遅く位置付けられる61号墳第1主体部でのみ認められ、古墳群の築造開始当初には採用されていない慕制である。おそらく第Ⅴ支群盟主墳の13号墳で、整美な箱式石棺とともに採用され、従属墳の格差を有する主体部として木棺が石棺の簡略形として採用される際に、木棺の底にも敷かれ始めるものと考えられる。

この段階で、棺内法長が3mを越え、礫床をもつ狭長な箱式木棺が現われる。内部を3室に区切るものもあり、複数埋葬の施設の可能性もある。出雲地方にあっては奥才古墳群でのみ確認されているので、ここでは①内法長が3mを超える箱式木棺である。②棺底面に礫を敷く。③棺内を2区画以上に区切る、と定義し、①から③を満たすものを「奥才型木棺」と呼ぶこととしたい。類似のものとして木次町斐伊中山古墳群2号墳Ⅲ主体[22]があるが、これは棺長が約3mで、両端に副室をしつらえながらも小口を塞がないもののようで、同類とするには躊躇がないわけではない。

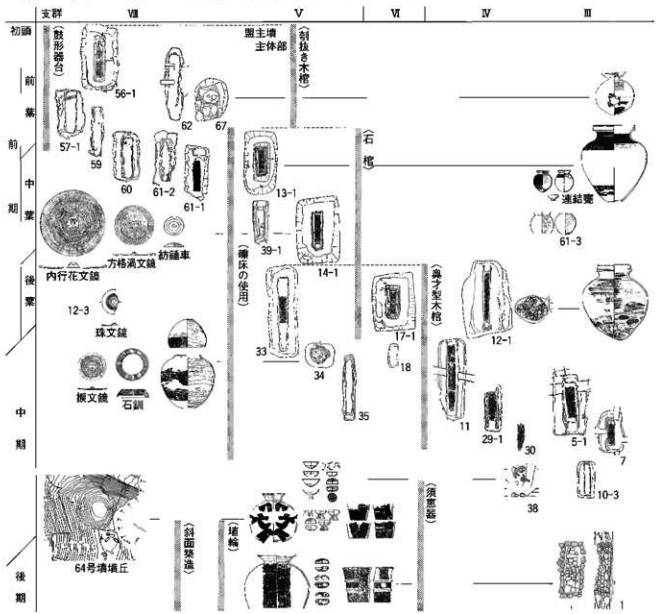


図69　奥才古墳群主体部の変遷（土器棺は1／100、他主体部は1／250、遺物は縮尺不同）

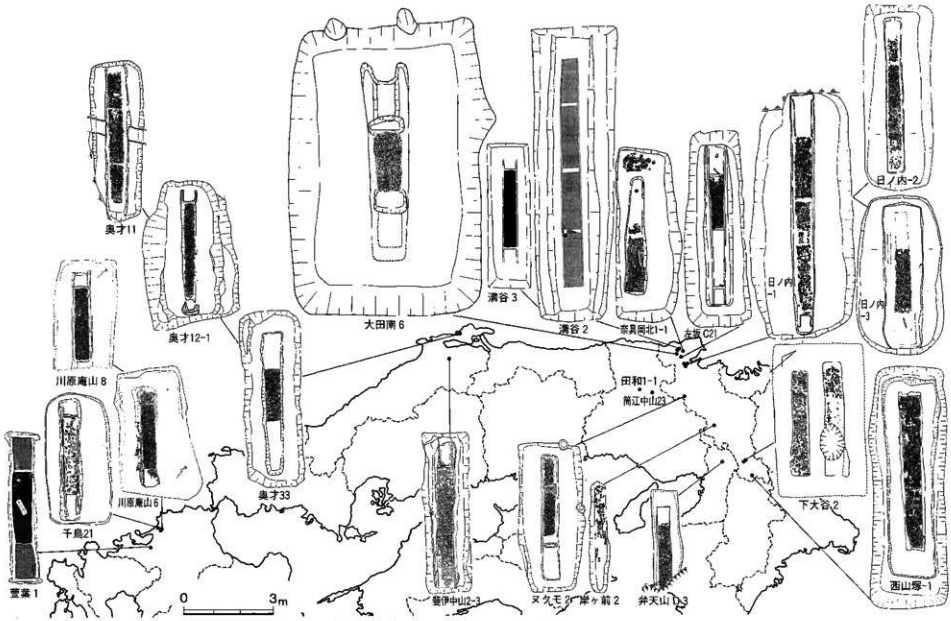


図70　奥才型木棺とそれに準ずる木棺の分布（遺構は1／130）

奥才型木棺の分布

このような奥才型木棺およびそれに準ずる長手の箱式木棺の分布を図70、表1に示す。時期は古墳時代前期～中期にかけてのものである。こうした特異な木棺をもつ古墳の分布は、島根半島部、丹後を中心に畿内にかけて、北部九州の3地域に限定される[30]。このような特徴的な木棺が、それぞれの地域で自然発生的に成立したとは考えられない。奥才型木棺の分布のありようは、3地域間の密接な、おそらくは海上交通を利用する交流の結果であろう。特にこの木棺が、丹後地方に分布の中心を置き、畿内地方にまで続いて散見されることは、海上交通路の存在と、島根半島部へもたらされる情報のルートとその源を示すものと考えられる。

3．出雲－丹後間の交流

ここで、これだけにはとどまらない丹後地方との交渉を整理する。

古墳時代前期初頭には、丹後地方で弥生時代から認められる舟底状を呈する刳抜き木棺[31]が、出雲地方では奥才56号墳、松江市大佐遺跡SK01[32]、社日1号墳第3主体[33]、加茂町土井・砂5号墳第2主体[34]で認められ、奥才型木棺の成立以前にも共通の棺の使用が認められる。

古墳時代前期前葉～中葉にかけては、奥才13、14号墳に類似した礫床をもつ整美な箱式石棺が、丹後、但馬地方に濃く分布し、京都府加悦町加悦作山1号墳[35]、兵庫県豊岡市カチヤ古墳[36]など、整った円墳の主体部となっているが、出雲地方では奥才古墳群以外ではほとんど認めることができない。

古墳時代中期中葉段階に講武盆地に隣接する丹花庵古墳（松江市古曽志町）に京都府丹後町願興寺4号墳例、網野町離湖古墳例、丹後町産土山古墳例と内法で非常に近い長持形石棺が導入される[37]一方、前葉～後葉段階の丹後では産土山古墳例、願興寺4号墳例のように、長持形石棺底部に礫を敷くものがあり[38]、主体部と礫との不可分な結合を推測させる。島根県斐川町軍原古墳も長持形石棺内に礫を敷く例とされる[39]。中期後半の舟形石棺では、京都府丹後町願興寺3号墳1、2号棺は、松江市竹矢岩船古墳例、佐賀県唐津市島田塚古墳例に類似し、京都府久美浜町愛宕山石棺は安来市毘売塚古墳例、玉湯町徳連場古墳例、斐川町神庭岩船山古墳例、大分県臼杵市臼塚古墳例と類似するとされる[40]。

以上のように、古墳時代前、中期を通じて、出雲地方と丹後地方は、墳丘規模こそ異なるものの、舟底状木棺に始まり、礫床をもつ整美な箱式石棺、奥才型木棺、長持形石棺、舟形石棺と非常に類似する主体部が時期ごとに採用され、変遷していることが指摘できる。

これに歴史的な評価を加味して考えると、

前期初頭の舟底状木棺は、出雲地方全域で認められ、前期段階から中期前葉の礫床をもつ整美な箱式石棺およびそれに続く奥才型木棺段階では、該当する古墳が、奥才古墳群、広くみても島根半島中央部でのみ認められ、交流が限定されたかに見える時期である。単に類似の主体部を採用するのではなく、墳丘規模と主体部には相関関係があり、地域内での格差に応じ、首長層構成員に相応しい主体部が重層的に採用されており、この地域と丹後地方との強い結びつきが指摘できる。

続く中期段階には、おそらく丹後地方と棺の規格をそろえた丹花庵古墳を嚆矢として出雲地方に長持形石棺が導入され、それに準ずる主体部としての舟形石棺も出雲各地域に導入されている。この中期段階で、盟主墳は講武盆地を離れ、宍道湖北岸域に移っている。長持形石棺と舟形石棺の分布を見ると、さらに広い地域を範囲とする新たな段階を迎えたものと考えられる。丹後地方と出雲地方では、この段階でも、長持形石棺とそれに準ずる舟形石棺が、各地域首長に相応しい主体部として重層的に採用されており、同一の規範に沿った造墓が行われていた可能性が指摘できるのである。

4．集落遺跡群の消長

一方、古墳群が見下ろす講武盆地内で弥生時代後期に成立している遺跡を列記すると、佐太前遺跡、名分塚田遺跡、南講武大日遺跡、南講武草田遺跡、南講武小廻第2遺跡、北講武氏元遺跡、堀部第2遺跡、堀部第3遺跡などを挙げることができる。佐太前遺跡は盆地西端に位置し、弥生時代前期から成立する周辺での拠点的な集落で、存続期間も長い。その他に石列を伴う墳丘墓の南講武小廻遺跡もある。

周辺部を見ても、佐太講武貝塚低湿地部で弥生時代後期から古墳時代中期の包含層が認められ、付近に集落の存在を予想させるし、佐陀本郷の稗田遺跡では同時期の土器とともに軸受孔を有する木製品の扉材が出土しており、集落の存在がうかがえる。弥生時代前期から中期の埋葬で著名な古浦砂丘遺跡でも、弥生時代後期から古墳時代中期の遺物も大量に回収されており、ここにもかなりの規模の集落が存在することが知れる。盆地に隣接する松江市稲寄遺跡[41]でも弥生時代後期から古墳時代前期の土器の出土が知られている。

南講武草田遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期までの墳墓群、住居址を確認しており、そこから出土した大量の土器には近畿系の搬入土器が数多く含まれていた。弥生時代後期末にはH－5区上器溜りと呼ぶ遺構では100個体以上の近畿系搬入土器があり、単に容器として搬入されたのではなく、かな

りまとまった人数の人々が近畿地方からこの地を訪れていたことを推測させる。また、近畿系の土器とともに、朝鮮半島製の瓦質土器も出土している[30]。ここでの近畿庄内系の大量の土器も、後に古墳群にみられる丹後地方との密接な交渉の中でこそ、理解が可能になるものと考えられる。弥生時代後期における島根半島部での四隅突出型墳丘墓の不在も、古墳時代前半にみられる主体部の丹後地方との共通性を考えるとき、示唆的ではある。

この講武盆地では他にも堀部第3遺跡でやはり庄内系のタタキ甕が、松江市稲寄遺跡でも搬入品と考えられる庄内系の二重口縁加飾壷が、さらに鹿島町沖では楽浪郡製とされる瓦質土器[40]も海底から引き揚げられている。

これらは、この島根半島中央部、なかでもこの講武盆地を中心とする一帯での特徴的な現象と指摘できる。海上交通が少なくとも弥生時代後期末には、この島根半島中央部を有力な窓口として行われていたことを示す資料と考えられる。集落遺跡でのこうした状況は、今回奥才古墳群での状況と符合する面も多く、弥生時代後期から古墳時代中期初頭ころまで、島根半島中央部での日本海に面した立地を利した海上交通が、一定程度この盆地の首長を中心に掌握されていたことに由来するものと理解したい。奥才型木棺は、出雲地方にあってはまさに奥才古墳群に限って存在しており、こうした事情を反映するものと考えられる。

一方、講武盆地内では、佐太前遺跡、古浦砂丘遺跡を除いて、古墳時代中期ころまでで途絶する集落が多い。このころ集落群は、その立地を換えたり、統合がなされるものと考えられる。それは丹花庵古墳成立以降、盟主墳が講武盆地から宍道湖北岸域に墓域を移すことと、その背景にある近畿政権との関係の変化にも関連させて理解できそうである。やはり、この時期を境に奥才古墳群では盟主墳は姿を消し、講武盆地全体でも目立った古墳は作られなくなる。長持形石棺、舟形石棺が宍道湖、中海沿岸に新たに展開する状況もあわせて考えると、海上交通も島根半島の日本海沿いから宍道湖、中海沿岸を寄港地とする新たな状況が生じたことも想定できる。

表1　奥才型木棺とそれに準ずる木棺が伴う古墳一覧

ゴシック体が奥才型木棺

No.	遺跡名	所在地	墳形	規模	外部施設	内部主体	墓壙規模	棺長	棺数	副葬品／遺物	主軸／頭位	時期	備考
1	**萱葉1**	福岡県志免町	円	18×20	周溝	箱木(2段掘)	6.9×2.6×0.9	4.8×0.7×0.5	3	四獣鏡、鏃、針、刀子、剣、ヤリガンナ、鎌、鑿	N－31°－E	5C前半	
2	川原庵山6	福岡県古賀町	円	径21	なし	箱木	4.4×2.8×0.4	3.2×0.4×0.3	1	櫛、墳丘中より弥生土器、石器	N－41°－W	5C後半	2体同時埋葬
3	川原庵山8	福岡県古賀町	円	径10	なし	箱木	－×1.7×0.5	3.6×0.5×0.3	1	L字形鋤先、鉄斧形鉄器、鉄鉾、ヤリガンナ、刀子、土師器	W－39°－N	5C後半	2体同時埋葬か？
4	千鳥21	福岡県古賀町	円	径16	溝	箱木	4.3×2.2×0.7	3.5×0.4×0.3	3	剣、鉾、刀、鏃、ヤリガンナ、小刀、刀子、勾玉、管玉、小玉	N－7°－E	5C前半	
5	斐伊中山2－Ⅲ	島根県木次町	方	15×12	周溝	箱木(2段掘)	4.2×1.5×0.4	3.1×0.4×0.3	1	直刃鎌	N－13°－E	前期	枕状に石を積む
6	**奥才11**	島根県鹿島町	方	16×15	溝	箱木(2段掘)	5.4×1.8×0.6	4.4×0.5×0.3	3	刀子、鏃、石枕	E－13°－N		階段状遺構
7	奥才12－1	島根県鹿島町	方	21×18	溝	箱木	4.8×3.2×0.8	3.2×0.4×0.6	1	鉄鏃、刀子	E－38°－N		
8	**奥才33**	島根県鹿島町	方	14×6	溝	箱木(2段掘)	6.0×2.0×0.7	4.7×0.5×0.2	3		N－28°－E		
9	月廻2	島根県松江市	円	11～14	なし	箱木	－×－×－	3.4×0.5×－	－	須恵器杯片		5C中葉を中心	未報告
10	金崎6	島根県松江市	方	20×20	なし	箱木	5.0×0.7×0.2	4.5×0.5×0.1					未報告
11	**田和1－1**	兵庫県大屋町	円		なし	箱木(2段掘)	7.2×2.3×－	4.6×0.6×0.3	2?	刀、鏃、櫛			
12	**中山23**	兵庫県和田山町	円	径27	なし	箱木(2段掘)	8.0×3.5×－	6.9×0.5×0.5	4	内行花文鏡、剣、鉄斧、鏃、ヤリガンナ		4C末	
13	**ヌクモ2**	京都府福知山市	方	8×8	溝	箱木(2段掘)	5.1×1.9×0.3	4.3×0.6×0.3	3	龍虎鏡、勾玉、管玉、臼玉、櫛	N－1°－W	5C初頭	枕状に石を積む
14	**日ノ内－1**	京都府岩滝町	不明	25～30	なし	箱木(2段掘)	8.3×3.5×1.0	7.5×0.6×0.2	2	獣形鏡、刀子、勾玉、管玉、算盤玉、石枕×2、ヤリガンナ、棒状鉄器、歯	S－18°－E	4C末	2体同時埋葬
15	**日ノ内－2**					箱木(2段掘)	6.2×2.2×1.0	4.5×0.4×0.4	2	なし	S－17°－E		
16	**日ノ内－3**					箱木(2段掘)	5.2×1.2×0.5	4.5×0.5×0.2	3	鉄剣、石枕	S－17°－E		
17	**大田南6**	京都府弥栄町	円	径28	なし	箱木(2段掘)	9.6×6.5×2.5	5.4×1.1×0.3	3	石釧、刀子、棒状鉄器、針状鉄器、供献土器／小型丸底壺、甕、高杯、鼓形器台	E－2°－S	前期後半	木槨
18	**奈具岡北1－1**	京都府弥栄町	前方後円	全長60	なし	箱木(2段掘)	5.8×2.1×0.7	3.9×0.7×0.4	2	剣、鏃、鉄鉾、石突、銅釧、陶質土器・初期須恵器、土師器	E－27°－S	中期前半	
19	**溝谷2**	京都府弥栄町	円	径28	溝	箱木(2段掘)	9.9×2.6×1.2	7.7×0.6×0.5	2	平縁鏡、刀子、管玉	S－17°－E		
20	**溝谷3**	京都府弥栄町	－	なし	溝	箱木	4.9×1.4×0.8	3.4×0.5×0.3	1		S－21°－E		
21	**左坂C21**	京都府大宮町	円	径20	溝	箱木(2段掘)	6.6×2.0×0.8	5.3×0.5×0.3	2	捩文鏡、鉄斧、鉄鎌(曲刃、直刃)、櫛、管玉、臼玉	E－21°－N	中期前半	
22	岸ヶ前2－4	京都府園部町	円	29×19	葺石 埴輪	箱木	3.7×0.7×－	3.5×0.4×－	1	刀、刀子、針金状鉄製品	W－1°－N	中期中葉	棺床は西半のみ
23	**西山塚－1**	京都府木津町	円	径26	周溝 埴輪 葺石	箱木(2段掘)	8.5×2.5×0.8	4.9×0.6×0.5	3	鉄鉾、石突、刀、剣、鏃、革製漆塗盾、櫛、臼玉、埴輪、土師器	N－12°－W	5C後半	
24	下大谷2－南	京都府城陽市	方	辺20	溝	箱木	－×－×－	3.5×0.6×0.1	1		W－42°－N	前末～中期前半	
25	下大谷2－北					箱木	－×－×－	3.8×0.7×0.1	1		W－42°－N	前末～中期前半	赤色顔料
26	弁天山D3	大阪府高槻市	円	径30		箱木	3.2×1.0×0.5	2.8×0.5×0.3	2以上		W－7°－N	中期後半	半壊

表２　箱式石棺に礫床が伴う古墳一覧

No.	遺跡名	所在地	墳形	規模	外部	内部主体	墓壙規模	棺長	室数	副葬品／遺物	主軸／頭位	時期	備考
1	駿H北ST01－2	佐賀県神埼町	方	10×10	周溝	箱石	2.9×2.4×0.9	1.5×0.4×0.4	1	骨	W－34°－N		2体同時埋葬、赤色顔料
2	津古内畑4・17	福岡県小郡市	円	径7	溝	箱石	1.1×1.1×0.5	0.7×0.3×0.3	1	刀子、針	N－16°－W		
3	立野6	福岡県甘木市	円	径12	周溝	箱石（2段掘）	2.5×1.4×0.5	1.8×0.5×0.2	1	刀子	E－0°－N		
4	カクチガ浦5	福岡県那珂川町	－	－	なし	石蓋（2段掘）	2.7×1.6×0.6	2.3×0.7×0.4	1	骨	E－1°－S		朱
5	炭焼2－1	福岡県那珂川町	方	11×8	周溝	箱石	2.9×2.7×0.5	1.7×0.5×0.4	1	骨、墳丘より高杯片	E－42°－S		熟年男性
6	炭焼2－2					箱石	－×－×－	1.5×0.4×0.4	1	骨	E－40°－S		成年女性、小児
7	千鳥16	福岡県古賀町	円	径11	溝	箱石	4.8×2.7×0.7	1.9×0.4×0.3	1	棺内/剣先　溝内/須恵器	N－2°－E	5C前半	
8	千鳥22－2	福岡県古賀町	円	径20	溝	箱石	1.5×0.9×0.4	0.6×0.3×0.2	1		N－4°－E		ベンガラ、線刻壁
9	千鳥23	福岡県古賀町	円	径13	周溝	箱石（2段掘）	2.8×1.8×0.6	1.7×0.4×0.3	1	溝内/土器片、滑石製円盤	E－15°－N		ベンガラ
10	野多目台1	福岡県福岡市	方	7×7	周溝	箱石	2.9×1.1×0.3	1.6×0.4×0.2	1	粘土枕	N－38°－W		赤色顔料、2体埋葬
11	井手ノ上－2	福岡県津屋崎町	円	径26	周溝 葺石	箱石（2段掘）	8.1×4.0×2.0	1.8×0.5×0.4	1	大刀、剣、鉾、刀子、鏃、刀、鉄柄手斧、斧、鑿、鎌、鋤先、短甲、初期須恵器甕	N－35°－W	5C前半	熟年男性
12	妙徳寺山	山口県山陽町	前方後円	全長30	なし	石棺系竪穴式石室	2.4×2.1×0.8	1.8×0.5×0.2	1	棺内/捩文鏡、勾玉、管玉、刀子、粘土枕、人骨　周溝/剣、土師器壺、高杯	S－37°－W	4C後半～末	
13	兜山	山口県山口市	円	径20	葺石	箱石	2.4×2.1×0.8	1.5×0.3×0.2	1	棺内/獣帯鏡、石枕　棺外/剣、刀子、斧、手斧、鎌、手鎌		5C中葉	若年女性、赤色顔料
14	秋田7号箱式石棺墓	山口県山口市				箱石	1.9×0.6×0.4	1.6×0.3×0.3	1	石枕　周辺部より小型壺形土器	E－34°－N		
15	秋田6号円形周溝墓	山口県山口市	－	径8	周溝	箱石（2段掘）	2.8×1.5×1.0	1.6×0.4×0.2	1	棺内/石枕、歯　棺外/剣、斧、鎌、周溝内より土師器壺	E－20°－N		
16	久米三成4－1	岡山県久米町	前方後方	全長35	溝	箱石（2段掘）	3.9×2.1×0.6	1.9×0.5×0.3	1	棺内/四獣鏡、剣、斧、石枕、骨	W－16°－S	5C前葉	2体埋葬、赤色顔料
17	久米三成4－2					箱石（2段掘）	5.0×4.0×0.6	1.9×0.4×0.3	1	棺内/石枕、骨	W－10°－S	5C前葉	角礫、2体埋葬、赤色顔料
18	門の山1－A	岡山県津山市	方	10×10	葺石	箱石	－×－×0.7	2.1×0.5×0.4	1		S－25°－E		礫の上に板石敷
19	門の山1－B					箱石	－×－×0.5	1.6×0.4×0.2	1	石枕×2	E－26°－N		2体埋葬
20	殿山9－2	岡山県総社市	方	12×14	周溝	箱石（2段掘）	2.6×1.6×0.5	1.8×0.4×0.3	1	石枕	E－24°－S	布留式新相	壮年男性
21	殿山21－1	岡山県総社市	方	－×11	周溝	箱石（2段掘）	3.2×2.0×0.6	2.0×0.4×0.3	1	墳丘、周溝より弥生後期土器	W－8°－N	才ノ町Ⅰ式	2体追葬埋葬、壮年～熟年女性
22	山ノ内12－1	島根県旭町	円	径10	周溝	箱石（2段掘）	3.3×2.5×0.5	1.7×0.5×0.4	1	刀子　周溝/須恵器、土師器	E－20°－N	5C後～6C前	山本Ⅰ期
23	山地－3	島根県出雲市	円	径24	葺石	箱石	1.0×0.8×0.3	0.7×0.3×0.2	1		N－5°－E	前期末	
24	奥才13－1	島根県鹿島町	方	23×19	溝	箱石（2段掘）	4.2×2.2×0.8	1.6×0.4×0.3	1	墳丘より土師器壺	E－27°－S		
25	奥才13－2					箱石（2段掘）	3.9×2.5×0.7	1.9×0.5×0.3	1		E－30°－S		墓壙上面に石材
26	奥才14－1	島根県鹿島町	円	径18	溝	箱石（2段掘）	4.4×2.9×0.5	1.8×0.5×0.3	2	棺内/内行花文鏡、方格渦文鏡、紡錘車形石製品、歯牙、骨片　棺外/剣、素環頭大刀、槍、鏃、ヤリガンナ、刀子飽　鋤先/刀子	E－31°－S		
27	奥才14－2					箱石（2段掘）	3.1×2.3×0.5	1.8×0.4×0.3	1	剣、鏃、刀子、針	E－34°－S		墓壙上面に礫
28	奥才17－1	島根県鹿島町	円	径20	溝	箱石（2段掘）	3.8×2.8×0.5	1.6×0.5×0.2	1	刀子、針、石枕、頭骨	E－29°－S		
29	秋葉山3	島根県鹿島町	不明	不明	なし	箱石	－×－×－	1.7×0.4×0.3	1	臼玉、勾玉	E－37°－S		石は全て表面に露出している
30	白畑	島根県鹿島町	不明	不明	なし	箱石	－×－×	2.5×0.5×	1	銀環、勾玉、鏃、須恵器（杯・蓋・䟽）	E－1°－N	山本Ⅲ期	
31	狐塚	島根県鹿島町	円	径17	なし	箱石	－×－×－	1.8×0.4×0.3	1		N－20°－W		
32	北小原3	島根県松江市	方	9×7	周溝	箱石	2.5×1.6×0.4	1.7×0.3×0.2	1	棺内/珠文鏡　棺外/剣	S－10°－E	4C中～後半	小谷式～布留式併行
33	柴尾4区	島根県松江市	不明	不明	なし		×－×－	－×－×			N－1°－E		
34	六部山45－1	鳥取県鳥取市	円	径20	溝	箱石（2段掘）	3.8×2.8×0.5	1.6×0.5×0.2	1	四獣鏡、土器枕、管玉、管状鉄製品、骨	E－31°－S	5C初頭	
35	六部山45－2					箱石（2段掘）	3.1×1.2×0.5	1.6×0.5×0.2	1	剣、刀子、土器枕（壺）	S－35°－W		
36	六部山48－1	鳥取県鳥取市	円	径10	溝	箱石	2.5×1.3×0.3	1.8×0.7×0.1	1	勾玉、管玉、臼玉、小玉	W－23°－N	中期	角礫
37	六部山33－1	鳥取県鳥取市	円	径12	溝	箱石	2.4×1.1×0.5	1.7×0.5×0.1	1	墳丘、周溝から土師器小片	W－15°－N	中期	角礫
38	長瀬高浜1	鳥取県羽合町	円	径24	葺石	箱石	－×－×	1.9×0.6×－	1	土器枕（高杯）、大刀、柳			
39	日下39－1	鳥取県米子市	方	12×12	周溝	箱石（2段掘）	2.9×－×0.5	1.4×0.3×0.4	1	石枕、人骨	E－5°－N		2体埋葬
40	日下38－1	鳥取県米子市	円	径11	周溝	箱石	3.0×1.6×0.5	1.0×0.3×0.3	1		E－16°－S		小型、壺棺
41	日下12	鳥取県米子市	円	径13	周溝	箱石（2段掘）	3.4×2.8×1.0	1.8×0.7×0.5	1	棺内/七獣鏡（頭部）、刀子、針、鏃、管玉、臼玉、小玉、人骨　墳丘その他/土師器・須恵器	E－41°－S	5C中葉のものと7C初頭のもの	礫の下にさらに石敷、追葬
42	カチヤ	兵庫県豊岡市	円	19×17	なし	箱石（2段掘）	4.8×3.7×1.1	2.2×0.6×0.6	1	棺外/珠文鏡、勾玉、管玉、臼玉、針、ガラス小玉　棺内/鉄剣、刀子、勾玉、管玉、臼玉、石枕、歯牙、頭骨	N－45°－W	前末～中初	
43	向山5－1	兵庫県和田山町	円	13×5	溝	箱石（2段掘）	4.3×2.6×0.9	1.9×0.5×0.3	1	棺内/刀、鉄鉾、石枕　棺外/刀子、鏃、ヤリガンナ、土師器高杯	E－26°－N	布留（中）	熟年男性、赤色顔料
44	向山11－2	兵庫県和田山町	－	－	なし	箱石	3.4×1.7×1.2	2.1×0.8×0.6	1	棺内/鉄斧、鋸、刀子、鏃、臼玉　棺外/鋤先、鑿、ヤリガンナ、鏃、須恵器杯	E－13°－N	ON46～TK208	壮年男性、赤色顔料
45	市条寺2	兵庫県和田山町		7×7	なし	箱石（2段掘）	3.0×2.5×0.7	1.7×0.4×0.2	1	石枕　墳丘より土師器、須恵器	N－41°－W	TK23～47	朱、土器は2号墳の可能性も
46	市条寺3	兵庫県和田山町	－	6×6	なし	箱石	3.6×2.8×0.9	1.9×0.4×0.3	1	勾玉、ガラス玉、石枕	W－25°－N	TK23～47	熟年女性、赤色顔料
47	小山3－2	兵庫県八鹿町	円	25×24	なし	箱石	3.6×2.8×1.2	1.7×0.4×0.3	1	剣、ヤリガンナ、骨	W－3°－S		赤色顔料、50代男性
48	七面山2－1	兵庫県八鹿町	円	径19	溝？	箱石（2段掘）	3.1×1.9×0.8	1.6×0.4×0.3	1	石枕、骨、歯　墳丘上/壺形埴輪	E－13°－N		
49	七面山3	兵庫県八鹿町	円	16×21	溝？	箱石	3.9×2.4×1.2	1.9×0.5×0.4	1	棺内/剣、刀子、石枕、骨、歯牙　棺外/剣	W－20°－S		赤色顔料
50	竹ノ内1	兵庫県八鹿町	円	18×15	溝	箱石	3.1×1.6×0.4	1.7×0.5×0.5	1	棺内/剣、鏃、勾玉、ガラス小玉、石枕　墓壙中/土師器　溝中/須恵器（䟽）	E－2°－S	溝埋はTK23　5C末	
51	竹ノ内2－3	兵庫県八鹿町	方	8×5	なし	箱石	2.2×1.1×0.4	1.8×0.4×0.3	1		W－10°－N		
52	養久山1－2	兵庫県揖保川町	前方後円	全長32	葺石	箱石	1.8×1.1×0.9	0.6×0.3×0.3	1	剣	S－15°－W	前期	
53	養久山1－6					箱石	－×2.2×1.2	1.8×0.4×0.2	1	石枕、骨、ヤリガンナ、鋸歯文土器	E－2°－S		
54	鈴木南山1－3	兵庫県小野市	方	14×14	葺石	箱石	1.1×0.7×0.3	0.7×0.2×0.3	1		N－5°－E	前期	墓壙の周囲の可能性をもつ
55	カルビ	京都府伊根町	円	径8	なし	箱石	2.4×1.6×0.8	1.7×0.4×0.3	1	石枕、骨	N－34°－W		男性
56	作山1	京都府加悦町	円	径28	葺石 埴輪	箱石	－×－×－	2.7×－×－	2	四獣鏡、石釧、玉類、鉄器、人骨	S－25°－E	前期末	男性
57	大工山京尾横穴組合箱式石棺	奈良県榛原町	なし	なし	なし	箱石	1.2×0.6×－	0.7×0.3×0.2	1	周辺で弥生後期土器	N－30°－E	弥生～古墳	

表3　箱式木棺に礫床が伴う古墳一覧

No.	遺跡名	所在地	墳形	規模	外部施設	内部主体	墓壙規模	棺長	室数	副葬品／遺物	主軸／頭位	時期	備考
1	川原庵山5	福岡県古賀町	円	径8~9	なし	箱木(2段掘)	2.6×1.7×0.5	1.5×0.3×0.2	1	刀子、針	E-35°-S	5C中頃	棺狭い、小児か?
2	川原庵山7	福岡県古賀町	円	径10	なし	箱木(2段掘)	4.0×1.8×0.6	1.8×0.4×0.4	1	刀子、鏃	E-6°-N	5C後半	
3	原口B1	福岡県古賀町	円	8×7	なし	箱木	3.1×1.5×0.6	2.3×0.3×0.3	1	墳丘中から弥生土器	E-16°-S		
4	千鳥22-1	福岡県古賀町	円	径20	溝	箱木(3段掘)	5.8×3.8×1.5	2.2×0.4×0.2	1	剣、鏃、ヤリガンナ、刀子、耳飾、土器	E-1°-N		石蓋木棺墓
5	千鳥1号石蓋木棺墓	福岡県古賀町	—	なし	なし	箱木	3.9×1.3×0.3	2.5×0.5×0.2	1	鉄鎌、ヤリガンナ、鉄斧	E-20°-S		石蓋木棺墓
6	野多目台2	福岡県福岡市	円	径14	周溝	箱木	2.4×2.1×0.5	1.5×0.5×0.2	1	粘土枕	N-38°-W		赤色顔料
7	寺福童2	福岡県福岡市	[illegible]	6×10	周溝	箱木	2.2×0.9×0.2	1.3×0.4×0.1	1		E-8°-N		赤色顔料
8	殿山10-3	岡山県総社市	方	13×15	周溝	箱木(2段掘)	2.3×0.9×0.5	2.0×0.5×0.3	1	墳端より土器片	S-28°-W	布留式中相	
9	殿山21-2	岡山県総社市	方	-×11	周溝	箱木(2段掘)	3.2×2.0×0.4	2.1×0.5×0.3	1	墳丘、周溝より弥生後期土器	W-14°-N	オノ町I式	2体[illegible]、壮年女性
10	用木山9-2	岡山県山陽町	不明	10?		箱木(2段掘)	2.5×1.3×0.6	1.1×0.4×0.1	1	ガラス小玉、骨	W-30°-S	5C中葉か	赤色顔料
11	用木山10	岡山県山陽町	不明	10?		箱木	2.2×1.3×0.2	1.1×0.4×0.1	1	鉄鎌、管玉、ガラス小玉	W-33°-S	5C中葉か	
12	鋒塚山	島根県多伎町	方	6×6	なし		×　×-	1.8×0.4×-	-	管玉、滑石製勾玉、棗玉			一種の礫槨
13	神待山1	島根県出雲市	方	12×12	なし	箱木	-×-×-	-×-×-	-				
14	山床2	島根県出雲市	円	径24	貼石	箱木	-×-×-	2.6×0.7×0.2	1	珠文鏡、筒形銅器	N-25°-E	前期末	
15	奥才5-1	島根県鹿島町	方	16×16	溝	箱木(2段掘)	4.2×2.4×0.3	2.1×0.6×0.2	1	刀子	E-7°-N		陥没状遺構
16	奥才7	島根県鹿島町	方	12×10	溝	箱木	2.8×1.6×0.3	1.7×0.5×0.2	1	石枕(ハの字)	E-15°-N		
17	奥才29-1	島根県鹿島町	方	12×10	溝	箱木	3.1×1.2×0.2	1.8×0.6×0.1	1	勾玉	N-16°-W		陥没状遺構
18	奥才30	島根県鹿島町	方	8×8	溝	箱木	-×-×-	1.8×0.5×0.1	1	石枕(ハの字)	E-1°-N		
19	奥才39-1	島根県鹿島町	方	8×8	溝	箱木	2.8×1.0×0.4	2.0×0.4×0.3	1		E-44°-N		木棺・石棺折衷
20	奥才17-2	島根県鹿島町	円	径20	なし	箱木	2.7×1.2×0.2	1.9×0.4×0.1	1		E-11°-N		標石
21	奥才61-1	島根県鹿島町	方	9×8	溝	箱木(2段掘)	3.4×1.5×0.4	2.1×0.5×0.2	2	刀子	S-31°-E		
22	中の津-2	島根県鹿島町	円	径20	溝	箱木	-×-×-	-×0.4×-		曲刃鎌	W-41°-N	5C後~6C初	石蓋木棺
23	古曽志寺坊1	島根県松江市	方	10×10	溝	箱木(2段掘)	3.2×1.6×0.2	2.5×0.6×0.1	1		N-5°-E		
24	寺津11	島根県松江市	方	10×9	溝	箱木	3.5×1.7×0.4	2.5×0.8×0.1	1		E-21°-N		
25	菅田丘	島根県松江市	前方後方	25~30	埴輪	木棺?	×　×	2.3×0.8×-	-	管玉、垂玉、臼玉、墳頂/円筒埴輪			一種の礫槨
26	かいつき山	島根県松江市	方	13×13	なし	箱木?	-×-×-	2.6×0.7×-	-	墓壙埋土中より土師器壺			一種の礫槨
27	月廻7-1	島根県松江市	方	19×16	不明	箱木	-×-×-	×-×-		槍、剣、刀子		5C中葉を中心	
28	月廻7-2					箱木	-×-×	-×-×	-				
29	月廻番外2	島根県松江市	方	17×14	不明	箱木	×　×-	-×-×-	-	刀子、不明鉄器			
30	中竹矢SK27	島根県松江市	不明	不明	なし	箱木	3.8×1.0×-	2.7×0.5×-	-	ガラス小玉			
31	月廻3	島根県松江市	方	10×9	なし	箱木	-×-×-	0.5×0.3×-	-			5C中葉を中心	墳丘一部崩壊
32	月廻20	島根県松江市	不明	不明	なし	箱木	-×-×-	1.8×0.6×					
33	小丸山2	島根県松江市	方	10×8	溝	箱木(2段掘)	3.0×1.0×0.3	2.4×0.6×0.1	1	石枕	N-13°-E		
34	日下39-2	鳥取県米子市	方	12×12	周溝	箱?木	4.0×1.7×0.6	2.5×0.3×0.3	1	小型丸底壺、ヤリガンナ	E-3°-N		
35	船木南山1-2	兵庫県小野市	方	14×14	葺石	箱木	-×-×-	2.5×0.6×0.3	1		N-1°-W	前期	[illegible]
36	中山1	兵庫県八鹿町	円	径14	周溝	箱木?(粘土床)	4.6×2.9×1.2	2.3×0.9×0.3	1	勾玉、管玉、刀子	E-20°-N	4C後半~末	赤色顔料、[illegible]
37	向山1-1	兵庫県和田山町	方	10×9	溝	箱木	3.6×2.6×1.0	2.1×0.8×0.6	1	墳丘、溝より土師器/壺、甕、高杯	W-30°-N	布留(古)	赤色顔料
38	向山2-2	兵庫県和田山町	方	11×7	溝	木棺(2段掘)	3.5×2.6×1.0	1.5×0.3×0.1	1	棺内/内行花文鏡、ヤリガンナ、骨 墓壙内/土師器(壺、甕、高杯、鉢)	E-43°-S	布留(古)	竪穴式石室、ベンガラ
39	向山10-1	兵庫県和田山町	—	不明		箱木(2段掘)	3.4×1.8×0.7	1.9×0.3×0.2	1	棺内/剣、石枕　棺外/鉄鏃、鉄鑿、 墓壙上面/土師器壺、須恵器椀	S-21°-E	TK47~MT15	
40	梅田16-1	兵庫県和田山町	方	14×10	溝	箱木	3.5×2.3×-	1.8×0.5×-	1	棺内/刀子、勾玉　棺外/刀子			
41	奥大石1	京都府綾部市	方	11×11	なし	箱木(2段掘)	6.0×2.0×0.6	2.0×0.6×0.5	1	剣、刀	N-5°-E	5C前半	
42	瓦谷木棺墓	京都府木津町	—	—	なし	箱木	2.3×0.8×0.2	1.7×0.3×0.1	1	土師器小片	W-6°-N		
43	テンジクダイラ1-1	石川県鹿西町	円		—	木棺	6.0×3.0×-	2.0×　×-	—	剣、刀子、斧		4C後葉~5C初	

表4　奥才古墳群第Ⅷ支群遺構一覧

支群	名称	墳丘 墳形	墳丘 規模(m)	墳丘 外部施設	埋葬施設 構造	埋葬施設 規模(m)	埋葬施設 主軸	出土遺物(数量)	備考
第Ⅷ支群	53号墳	円	径6		調査区域外				
	54号墳	方	12×10		調査区域外				
	55号墳	方	8×10	溝	墓壙(二段掘り)	-×2.0×0.4	N-40°-E	小型勾玉1、ガラス玉1	支群最高所
	56号墳	方	14×10	溝	①刳抜木棺(二段掘り)	4.4×2.4×0.8	E-35°-N	鉄鎌1、鼓形器台	
					②箱式石棺	1.0×0.9×0.4	N-33°-E		小児埋葬
	68号墳	方	2×7		石蓋墓壙	1.9×0.5×0.4	E-45°-S	鉄斧	
	番外1号		なし		石蓋墓壙	1.8×0.4×0.2	N-19°-E		
	57号墳	方	10×8		①箱式木棺(二段掘り)	3.1×1.7×0.7	N-43°-E		土器枕
					②土器被覆墓壙	0.8×0.3×0.3	W-33°-N		小児埋葬か
	58号墳	方	7×7		①墓壙	2.4×0.8×0.5	W-32.5°-N	刀子	第2主体と切合う
					②墓壙	2.3×0.5×0.4	W-34°-N		狭い
	59号墳	方	7×7	溝	箱式木棺	3.3×0.7×0.3	S-39°-W	土器片	
	60号墳	方	7×8	溝	①箱式木棺(二段掘り)	3.2×1.8×0.4	W-44°-N		
	61号墳	方	9×8	溝	①箱式木棺(二段掘り、礫床)	3.4×1.5×0.4	S-31°-E	刀子	
					②箱式木棺(二段掘り)	3.5×1.4×0.4	S-31°-E		
					③合わせ口甕棺	0.8×0.4×0.2	E-42°-S		小児埋葬か
	65号墳	方	5×5	溝	箱式木棺	2.6×0.8×0.2	E-30°-N	土器片、刀子	
	67号墳	方	3×3	溝	土器棺納遺構	1.1×0.9×0.4	E-16°-N		
	62号墳	方	16×14	溝	①刳抜木棺(二段掘り)	4.8×1.2×0.4	W-35°-S	ヤリガンナ	
	63号墳	方	12×7		①土器棺	-×0.4×0.1	S-39°-E		小児埋葬か
					②墓壙	-×0.6×0.1	N-31°-W	鼓形器台(弥生)	
					③木棺か	1.3×0.7×0.3	N-10°-E	甕口縁部(弥生)	
					④木棺	1.4×0.6×0.3	S-14°-E		拳大の石材を伴う
					⑤木棺	1.9×0.6×0.3	E-14°-N		
					⑥木棺	1.3×0.6×0.2	W-12°-N		
	64号墳	円	径9	溝	流失			埴輪、須恵器、土師器	墳丘は盛土による
	66号墳	円	径5か	溝	流失			須恵器	墳丘は盛土による

注

1. 『佐太講武貝塚発掘調査報告書』鹿島町教育委員会　1993年
　『佐太講武貝塚発掘調査報告書』2　鹿島町教育委員会　1994年
2. 『佐太講武貝塚　主要地方道松江鹿島美保関線交通安全施設整備工事に伴う調査』鹿島町教育委員会　1997年
3. 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書4　北講武氏元遺跡』鹿島町教育委員会　1989年
4. 『開拓者の眠るところ　速報！堀部第1遺跡木棺墓群』鹿島町立歴史民俗資料館　1999年
5. 金関丈夫「島根県八束郡古浦遺跡」『日本考古学年報』16　1963年
　藤田等「島根県　古浦遺跡」『探訪弥生の遺跡　西日本編』1987年
6. 『佐太前遺跡』鹿島町教育委員会　1987年
7. 『志谷奥遺跡』鹿島町教育委員会　1976年
8. 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書1　名分塚田遺跡』鹿島町教育委員会　1984年
　『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書3　名分塚田遺跡2』鹿島町教育委員会　1987年
9. 「南講武小廻遺跡」『鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書』1　鹿島町教育委員会　1986年
10. 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5　南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会　1992年
11. 『島根原子力発電所PR館移設計画に伴う名分丸山古墳群測量調査報告書』鹿島町教育委員会　1984年
12. 『奥才古墳群』鹿島町教育委員会　1985年
13. 『菅田考古』16　島根大学考古学研究会　1983年
14. 島根大学総合理工学部山内靖喜先生のご教示による。
15. 『ソフトビジネスパーク建設に伴う大佐遺跡群発掘調査報告書』松江市教育委員会　1999年
16. 内田　才・東森市良・近藤　正「島根県安来平野における土壙墓」『上代文化』36　1966
17. 『松江市手間古墳発掘調査報告　薬師山古墳出土遺物について』島根大学法文学部考古学研究室　2002年
18. 山本　清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』　1960年
19. 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11　1994年
20. 田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1980年
21. 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64　2　1978年
22. 藤永照隆「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』14　1997年
23. 『石見縦関連遺跡調査報告1（飯田A遺跡・長束坊師窯跡）』島根県教育委員会　2001年
24. 『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会　1984年
　『浜山池遺跡・原ノ前遺跡』島根県教育委員会　1997年
25. 近江俊秀「古代道路遺構の構造」『文化財学論集』1994年
26. 『石見銀山　石見銀山遺跡発掘調査概要10　栃畑谷地区・出土谷地区』島根県教育委員会・大田市教育委員会　2000年
27. 江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究事典』柏書房　2001年
28. 森下章司「古墳時代前期の年代試論」『古代』105　早稲田大学考古学会　1998年
29. 『斐伊中山古墳群　西支群』木次町教育委員会　1993年
30. 『古墳出現－奥才古墳群から見る前期古墳の様相－』鹿島町立歴史民俗資料館　2001
31. 石崎善久「弥生墳墓の構造と変遷　舟底状木棺を中心として－」『丹後の弥生王墓と巨大古墳　季刊考古学別冊10』雄山閣　2000年
32. 『ソフトビジネスパーク建設に伴う大佐遺跡群発掘調査報告書』松江市教育委員会　1999年
33. 『社日古墳　一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12』島根県教育委員会　2000年
34. 『湯の奥遺跡、登安寺遺跡、湯後遺跡、十井・砂遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12』島根県教育委員会　2001年
35. 『作山1号墳からのメッセージ』加悦町教育委員会　1992年
　佐藤晃一「史跡作山古墳の発掘調査」『古代文化』第42巻　6号
36. 『半坂峠古墳群・辻遺跡』兵庫県教育委員会　1983年
37. 和田晴吾「丹後の石棺」『丹後の弥生王墓と巨大古墳　季刊考古学別冊10』雄山閣　2000年　本書において、加悦町教育委員会佐藤晃一氏によるとして、蔵興寺4号墳例、離湖古墳例がともに内法198cmであることが紹介されており、丹花庵古墳例内法もほぼ一致するものと考える。
38. 三木　弘「前方後円墳の時代」『青いガラスの燦き　丹後王国が見えてきた』大阪府立弥生文化博物館　2002年
39. 山本　清「山陰の石棺について」『山陰古墳文化の研究』所収　1971年
40. 和田晴吾「近畿の刳抜式石棺－4・5世紀における首長連合体制と石棺－」『古代文化』第46巻第6号　1994年
41. 赤澤秀則「墓と海と－島根の弥生文化の一側面－」『神々の源流　出雲・石見・隠岐の弥生文化』　大阪府立弥生文化博物館　2000年
42. 亀田修一「出雲・石見・隠岐の朝鮮系土器－古墳時代資料を中心に－」『蟹谷遺跡・上沢Ⅲ遺跡・古志本郷遺跡Ⅲ　斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12』島根県教育委員会　2001年

表1　奥才型木棺とそれに準ずる木棺が伴う古墳一覧　参考文献

1. 『畳葉古墳群』志免町教育委員会　1984年
2・3. 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』福岡県教育委員会　1974年
4. 『浜山・千鳥遺跡』古賀町教育委員会　1985年
5. 『斐伊中山古墳群－西支群－』木次町教育委員会　1993年
6～8. 『奥才古墳群』鹿島町教育委員会　1985年
9. 前島己基「月廻古墳群」『日本考古学年報』25　1974年
10. 『史跡金崎古墳群』松江市教育委員会　1978年
11. 『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和59年度』兵庫県教育委員会　1987年
12. 『兵庫県史　考古資料編』兵庫県　1992年
13. 『京都府遺跡調査概報　第37冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター　1990年
14～16. 『弓木城跡・千原遺跡』岩滝町教育委員会　1985年
17. 『大田南古墳群／大田南遺跡／矢田城跡第2次～第5次発掘調査報告書』弥栄町教育委員会　1998年
18. 『京都府遺跡調査概報　第76冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター　1997年
19・20. 『京都府遺跡調査概報　第60冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター　1994年
21. 『京都府遺跡調査概報　第89冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター　1999年
22. 『岡部岸ヶ前古墳群発掘調査報告書』佛教大学　2001年
23. 『京都府遺跡調査概報　第56冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター　1994年
24・25. 『城陽市埋蔵文化財調査報告書　第2集』城陽市教育委員会　1974年
26. 高島徹「弁天山古墳群」『図説　西日本古墳総覧』1991年

表2　箱式石棺に礫床が伴う古墳　参考文献

1. 『朝日北遺跡』佐賀県教育委員会　1992年
2. 『津古内畑遺跡　第5次』福岡県教育委員会　1974年
3. 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－5－』福岡県教育委員会　1984年
4. 『カクチガ浦遺跡群Ⅲ』那珂川町教育委員会　1994年
5・6. 『炭焼古墳群』福岡県教育委員会　1968年
7. 『浜山・千鳥遺跡』古賀町教育委員会　1985年
8・9. 『千鳥古墳群Ⅱ』福岡県教育委員会　1987年
10. 『野多目台　野多目B・和田B遺跡調査第1次調査報告書』福岡市教育委員会　1995年
11. 『宮司井手ノ上古墳』津屋崎町教育委員会　1991年
12. 『妙徳寺山古墳・妙徳寺山経塚・栗遺跡』山口県教育委員会ほか　1991年
13. 「兜山古墳」『山口県の古代遺跡〔Ⅱ〕古墳編』1996年
14・15. 『朝田墳墓群Ⅰ　木崎遺跡』山口県教育委員会ほか　1976年
16・17. 『久米三成4号墳』岡山県教育委員会　1979年
18・19. 『佐良山古墳群の研究　第1冊』津山市　1952年
20・21. 『殿山遺跡・殿山古墳群』岡山県教育委員会　1982年
22. 『山ノ内古墳群発掘調査報告書』旭町教育委員会　1994年
23. 『山地古墳発掘調査報告書』出雲市教育委員会　1986年
24～28. 『奥才古墳群』鹿島町教育委員会　1985年
29. 『御津貝塚横穴群発掘調査報告書Ⅰ』鹿島町教育委員会　1984年
30・31. 『菅田考古』16号　島根大学考古学研究会　1983年
32. 『北小原古墳群発掘調査報告書』松江市教育委員会　2000年
33. 『柴尾遺跡発掘調査報告書（Ⅰ）』松江市教育委員会　1994年
34～37. 『六部山古墳群』鳥取市教育委員会　1994年
38. 『鳥取県の古墳』鳥取県埋蔵文化財センター　1986年
39～41. 『日下古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会ほか　1992年
42. 『半坂峠古墳群・辻遺跡』兵庫県教育委員会　1983年
43～46. 『向山古墳群・市条寺古墳群・一乗寺経塚・矢別遺跡』兵庫県教育委員会　1999年
47. 『小山古墳群・東家の上遺跡』八鹿町教育委員会　1990年
48・49. 『七廻山古墳群・数田北遺跡』八鹿町教育委員会　1998年
50・51. 『竹ノ内古墳群』八鹿町教育委員会　2000年
52・53. 『養久山墳墓群』揖保川町教育委員会　1985年
54. 『船木南山古墳発掘調査概要書』小野市教育委員会　1992年
55. 『カルビ古墳発掘調査概要』伊根町教育委員会　1987年
56. 『作山1号墳からのメッセージ』加悦町教育委員会　1992年
　佐藤晃一「史跡作山古墳の発掘調査」『古代文化』第42巻　6号
57. 『大干山遺跡』榛原町教育委員会　1977年

表3　箱式木棺に礫床が伴う古墳　参考文献

1・3. 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXI』福岡県教育委員会　1978年
2. 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』福岡県教育委員会　1974年
4・5. 『千鳥古墳群Ⅱ』福岡県教育委員会　1987年
6. 『野多目台　野多目B・和田B遺跡調査第1次調査報告書』福岡市教育委員会　1995年
7. 『寺福童遺跡』小郡市教育委員会　2000年
8・9. 『殿山遺跡・殿山古墳群』岡山県教育委員会　1982年
10・11. 『用木古墳群』山陽町教育委員会　1975年
12. 山本　清「小規模古墳について」『山陰古墳文化の研究』1971年
13. 川原和人「神符山古墳群」『日本考古学年報』28　1977年
14. 『山地古墳発掘調査報告書』出雲市教育委員会　1986年
15～20. 『奥才古墳群』鹿島町教育委員会　1985年
21. 『奥才古墳群第8支群』鹿島町教育委員会　2002年
22. 『御津中の津古墳発掘調査報告書』鹿島町教育委員会　1985年
23. 『古曽志遺跡群発掘調査報告書』島根県教育委員会　1989年
24. 『釜代1号墳外発掘調査報告Ⅰ』松江市教育委員会　1994年
25. 山本　清「島根大学敷地内背田丘古墳について」『山陰文化研究紀要』1977年
26. 山本　清「松江・かいつき山古墳」『島根県埋蔵文化財調査報告』Ⅳ　1962年
27～29. 前島己基「月廻古墳群」『日本考古学年報』25　1974年
30. 『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ　島根県教育委員会　1983年
31・32. 宮沢明久「月廻古墳群」『日本考古学年報』27　1976年
33. 『小丸山古墳群』松江市教育委員会　1986年
34. 『日下古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会ほか　1992年
35. 『船木南山古墳発掘調査概要書』小野市教育委員会　1992年
36. 『七廻山古墳群・数田北遺跡』八鹿町教育委員会　1998年
37～39. 『向山古墳群・市条寺古墳群・一乗寺経塚・矢別遺跡』兵庫県教育委員会　1999年
40. 『平成9年度　年報』兵庫県教育委員会　1998年
41. 『京都府遺跡調査概報　第37冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター　1990年
42. 『瓦谷古墳群』京都府埋蔵文化財調査研究センター　1997年
43. 『日本の古代遺跡　43　石川』保育社　1990年

図　版

図版 2

奥才古墳群と講武盆地（南から）

56号墳第１主体部（西から）

56号墳第２主体部（西から）

図版 4

57号墳第１主体部（北から）

60号墳全景（北東から）

61号墳全景（北東から）

67号墳主体部（北から）

図版6

62号墳全景（北東から）

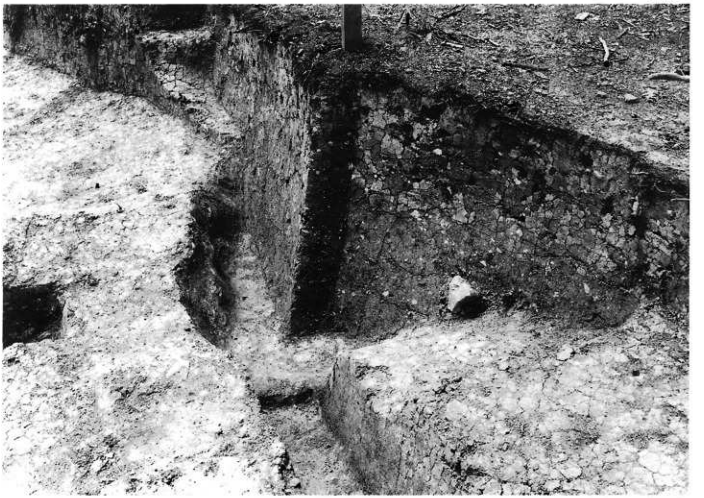
64号墳全景（西から）

2号道全景（北から）

図版 8

2号道上面盛土状況（東から）

1号道全景（北から）



55号墳主体部（北東から）

56号墳第２主体部検出状況（西から）

図版10

56号墳全景（南西から）

56号墳第1主体部横断土層（南西から）

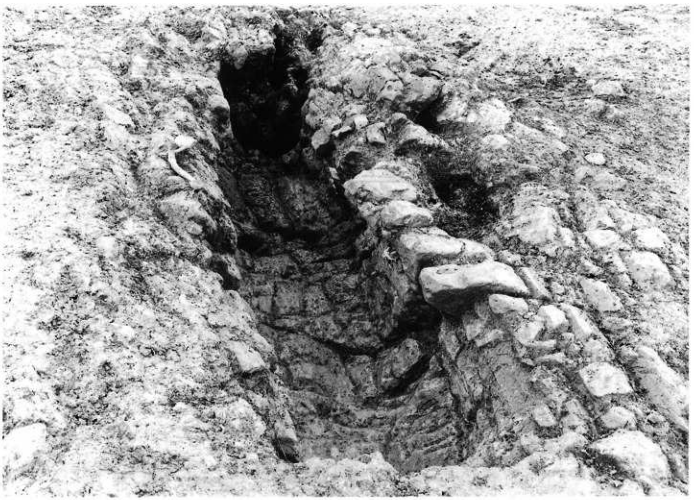
56号墳第1主体部
縦断土層

56号墳第1主体部
鼓形器台出土状況

56号墳第1主体部
鉄鎌出土状況

図版12

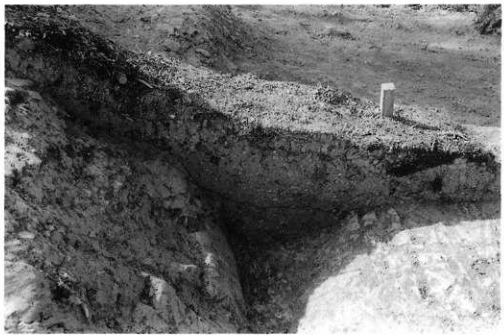
56号・68号・57号墳丘（東から）



68号墳主体部（南東から）

68号墳
蓋石、鉄斧出土状況

68号墳主体部
検出状況（南西から）



56号－68号墳側
周溝

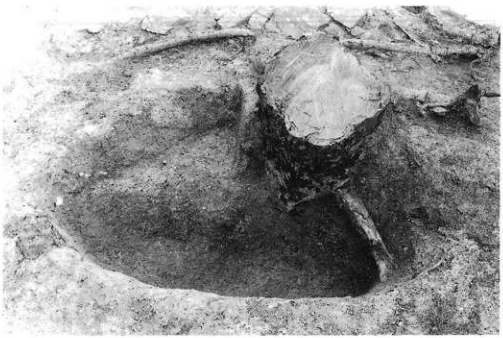
図版14

番外1号墓検出状況（北東から）

番外1号墓掘上状況（北東から）

57号墳第１主体部
土器枕出土状況

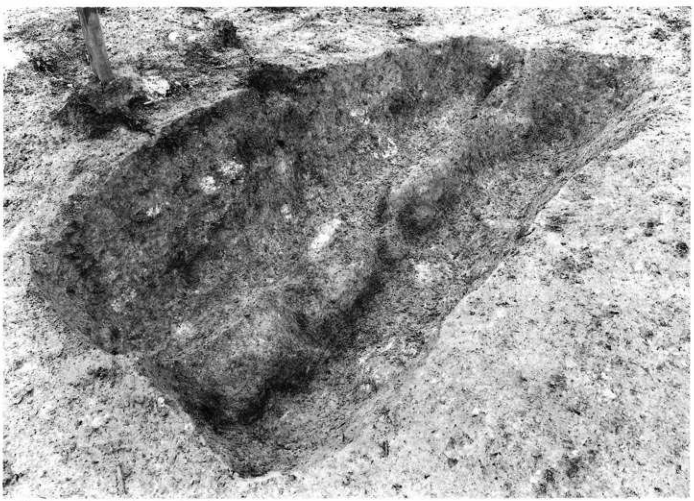
57号墳第２主体部
検出状況（北から）



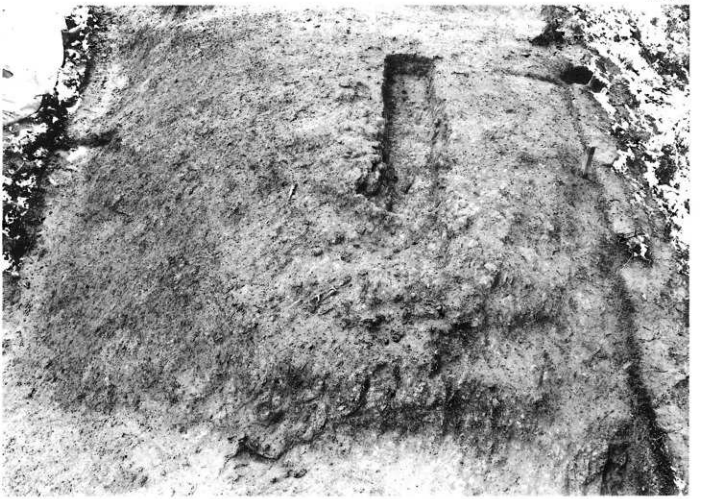
57号墳第２主体部
掘上状況（北から）

図版16

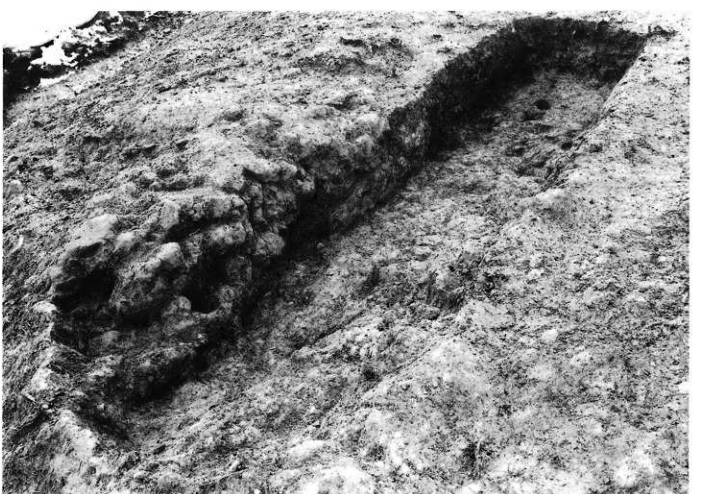
58号墳第１主体部（南東から）



58号墳第１・第２主体部（北西から）



59号墳全景（北東から）

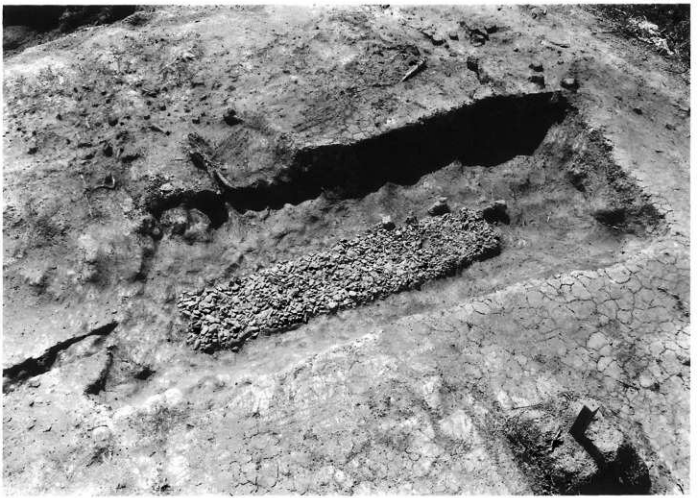


59号墳土体部（北から）

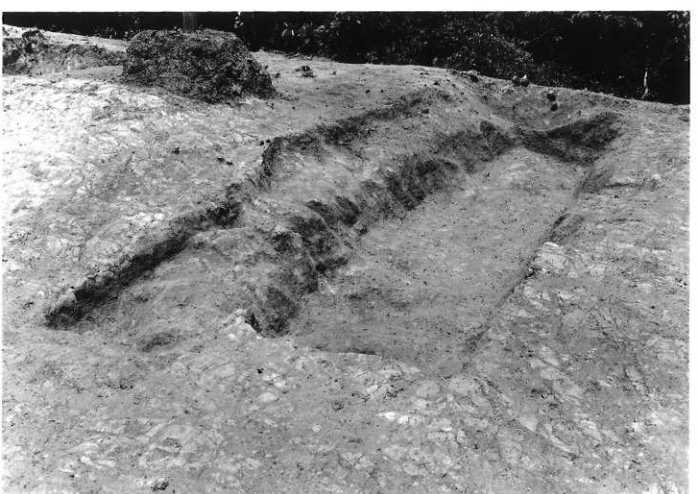
図版18

60号墳主体部（西から）

60号－61号墳間周溝



61号墳第１主体部（東から）



61号墳第２主体部（東から）

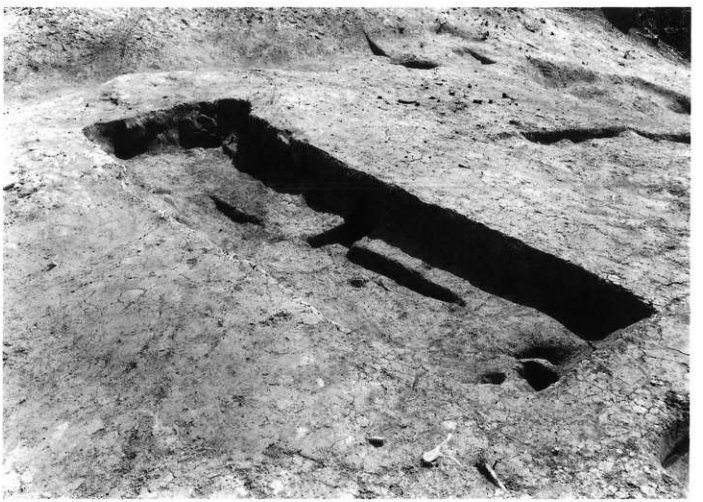
図版20

61号墳第１主体部
礫回収作業

61号墳第３主体部（北から）

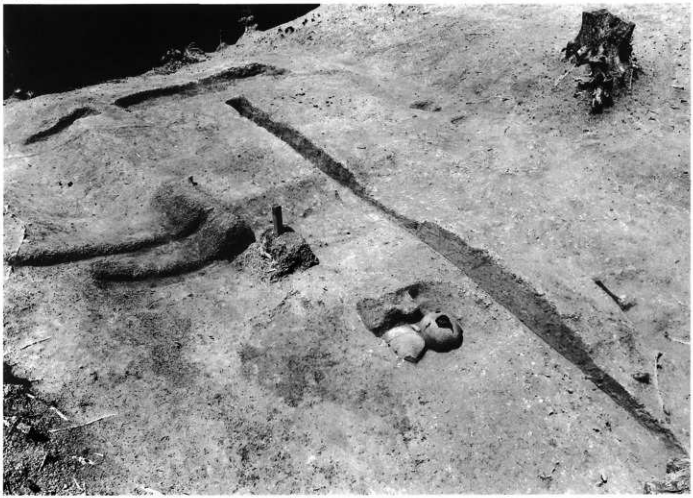
58号・59号・60号・61号墳丘
（南から）

65号墳全景（西から）

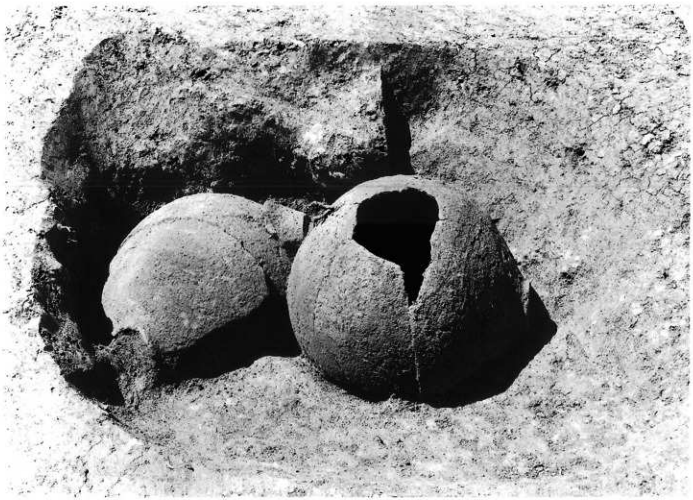


65号墳主体部（西から）

図版22



65号・67号墳墳丘（南から）



67号墳主体部（南から）